僕等のバラッド

友絵少尉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕等のバラッド

【Ｎコード】
Ｎ１５９９Ｏ

【作者名】
友絵少尉

【あらすじ】
高校生の黒塚凜と詩本龍子（しほんりようこ）は従兄同士だ。大学生のアルを慕っている。龍子は、超自然的な光を使う子供に殺されそうになる。間一髪助かり、子供は自殺する。子供は、？カルマびと？という不老不死の異能者に憑依されていた。カルマびとの使う光の正体は人の死霊だ。彼らはこれを使役霊にして闘う。カルマびとは人から人へ憑依する時、元の肉体が死なねばならない。龍子を襲ったのは人類を狙うカルマびと、父祖の戦列だ。アルとルカは、彼らと闘うカルマびと、ローマ教皇直隷（ない）内・外赦院（がいしゃいん）十字軍団員だった。凜はルカか

ら、覚醒してないカルマびとだと告げられる。十字軍は、凜と龍子を護るべく〈人身保護計画〉を発動するが……。第１６回電撃小説大賞で２次落選の作品、恥を忍んでＵＰします。

1　ある日の日常　その1“ジク・チュン・チョイ”（前書き）

本作品は第１６回電撃小説大賞に投稿しました。第1次選考を通過しましたが、チカラ及ばず、２次の壁は破れませんでした。

1　ある日の日常　その1“ジク・チュン・チョイ”

なんとしても目の前の凛々しい少女の顔面を一発ぶん殴ってやる、黒塚凛（くろづかりん）は思った。

少女が間合いを詰めてくる。少女の両手の総合格闘技（MMA）用のパンチンググローブ。色はレッド。いつもこの両手の動きに幻惑される。せめて一発ぶちかましてやりたい、きょうこそは。

彼女の両手がゆらりと動く。トラッピング、フェイントの一種だ。そう見せかけて足技がくるかも知れない。自分もトラッピングをしかけてやる、気持ちがはやるけれど体が動かない。

凛は口中の渇くのを感じた。怖い。自分を叱咤する、男の誇りを見せろ、攻めろ、と。

凛は一気に踏み込んだ。左のリードパンチを繰り出す。

少女の左手に素早くはじかれた。右の縦拳がきた。凛の顔面にヒットした。

しまった。パクサオという技――。

思った瞬間、少女はストレートパンチの連続打ち（ジク・チュン・チョイ）を猛烈にたたき込んできた。

凛は打ちのめされてマットの上に倒れ込んだ。

「凛兄（リンニィ）、サイテーッ」少女が笑った。一瞬前の獲物を狙う豹のような精悍さは微塵もない。

「ちっきしょう、おまえが速すぎるんだよ」凛は唇を噛み締めた。

「そこまで、リン、リョーコ、よく頑張った」大人の男の声がリングに響いた。

「アルさん、凛兄は努力が足らないと思います」リョーコ――詩本（しほん）龍子（りょうこ）がくすりとしながらいう。ロングヘアを束ねたヘアゴムを外す。髪をうるさげにかき上げた。

栗色の澄んだ大きな瞳が、勝利のよろこびだろうか、ひときわ輝いて凛には見えた。

痩せた若者がリングに入ってきた。一九〇センチはあるかと思う長身に濃いブルーのトレーニングウエアを身につけている。軽くパーマのかかった黒い髪。

いかにもヨーロッパ系というか、要するに大人の色気のある男だ。

「アルさん、なんで詩本は女のくせにあんな動きができるんだよ」

凜は坐り込んだままいった。マットを拳で叩いた。

「あ、いまの女性蔑視」龍子がぺろりと舌を出した。

凜は中指を突き立てた。こういうとき指先カットのタイプのグローブは実に便利だ。

「もうマジ凜兄サイテーなんだから」

「リン、いつもいってるだろ、師祖（シジュ）の言葉を」

「考えるな、感じろ、だろ。もうおれにはむずかしくってわっかんねえよ」

「焦るな、リン、截拳道（ジークンドー）も人生もおなじ、一歩一歩進んでいくんだ」

〈截拳道〉――天才武術家ブルース・リー師祖の編み出した格闘思想だ。詩本龍子はその魅力の虜になっている。彼女はリーを敬愛し、そして、そう、アルさんに対しても……。

「ほら凜兄、立ってってばっ」龍子が手をさしのべてきた。

薄手の紫のタンクトップ。汗で体に張り付いている。

高校一年の少女らしい胸のラインがはっきりとわかる。スポーツブラの線も浮いて見えた。

凜は一瞬で目線をそらした。自分はすぐに顔が赤くなる。悟られるわけにはいかない。

凜は自分で立ち上がった。

素直じゃないんだから凜兄は、と龍子。うるせえ、と言い返す。練習直後の興奮が冷めない。

「見てよアルさん、凜兄ってばほんと反抗期なんだから」

「こら、リョーコ、凜はキミの人生の先輩だぞ」

「たかだか歳がイッコ上ってだけだし」

「立派な先輩だ」

凜は笑いあうふたりを見つめた。ほら、やっぱりそうだ、詩本のやつ、凜は上目遣いに睨む。
「おっとふたりとも、そろそろ時間だぞ」アルがいった。
やだ何時？　龍子が時計を見た。部室の時計は夜の十時を過ぎたところだった。
「きょうはこれまで」アルが姿勢を正した。ふたりはコーチに向かって一礼した。
「オレ、またリョーコのオヤジさんに電話で怒鳴られるんだろうなあ」アルが両手を広げた。
「ごめんね、アル中オヤジには私も手を焼いてるんだ」
龍子がヘッドガードを取った。小さな整った顔があらわになった。カラーリングしていないきれいなロングヘアを細く長い指でかき上げる。
凜は見つめた。いくら見ても見飽きない顔だ。
「凜兄、ほら片付け手伝って」
ああ、と生返事を返した。三人で片付けを始めた。
八月の部室は熱気がこもっていた。
狭いにもかかわらず、エアコンはろくに効きやしない。
アルは涼しげな顔で片付けていく。
凜と龍子は汗だくになって、ようやく終わらせた。
凜にとってもっとも精神的に甘く、そして過酷な時間がきょうもやってきた。
ふたりは更衣室前でにらみ合った。ぜってえ負けねえ、私だって。ふたりが言い合う。
せえのでジャンケンした。凜が勝った。
「あーあ、まあいっか、凜兄私に勝てるのこれぐらいだもんね」
「うっせえ」
きょうは勝った。先にシャワーを浴びることができる。
負ければ龍子のシャワータイムのあいだ、凜は悶々と龍子のあられもない姿を妄想して過ごす羽目になる。この夏、どれくらい自虐

的な時を過ごしたことか。
凜は更衣室で乱暴にタンクトップとカンフーパンツ、ローライズボクサーを脱ぎ捨てた。
シャワーは全部で四つ並んである。あいだに仕切りがあってスイングドアがついている。
凜は一番手前に入った。体の汗を洗い流す。水滴のついた鏡で自分を見る。
高校二年、十七歳にして一六六センチ。細身の体躯にはなめらかな筋肉がついていた。
顔を見る。それなりに女子にモテるほうだ。ただしかっこいいとはいわれない。かならずかわいいといわれる。凜は自分の女顔が嫌いだった。男には、男の誇りがある。
大きくため息をついた。いくつバレンタインでチョコをもらおうとどうでもいい。
あいつに、あの学年イッコ下の分際で自分より三センチ背の高いあの従妹（いとこ）に勝てなくっちゃ意味がないんだ、そう思う。
凜は、アルからもらったクロスペンダント型の記章（おメダイ）を握りしめた。
中心にグリーンに光るカラーストーンが埋め込まれている。おメダイとはミッションスクールの必須アイテムだ。フランス語の記章（メダーユ）が訛ったものらしい。
元来キリスト教徒の証（あかし）だ。
洒落たデザインなので、凜たちの高校では信者でない学生でもけっこう身につけている。
「ああ、チクショウッ」
「なに叫んでんの」
声と同時にドアが開いた。
龍子がシャワールームに入ってきた。体にあざやかな赤いナイキのバスタオルを巻いている。
凜とおなじ、アルからもらったペンダントを首からさげている。
凜は呆然として見た。

龍子は一番奥のシャワーを使い始めた。仕切りは肩ぐらいまではある。シャワーを気持ちよさげに浴びる龍子の横顔と白い肩が見えた。ふたつのシャワーが軽やかな音をたてる。
「詩本、おまえ、どういうつもりだ」声をかすれさせながらなんとかそれだけいえた。
「だってきょう時間遅いし、あのクソ親父とケンカするのもウザいし」
龍子はこっちを見た。
「見ようとしたらジク・チュン・チョイ百連発だかんね、凜兄」
「うっせえ、見るかよ」
ダメだ、心臓が保ちそうにない。
凜は手早くボディシャンプーで全身を洗った。火照る。暑気が追い打ちをかけてくる。
「あのさ、アルさんから聞いたんだけど、ボクシング部、やっぱり正式に廃部だって、アルさんが大学の自治会に頼み込んだらさ、ここ当面は截拳道研究会(わたしたち)に貸してくれるって」
「そうなんだ」
「よかったね、夏休みのあいだ部室が使えるよ、それにしてもアルさんて何年生なんだろ」
「何年かは謎だけど、夏休みのあいだずっと大学に通うのかよ」
「やならいいよ凜兄、私に付き合ってくれなくっても」
――そうはいってねえ、凜は口ごもる。じゃあ頑張ってね、龍子が素っ気なくいった。
誰がやめるものか。こいつをアルさんとふたりっきりにだけにはしたくなかった。
龍子の鼻歌が聞こえてくる。今夜は〈ラヴ〉だ。ジョン・レノンのファンのあいだでも人気の高い曲だ。龍子が〈イマジン〉の次によく口ずさむ曲。凜もいつの間にか憶えていた。
「おれ、先上がるから」そういってシャワーを止めた。暑さにふらつく。〈ラヴ〉も止んだ。

「凜兄」
「なんだよ」
龍子が髪についたシャンプーの泡を洗い流した。彼女もシャワーを止めた。
シャワールームが、静寂につつまれた。
「前もさ聞いたけど、凜兄の好きなひとって」女子部の二年の――
龍子が何人か名前を挙げた。
「なんだよそれ、ちげえよ、好きな女とかいねえし」
「噂になってるし」
「知らねえって、バレンタインにチョコもらっただけだって」
ふうん、と龍子。なんだよ、と凜。そうなんだあ、龍子ははぐらかす。
「だからなんだよっ」凜の持ち前の短気が飛び出す。
「まあ、頑張りなよ、凜兄なにげにびっくりするぐらいモテるんだもん、マジで驚きですよ」
「……」
「おおっと、黒塚凜、まんざらでもないご様子。いいよねえ、私なんかこの名前のせいで陰でドラゴンとか呼ばれてるんだもんなあ、クラスで友達ヅラした女子から陰口たたかれるのは、こいつはつらいやねえ」
おまえこそ、凜は言い淀む。なによ、なあに、凜兄？　龍子は自然体で聞き返してくる。
「おまえこそ好きな奴いるんだろ、誰だよ」
うつむきながら詰問調になってしまった。ほんとうならここで龍子をフォローしてやらねばならないはずだ。彼女が陰口をたたかれているのは知っている。
それでも自分を抑えられなかった。知りたい。
「ううん、好きなヤツッといいますか、理想ともうしますか」
誰だよ、ともう一度聞いた。凜は視線を感じた。龍子のほうを見た。龍子が仕切りに両腕をのせて自分を見ていた。凜はそのほほえ

みから目が離せなくなった。
どうして、こいつはこんなにきれいな瞳なんだろう、凜は思った。
「私よりもつよいひと」
「……」
「だから、凜兄ってのはナシかな、ナシだろうなあ」
「ッカ野郎、それなら前にも聞いたよ」凜は体をボディタオルで拭き始めた。
怒りと悔しさがこみ上げてきた。前にも聞いた。だからこそ、どんなに鼻で笑われても、どんなにジク・チュン・チョイをカマされても耐えてきたんだ。
先あがるからな、凜はいった。ねえ凜兄、龍子が呼び止めた。
「あのさ、ジョン・レノンが昔こういったんだよ」龍子は一呼吸間をおいた。
「ひとの根本的な才能とは、自分になにかができると信じること、なんだってさ」
「……」
「だからさ、凜兄、もしもさ好きなひとがいるんだったら」
龍子がふたたびシャワーを浴びだした。
「あきらめないほうがいいよ、その子が自分を向いてくれるまで」
「……知らねえし、好きな女なんていねえし」
「ふうん、それは寂しい高校生活だねえ」
先帰るからな、凜がいった。なにそれ、いっしょに帰ろ、龍子はなんの気もない、そんな風にいう。きょうは用事があるんだよ、と凜は拙い嘘をついた。
「高一の女子をこんな時間においていっちゃうくらい重要な用事？
ひとりの夜道、怖いなあ」
「おめえならぜってえチカンを撃退できる、っつうかチカンが死なねえか心配だ」
凜はバスタオルを下半身に巻いた。
「っべええっだっ」龍子は濡れた髪をかき上げながら、舌を出した。

凜は、アカンベをする龍子を振り切るように更衣室へと逃げ込んだ。手早く着替えをすませた。部室に戻るとアルが携帯を操作していた。メールを打っていたようだ。誰だろう、アルさんの彼女だろうか。凜は先に帰ると告げた。アルが、リョーコを放って帰るのかといってきた。

「アルさんが送ってあげてよ」それだけいうのが精一杯だった。

デイパックをつかんで走り出した。アルの声が追いかけてくる。矛盾している。ふたりっきりにはしたくないのに。自分でもわかっている。龍子は大学へ通えるのを喜んでいる。アルに会えるのを喜んでいるんだ。ハンサムな仏系の米国人大学生に。

おれはオマケってわけだ、凜は思った。

1　ある日の日常　その2“助けて！”

大学の南門で自分のＩＤカードを警備員に提示した。
手続きをすませ足早に家路につく。
ＪＲ横浜線の八王子駅へ向かった。
真夏の夜道を走った。また汗が噴き出てきた。
聖ユリスモール修興（しゅうこう）学院大学。
誰も長ったらしい正式名称では呼ばない。単に修興大とか修大というのが普通だ。
名前が示すようにカソリック系のミッションスクールだ。
東京の八王子駅から徒歩十数分のところに広大なキャンパスを構えていた。
黒塚凜と詩本龍子の通う高等部はここの付属校だった。
無事卒業すれば自分たちは数年後にはこの大学へ進むことになる。
数年後、か。
自分と龍子はどうなっているのだろうか、そんなことを考えながら東神奈川行きの各駅停車に乗り込んだ。弱冷房が心地よかった。
汗が引いていく。
車内は空いていた。
凜は疲れ切った体をシートに預けた。反対側の窓ガラスに自分の顔が映っている。
この女顔。他界した両親はどうしてこんな名を自分につけたのだろう。
凛々しい龍子にこそふさわしい名前じゃないか。
龍子。自分はまだ、詩本としか呼べない。下の名前で呼べない。本人が嫌がっているというのもある。アルさんが下の名前で呼んでも平気なくせに。
龍子の父親が坂本龍馬の大ファンで名付けられた。龍子、とつぶやいてみた。リョーコ、龍子ちゃん、それともお龍。それはないだ

ろう、時代劇じゃあるまいし。
龍子のシャワールームでの肢体が鮮明に甦ってくる。
途端に下腹部が熱を帯びる。おい、勘弁しろよ、そう思う。いつもの考えが頭をよぎる。
彼女もまだ、なんだろうか、と。
あいつがほかの野郎と、そう考えるだけで心が冷えた。引き裂かれそうになる。
ダメだ、考えるな、凜は自分に言い聞かせた。
携帯が鳴った。クイーンの〈ウィ・ウィル・ロック・ユー〉だ。アルさんからのメールだ。
《リン、おつかれ。がんばれ、オレはおまえを応援している。リョーコをあきらめるな》
凜はレスを打った。詩本といまいっしょ？　とは打てなかった。
《おれらが中等部の時、アルさんおれらを截拳道研究会に誘ってくれたよね》
アルさんとは大学と中等部の交流会で出会った。龍子はあの頃からリー始祖のファンだった。
《おかげで詩本といっしょの時間がもてたよ、ありがとう》
自然と話題が恋バナになった。アルさんには恋人はいるの？　聞いてみた。
ウクライナにいる、長いこと逢ってない、とアル。それ、どこの国？　おい高二、地理を勉強しろ、そうレスが返ってきた。凜はイタいところを突かれて、携帯で頭をかいた。
おやすみなさいと挨拶をして携帯をしまった。
車内アナウンスが流れた。
次は紅葉ヶ丘、紅葉ヶ丘です。お忘れ物のないように――。
凜たちの通う高等部の最寄りの駅だ。自宅の長津田まではあと数駅だ。
各駅が紅葉ヶ丘に止まった。
酔っぱらった学生やサラリーマン、ＯＬらが乗ってきた。また走

り出す。この駅の近辺は、修興大学に通う学生たちのアパートがけっこう立ち並んでいる。
龍子も片思い、か。
ほっとしている自分がいた。
ウクライナ、龍子が知ったらどう思うだろうか。泣くんだ、ろうか。あいつが。そういえばあいつの泣くの最後に見たのはいつだったろう。携帯をまた見る。グループの家族のところに詩本龍子の登録がある。
メモリ番号はゼロ三個だ。
いまどうしているだろうか。
携帯は二三時半を示していた。たぶん、東神奈川行きの各駅に一本遅れで乗ったんだろう。おなじ家に住んでいるのだから。
財布にしまった二枚のチケットを出した。
きょうも渡せなかった。あいつに。
チケットには〈ベイスカイ横浜　ワンデイフルパスポート〉と印刷されてあった。跳ね踊るような筆記体で英語が書かれてあった。購入のときスタッフに意味を聞いた。
意味は〈大切なひととの想い出のために〉……。
また財布にしまった。
体が重い。両足をだらしなく開いてシートにもたれかかった。携帯のラジオ機能をオンにした。ＡＭが流れ始めた。人気女性ＤＪがしゃべっていた。
『――大浦たか子のミィッドッナイトッジャパアアンッ、今夜のオープニングはリスナーからの“ちょっとバカ話”早速いってみよう！　ええっと……ラジオネーム、トモちゃん二等兵さんから、ありゃあ下っ端、二等兵がんばれ！　さあて、ブルース・リーと黒人青年の話！　ある日リーに黒人の向こう見ずな青年が喧嘩を売ってきたんだって、リーは相手になんかしないの、したら黒人くん、怒っちゃって次の日リーの家のドアに赤いペンキで落書きしたんだってさ、それを見たリー、怒ると思うじゃなあい？』

火野という名の放送作家がＤＪの問いに相づちを打つ。
『ところがびっくり、リーは怒るどころか笑い転げて――』
ラジオ機能が切れて携帯が鳴った。
〈イマジン〉の着うた。龍子からの電話だ。凜は驚いて坐りなおした。
「詩本？」
『凜兄助けてっ』
龍子の――凜がいままで聞いたことのない――叫び声が聞こえてきた。

1　ある日の日常　その3“夜、電車、惨劇”

詩本龍子は携帯で時刻を見た。
二三時をとっくに過ぎていた。
車両には龍子を入れて三人しかいない。
凜の思ったとおり、一本遅れの各駅に乗り込んでいた。
ホームで待っているとき、父親に電話した。いつものように酒に酔った声で怒鳴ってきた。
クソ親父、と怒鳴り返してやった。龍子には厳しい父だった。
どうやら一人娘にどうやって接していいかわからないようだ。
自分もそうだ。父親との会話になにを話せばいいのか困るときが多々ある。
あんな父親だけれど、ご両親が亡くなって孤児になった黒塚凜をひきとってくれた。
凜には、酔っているときでも父は優しく接してくれる。
やさしく、か。
龍子は携帯を取り出した。なんの飾り気もない。小さな猫の人形のストラップをつけているだけだ。すこしのあいだ、ためらった。指をさまよわせてから、メールを打ち始める。
《凜兄、きょうもおつかれ！　凜兄ジークンドーなめてる？　あいかわらずトラッピングが幼稚。あんなの誰も引っかかんないよ。でも私もジクチュンチョイはちょっとやり過ぎた。ごめんね、痛くなかった？　家帰ったら顔にバンソーコー貼ってあげるからさ》……。
打つ指が止まった。こんな長文。
「めんどくさい女」
ため息混じりにつぶやいた。オールクリアした。
五年間だ。五年のあいだ、龍子はこの想いを秘めて、押し殺してきた。
今年もまた、暑い夏がやってきた。

五年前の記憶を思い起こそうとした矢先、男のいやらしい大声が聞こえてきた。
龍子は言葉にならない苛立ちをこめて右に顔をやった。
後部方向に若い男が坐っている。
男は携帯で大声を出してしゃべりまくっていた。メッシュを入れた髪を盛んにいじりながら、マジで、いやマジマジ、そういっては執拗に下品な笑いを挟む。
マジっすよ、先輩、そのオンナ、ちょい無理ウチしようとしたら泣き出しやがって、マジ俺もイラついてきちゃって、しゃべりながら大柄な体を揺すってまた笑う。
龍子はミニスカートから伸びる引き締まった長い足を固く組んだ。こういう男を見ると足を組んでしまう。無意識にスカートの端をつかんだ。そうすればミニが長くなるとでもいわんばかりに。
龍子はもうひとりの乗客に目を転じた。彼女の右斜め正面に坐っていた。
老婦人だ。歳は六十代だろうか。
小柄ですこしふくよかだ。清楚で淡いブルーのワンピースを着用している。
品性というものの感じられる女性だった。龍子は淡いアジサイの花を連想した。
彼女の目を引いたのはそれだけではなかった。片耳にイヤホンをつけている。
一瞬補聴器かなにかと思った。ちがうようだ。ハンドバッグのなかにコードが伸びている。音楽プレイヤーかなにかだろうか。
老婆とは思えない素早い手つきで携帯のメールを打っていた。柔和な表情を浮かべている。
龍子はなんとなくうれしさのようなものを感じた。歳を上手に重ねながら、それでいて時代に取り残されない。老婦人のはつらつとした雰囲気は見ていてすがすがしかった。
あまりぶしつけに観察するのも申し訳ない、そう思ったときだっ

た。
老婦人の表情が一変して厳しくなった。
一点を見据えている。あの若者のほうを――。
龍子も見た。
若者はいつの間にか押し黙っていた。
口をだらんと開けてよだれを垂らしている。
手から携帯が落ちた。
携帯から、おい、返事しろよと盛んに電話の相手が怒鳴っているのがうっすらと聞こえた。
若者は突然激しく痙攣をはじめだした。手足、顔、全身が小刻みに震えている。
龍子はとっさに立ち上がろうとした。
やばいクスリかなにかを飲んだのかも知れない。
老婦人のほうが俊敏だった。
まるで龍子を守るかのように若者とのあいだに立ちふさがった。
「あなたは近づいてはいけません」
婦人は力のこもった声でいった。
「あの、おばあさん、乗務員を呼んだほうが……」
婦人の身のこなし。格闘技をやっている龍子だからわかる。この人、なにか訓練を積んでいる、そうじゃないとできない動きだ。
若者の両眼、鼻から血があふれ出した。
龍子は悲鳴を上げそうになるのをこらえた。
婦人がカプセルのようなものをピルケースから取り出した。数個を口に含んで噛み下した。
若者がこちらを見た。必死の形相を浮かべていた。先ほどまでの男のものではなかった。
まるで別人だ。
叫んだ。外国語だった。
龍子は英語は得意だ。英語の発音ではない。ヨーロッパの言語ではないだろうか。

「ＳＨＩＤＵＥ！」と「ＨＯＬＤＥＮ！」だけ聞き取れた。
人の名前か。
婦人が応えた。おなじらしき言語で若者に語りかけはじめた。
婦人は「ＨＯＬＤＥＮ？」と質問口調で話している。
龍子は呆然とただ見ていた。さっきまで下品な日本語で話していた若者がいま、見知らぬ老婆と外国語で苦渋の表情を浮かべながらしゃべっている。これは、いったい――。
不意に龍子の脳裏に、サッカーセリエＡの選手たちのインタビューが描き起こされた。
そうだ、これは、イタリア語なのでは……。
婦人は若者のそばに駆け寄った。
システム手帳とボールペンを取り出してなにかを書き留めている。
若者はさらに「ＲＹＯＵＫＯ・ＳＩＨＯＮ」「ＲＩＮ・ＫＵＲＯＤＵＫＡ」の名前を口にした。
龍子はたしかに聞き取った。若者は龍子をちらっと見た。
龍子は息を呑んだ。どうして自分と凜兄の名前を知っているのだろう？
後ろの車両とつながっているドアが乱暴に開かれた。
龍子たち三人が一斉に見た。
男の子が立っていた。小学生高学年ぐらい。
男の子の表情はとても小学生のものではなかった。
あまりにも禍々しい嘲笑を浮かべていた。血涙を両の目から流していた。若者とおなじだ。
「逃げましょう詩本さんっ」
婦人が龍子の手を引いた。ものすごい腕力だった。
「おばあさん、私の名前、なんで」
「説明してる暇はないのっ」
男の子は龍子を見た。
「見つけた、リョーコ・シホンッ」
男の子はぎこちない日本語でさもうれしそうにいった。

婦人は一六九センチの龍子を軽々と抱きかかえて前方車両に走り始めた。
龍子は見た。男の子の両手が――蛍光塗料でも塗っているのかと思うほどに――暗赤色の、異様な光を放っていた。龍子はなぜか鳥肌に襲われた。
若者が立ち上がった。
「ははっ、無駄だホールデンッ、貴様の？守護霊？はもう死にかけて、いや、霊が死ぬ、いやはや、こんな日本語は笑えるぜ」
男の子がさもおかしそうに嗤(わら)った。
声質はたしかに少年だ。その野卑な口調は下品な中年男そのものだった。
男の子の体全体を青白色の青白い神秘的な光が包み始めた。手の光とはまったくちがう、清浄さをたたえた美しい光だった。
若者も体全体におなじような青白色の光を身にまとった。
両手には、男の子とおなじ、暗赤色の光。
けれどどちらの光の強さも男の子のそれとくらべて遙かに弱かった。
若者が振り向いた。血涙を流しながらも、それでも笑顔を浮かべていた。
イタリア語で叫んだ。婦人と、そしてたぶん、龍子に対して叫んだ。なにかを。
「泣かせるじゃねえか、ホールデン、ところで俺のニッポン語はどうだ、上手えだろう、ゴウニイッテハゴウニシタガエ、だ」
婦人は前方車両に移るとドアを閉めた。龍子を下ろす。
「詩本さんこれを」
龍子にメモを渡した。システム手帳から破られた薄いブルーのメモだ。
「絶対になくさないでちょうだい」
自動アナウンスが流れはじめた。次は紅葉ヶ丘、紅葉ヶ丘です、お忘れ……。

「私にもこれくらいはできます」
婦人の体から、若者とおなじような青白色の光がゆらりと陽炎のように立ち上った。
「詩本さん、もうすぐ駅よ、駅のホームまで逃げのびてちょうだい、人の大勢いるところにいけば安心よ、奴は正体の露見を嫌がるわ」
そういって携帯を操作した。なにか、短いメールを打ったようだ。それから左手にあの赤い光を出した。携帯電話やハンドバッグの中身を左手で触る。触れられた物は溶けていった。
「おばあさん、あの」
この人は、いったい、この人も、光を……。
「あなた方は、私たちの希望の星です」
婦人は柔和な笑顔、つい先ほどまで龍子がメールを打っていた、平和な日常だった頃の顔にもどった。龍子をなんとしても落ち着かせよう、そんな決意が見て取れた。
男の子が若者の巨体を一撃で吹っ飛ばした。車内に鮮血がほとばしった。
龍子の足から力が抜けた。
へたり込んでしまった。
「詩本さん、お願いだから逃げのびてっ」
婦人が叫んだ。
龍子は首を振りながら後ずさった。まるで力が入らない。
男の子はなにかをしゃべりはじめた。すると若者の屍体からなにか暗緑色の光る人、のようななにかが抜け出てきた。
男の子がしゃべり終わると、緑色に光るそれは男の子の体に吸い込まれて消えていった。
男の子が車内を突進してきた。
小さな右の拳が、分厚いドアの窓ガラスを軽々と突き破った。
拳にあの赤い光を宿している。
「おお、ババア、？眷族？の分際で俺様に逆らうつもりか」
男の子の声から嘲笑が抜け落ちて怒気をはらみはじめていた。

男の子、だったそいつは左のサイドキックの一撃でドア全体を龍子たちのほうへたたき飛ばした。
今度は左足の先端にあの赤い光が集まっていた。老婦人は、飛んできたドアの破片をはじき返した。
そいつは老婦人に容赦ない蹴りを加えてきた。老婦人の青い光が衰える。
「しぶてえ、さすがはアルフォンスの眷族といったところだな」
そいつは左手に暗赤色の光を集中させた。ひときわおぞましく光った。
「これでどうだ」
仁王立ちになっている老婦人のボディに向かって強烈な左ストレートを打ち込んだ。
老婦人の体が数メートル吹き飛ばされた。
龍子の手前に倒れ込んだ。
息絶えていた。

1　ある日の日常　その4“スカラワンガ”

各駅停車がゆっくりと減速して止まった。
そいつが龍子に襲いかかろうとしたとき、体の動きが急に軋んだ。光が消えた。
自動ドアが開いた。学生やら酔客やらが入ってきた。
「なんだ、こりゃあっ」
学生のひとりが大声を上げた。ＯＬが悲鳴を上げた。
龍子はまるで呪縛が解けたかのように駆けだした。
片方のローファーが脱げた。紅葉ヶ丘のホームに逃げ出した。メモをスポーツバッグのサイドポケットに入れた。携帯を夢中で取り出す。なにも考えずに相手にかけた。
『詩本？』
「凜兄助けてっ」
涙が止まらなかった。
『どうしたんだ、詩本、いまどこだ、なにがあったっ』
そいつはホームにゆっくりと歩みを進めた。
「なんてこった。このガキの体、よっぽど相性が悪かったのか」
イタリア語でさも無念そうにつぶやいた。
体を引きずって歩いていく。左足と右腕から急速に壊死が始まっていた。
「ねえ、坊や、だいじょうぶか」
酔った学生が声をかけてきた。人なつっこそうな顔に心配する表情が浮かんでいる。
そいつは学生を見た。
「よし、次はおまえにしよう」
そういったそいつの薄笑いが突然引きつった。
「おまえ、それをどうやって手に入れた？」
「え、なに？」

「尻のポケットの中身だ、緑に光るものがあるだろうっ」
学生はいわれるまま、チノパンからポケットティッシュを取り出した。裏の広告の印刷された厚紙が、おそらく蛍光塗料でも塗ってあるらしく、ほんのりと暗緑色に光っていた。
「おまえ、誰からもらった」
「あの、駅のホームでキャンペーンとかいって外人のニーチャンからもらったんだけど……」
「……余計な真似を、若僧、きょうのところは命拾いしたな」
そいつはまわりを見渡した。
「ちくしょうめが、どいつもこいつも持ってやがる……こいつは、ルカの仕業か」
そいつは龍子のほうを見た。
倒れていた。すでに人垣に囲まれている。この時間帯の紅葉ヶ丘駅にしては、ホームに不自然なくらい客が多かった。
そいつは舌打ちして、左手で携帯を取りだした。イタリア語でしゃべり出した。
学生は唖然とした。そいつの右腕に広がっていく赤紫と黒色の壊死の傷口を見た。
学生はＩＣレコーダをポケットからあわてて出した。
「俺だ。失敗した。いまの体がもう保たねえ、次を探したら、周囲の人間どもが皆、憑依されてやがる。うるせえな、次こそはかならず、俺の眷族さえそろっていたら列車内で挟み撃ちにできたんだよ……俺も手駒不足なんだ……これからまた自殺だぜ。きょうこれで四回目だ、おう、じゃあな」
そいつは反対側のホームへと向かった。
「ふん、宣戦布告をしてやろうか、この国が初めて第？列級の祝福を受けるのだからなっ」
そいつはいうと、右手からしたたり落ちる血液でホームの床になにかを書き始めた。
〈？……ス、カ、ラ、ワ、ン、……ガ〉

「おい若僧カタカナってやつはこれでいいのか」
学生は怯えながらうなずいた。
各駅停車が駅に入ってくるところだった。警笛が鳴った。
「まったく、自殺の痛みというものには慣れることはねえや」
つぶやくと線路に飛び降りた。
警笛が虚しく鳴り響いた。
「やめろっ、坊やっ」
学生はＩＣレコーダを持つ手を震わせながらホームにへたり込んだ。
――龍子は階段のところまでいって転倒していた。頭をしたたかに打ちつけた。
携帯からは凜の叫び声が聞こえてくる。
「ねえ君、どうしたの、ケガとかしてない」
背の高い痩せた学生が走り寄ってきた。
龍子は意識が朦朧としてきた。なにか一言二言学生に話そうとして、気を失った。
「あれ、詩本ちゃんじゃねえかよ、ヤベえ、服に血イついてっぞ」
痩せた学生が驚いた。
ほかにもサラリーマンや駅員が駆け寄ってきた。
学生はちょっと迷ってから携帯で一一〇番と一一九番にそれぞれ通報した。
「おいタツッ」
学生は通報を終えると、ＩＣレコーダを持った学生に駆け寄った。
「ノリさんヤベえよ、どうしよう」
「どうしたんだよ、男の子はどうしたんだよっ」
「俺の見てる前で、なんか知らねえ言葉しゃべり出して、線路に飛び込んじゃった」
「タツ、おめえきょう呑みすぎたのか、あ？」
「マジっすよノリさん、ちゃんと記録したし、それに、見てよこれ」
血文字を指さした。

「なんだよ、これ」長身の学生が口に手を当てた。
「坊主が飛び降りる寸前書いていったんだ、自分の血でさ」
涙声になっていた。
震える手にはＩＣレコーダが握りしめられていた。
紅葉ヶ丘駅はパニックの様相を呈していた。上下線とも運転休止となった。
狭い構内に駅員たちと乗客の悲鳴、怒号が交錯していた。

1　ある日の日常　その5“旧友の夢”

詩本龍子は頭をやさしく小突かれた。無意識に手で払いのけた。眠いの、放っておいてくれない？　龍子は声に出さずに口だけ動かした。

声が聞こえてくる。起きろ、といってくる。この声は、たしか……。

「もう、詩本ったらなにねてんの」

聞き覚えのある声。いや、この五年間、忘れることのなかった声だ。

「うん、ねむい」龍子は瞳を開けた。ベッドサイドに頭を預けて眠りこけていたようだ。

「人の病室きてさ、おみまいの人が先にねてどうすんの」伊丹かぬかがいった。

「ごめん、伊丹」龍子はゆっくりと上半身を起こした。パイプ椅子に坐った体の節々に痛みを覚えた。軽く伸びをした。

「いたいっ」全身に気怠い痛みを感じる。小さな体で周囲を見回した。個室の病室だった。

かぬかのベッドは窓際に配置されていた。窓から夕日が見えた。エアコンのおかげで室内は涼しかった。外はさぞかし夏の熱気で蒸れていることだろう。

かぬかはベッドの中でクスッと笑った。

「ゆめでも見ていたの詩本」

「うん、私高校生になってた」

「なにそれ、ひとりだけずるいなあ」

「ゆめだよ、ゆめ」

そっか、ゆめか、かぬかはつぶやいて、タンブラーに入ったリンゴジュースを一口飲んだ。

「食べる？　マスクメロンだよ」

「うわすごいねえ、誰のおみやげ？」
「それが、私のねてるあいだに置いてあったの、誰かな」
ふたりはメロンを切ると美味しい、甘いを連発しながらぺろりと平らげた。
かぬかは、ベッドの上においたノートパソコンを見た。ディスプレイパネルの背面にはラベルプリンターで〈聖ユリスモール学院初等部五年ナザレ組　伊丹かぬか〉と表示されてあった。
「これ見て詩本っ」かぬかはディスプレイを見せた。メールソフトが起動されていた。
ナザレ組のクラスメイトからのメールがいくつも寄せられていた。《糠漬けはいつになったら死ぬの？》《糠がいい具合に浸かりつつあります》あたたかい応援のメッセージもあったけれど、かぬかの下の名前を小馬鹿にしたものが多かった。
「マジ、パソコンとかって便利だよね、習ってない漢字も変換で一発だもん」
かぬかがふん、と負けないといわんばかりに言い放った。
「なにこれ、うちのクラスサイテー」龍子はムカついてきた。
「ほおんと、名前でソンするのなんてやだよねえ」
「私だってさっそくついたあだ名がドラゴンだよ、いやんなっちゃうよ」
「ガキってやだよねえ、とくに男子」
「そうそう、そうだよね」
「でも私、黒塚くんはやさしいから好き」
「……」
「もう、詩本たらわかりやすすぎなんだから」
「え、そんな、私は」
「前からさ、ずうっとアヤしいとはにらんでいたんだ」
「凜兄はイトコだよ、血がつながってるんだよ」
「なあんだ詩本、イトコ同士ってケッコンできるの、知らないんだ」
「ほんとっ？」龍子は身を乗り出した。

「ほら、詩本、わかりやすすぎ」かぬかは笑い出した。
龍子は顔を赤らめた。
「詩本はいいよね、黒塚くんといっしょの家に住めてさ」
「……それは、凜兄の事情があるから」
「うん、知ってる」かぬかはジュースを飲み干すと妙に大人びたため息をついた。
「黒塚くん、つらいよね、まだ私たちよりひとつ上でしょ、それでもうひとりぼっちなんだよ」
龍子はうなずいた。かぬかは窓の外を見た。
「最近ね、先生やカンゴフのお姉さんたちが変にやさしくしてくれるんだ」
龍子のほうを見ずにいった。
「私の手術ね、すんごいお金がかかるんだって、パパ、初等部から大学までの人たちにお金をくださいってたのんだみたい、でも集まってないみたいなんだ。うちの学校、お金持ちばっかりきてるくせにさ、高等部の神父さんがたのんでるのに、誰も出してくれないんだよ」
龍子はなんといっていいのかわからなかった。小学五年生にとってあまりにもつらすぎる現実だった。ただ悔しかった。かぬかのベッドのシーツの端を握りしめた。
「この前ね、黒塚くんがおみまい、きてくれたんだっ」かぬかは一転して明るい声でいった。
「この子を持ってきてくれたんだっ」猫用のキャリーバッグをベッドの下から引っ張り出した。
仔猫だった。何色というんだろう、光沢のあるグレーの毛並み、美しく耳の大きい仔猫だ。
バッグのなかですやすやと眠っている。
「ロシアンブルーっていうんだってさ」
「ええ、病院にペット持ってこれるの」
「……もちろん駄目だよ、パパがね、先生と話したの、そうしたら

面会時間中に病院に持ってきて、時間内に返せばいいっていってくれたんだ、不思議でしょ、普通はもっと厳しいんだよ」
「よかったね、伊丹」龍子はこのとき病院がただ好意で許してくれたのだと思った。
「私の宝物なんだ、黒塚くん、偶然道に捨てられてたのを拾ってきたんだって、ひどいことするやつっているよね、こんなちっちゃい子を捨てるなんて」
「そうだね」
「黒塚くん、私の気持ちに気づいてくれていたのかな、だからくれたのかな」
「……」
「……私の死んだあと、詩本、この子を世話してくんないかな」
「伊丹……」
「もうひとつだけお願い、詩本、私が死んだらすぐに、黒塚くんにコクるっていうのだけはナシにしてくれるとすんごいうれしい」
「伊丹っ、死ぬなんてそんなこといっちゃダメだよ」
「じゃあ詩本、約束してくれない？」
龍子はうなずいた。
「さっき高校の夢見てたっていったよね、だから、そうだな十六歳になってからコクってくんない？　あ、でもそれよりも前に黒塚くんのほうから詩本にコクってきたら絶対ＯＫしてね」
「……わかった、約束するから、死ぬとかそういうこといっちゃダメだからね」
「黒塚くん、詩本となら、お似合いだから、ほかの女子にはわたさないで、おねがい……」
「伊丹……」
かぬかはうつむいた。涙を流しはじめた。龍子はあわててハンカチで拭こうとした。
「伊丹？」
かぬかは心臓のあたりを抑えはじめた。顔が苦痛に歪んでいる。

龍子はあわててナースコールのボタンを押した。
「伊丹っ、先生呼んだからしっかりしてっ」
かぬかは痙攣を起こしはじめた。
「伊丹っ」
医師や看護師たちが駆けつけてきた。君は下がっていなさい、そういわれて病室の外に出されてしまった。龍子はかぬかの姓を何度も叫びながら病室のスライドドアを叩いた。

2　二日目　その1“病院”

――伊丹、と龍子はいった。目を醒ました。天井が見える。龍子はぼんやりと周囲を見た。

「詩本、しっかりしろよ」黒塚凜が龍子の肩をそっとつかんだ。

「……凜兄？」個室のベッドで寝ていた。ゆっくり、上半身を起こした。

「スゲえうなされてたぞ、おまえ」

「……ここ、どこ？」照明の蛍光灯がやけに眩しく感じた。眼を開けているのがつらい。

「紅葉ヶ丘総合病院だよ」

龍子は呆けたように病室を見渡した。カレンダーがかかっている。……夢を見ていたようだ。五年前の夢を。着せられたTシャツは寝汗で濡れていた。胸元のラインが美しく浮き上がって透けて見えている。凜が目をそらしてうつむいた。顔が見る間に赤くなる。

龍子は察してベッドの中にもぐり込んだ。頭が脈打つように痛かった。体の至る所にも痛みを感じた。うまいこと頭が働いてくれない。まとわりつくシーツが不快だった。

飲み物ない？　龍子がいった。凜はすぐにポカリスエットを出した。龍子は何口か飲んだ。

凜兄、いま何時？　小さな声で訊ねた。五時だ、と凜。夕方？――凜はかぶりを振った。

「いま明け方の五時、ここに担ぎ込まれてまだ五時間ぐらいっきゃ経ってねえや、おまえずっとうなされてたぞ、眠り浅そうで、それで」

「……ずっとそばにいてくれてたんだね」

「そりゃあだって、すげえ心配したんだぞ」

ねえ凜兄、龍子が見つめてくる。うん、なんだ？　凜は心のこもった声で応じた。

「握っててくんないかな、悪いけど」龍子は左手をさしのべた。震えていた。
凜は即座に両手で握りしめた。
龍子は泣きそうになった。涙は流れなかった。なぜだろう、凜兄の前だと泣くことのできない自分がいた。やがて、記憶が一気に押し寄せてきた。五年前の伊丹かぬかの死の夢がそれにさらに追い打ちをかけてきた。いまになっても時折見てしまう夢だ。
「電車でね、何人もね、人が死んだの」
「うん……でも、おまえが無事でマジでよかった」
最初に若者、次にあの上品な老婦人。婦人は自分にメモを渡してくれて……。
龍子は飛び起きた。
「凜兄、私の私物は？」
「おまえの着ていた服は血がついてて調べるからって警察が持っていった、おまえのバッグは」
凜はそういって個室の隅に置いてあった赤いスポーツバッグを持ってきた。
龍子は夢中になって中身を漁った。パンチンググローブ、ヘッドガード、タオルが数枚、携帯電話……ポーチに入れた生理用品、化粧道具、着替えのタンクトップや下着も出す。
「凜兄、なに赤くなってんの」
「だっておまえ」
「凜兄サイテー、オトコってほんとに、……いいからメモを探すの手伝ってよっ」
「なんだよメモって」そういいつつ凜の目は龍子の下着類に釘付けになっている。
どこにしまったんだろうか。あのおばあさんが命を賭けて渡してくれたメモだ。それからあの若者。……ホールデン？　死ぬ間際自分たちに向かって笑いかけてくれたっけ。夢じゃない、決して、龍子は思った。それとも自分は気が触れてしまったんだろうか？

「ない、どこ」龍子はいくつかあるサイドポケットのジッパーを片っ端から開けていった。
メモさえ見つかれば。ほんとうのことだったと思える。泣きながら凜兄にすがってベッドの中で縮こまっていれば、どれほど楽だろう。でもダメだ、ふたりの死を無駄にするわけにはいかない。自分を助けてくれたあのふたりを。メモさえあれば、正気を保てる、そんな気がした。
――あった。システム手帳から破られた薄いブルーのメモ用紙だ。日本語で走り書きがしてあった。
〈ニッコウギン　新横浜支店　名義ウイリアム・ホールデン　貸金庫？〇六八　暗唱七三九二　ＵＳＢメモリ　代理人詩本のみ　アンツィオ作戦は危〉そこまで書かれてあった。
龍子はじっと見入った。
「なんだ、なんて書いてあるんだ」凜がのぞき込もうとした。
龍子は凜にも見せようとした。けれど――代理人詩本？のみ？……。
……。
メモをたたんだ。
「なんだよ、見せてくれよ」
「ごめん凜兄、私宛のメモだから」
凜は不服そうだったけれど、一応納得した様子でパイプ椅子に坐った。
「なあ詩本、しまってくんねえか」凜は下着のほうを横目で見ながら気まずそうにいった。
龍子は、ほんとにオトコって、といいながら手早く片付けた。
「凜兄、警察は私のバッグ、調べてない？」
「うん、だと思う」
「メモのことは誰にもいわないで欲しいの、お願い」
「そりゃあ、わかったけどさ、なんかおれ不安だよ、おまえ、なんかテロリストに狙われるような事でもしたのかよ」
「テロリストって」

「四時からのワイドショーでばんばん流れてっぞ、紅葉ヶ丘駅の大惨事っつってさ」
「テレビッ、つけて」龍子は病室の隅にある液晶テレビを指さした。
凛はリモコンを手にとった。〈テレビかながわ〉が映った。女性キャスターの声。
『……繰り返しお伝えしておりますように、昨日午後十一時過ぎ、ＪＲ横浜線の東神奈川行き各駅停車内で爆発が起こり五両目の後部ドアが破損しました。列車は紅葉ヶ丘駅で停車し、横浜線は上下線とも運休となっております。警察ではテロとの見方を強めており……』
爆発、テロ。世間ではそう捉えられているのか。
『三人が死亡しました。犠牲となったのは――』三人の氏名と年齢がテロップで流された。
《大谷しづゑさん（六二）赤星剛さん（二四）内田広大（こうだい）くん（十二）》
しづゑさん、あの若者、いや、ホールデンさんが叫んだ名前だ。赤星、これが若者の本名か。そして小学生。――どういうわけだろう、ふたりを殺したあの――。
?見つけた、リョーコ・シホンッ?龍子は両手で耳を押さえた。いまもあの声が耳にこびりついている。――怪物も死んだというの?
「詩本、だいじょうぶか、テレビ、消そうか」
「だいじょうぶ、凛兄、消さないで」体の震えが止まらない。目を逸らすわけにもいかない。
「凛兄、男の子、この内田くんて子の死因についてニュースでいってなかった?」
「ああ、たしかホームの反対側に転落したっていってた」
転落……。わからない。わからないことだらけだ。鍵はそう、この手のなかのメモのみだ。
病室のドアがノックされた。
婦人警官が、徹夜なのだろうか、眠たげな顔をしながら入ってき

た。龍子の体調を訊ねた。
龍子はだいじょうぶですと答えた。体は疲れ切っていたけれど。
凜は心配げな顔をして龍子と婦警を見た。婦警がどうぞ、と外に呼びかけた。
神奈川県警の刑事たちが入ってきた。

2　二日目　その2“伊丹神父”

聖ユリスモール学院高等部は丘陵の頂に広々とした施設を誇っていた。坂道を登り切ったところに男子校舎と男子寮、さらに道を進むと女子校舎に女子寮がある。仲を邪魔するように、男子部と女子部のあいだに教職員棟をはじめ図書館などの学院の中枢施設があった。その一角に聖ユリスモール教会がある。荘厳なゴシック様式の建築物は、無神論者には威圧感を、信者には畏敬の念を抱かせるに充分な風格を備えていた。

まだ朝の七時前だというのに、日陰でないと汗ばむ暑気が立ちこめていた。

「凜兄は朝のミサなんて出たことないのに無理しなくってもいいよ」

龍子がいった。

「だっておまえのこと心配だし、それより警察になんていったんだよ」

凜は譲らない。

「焦げ臭いにおいがしたから前の車両に移った、その直後に爆発が起こった、そう説明したの」

「嘘なんだな、それ」

凜が上目遣いに龍子を見た。龍子はうなずいた。

龍子は病室で神奈川県警捜査課の事情聴取を受けた。その場しのぎの嘘をついた。

今度は警備部の外事課なんたらと名乗る刑事たちが何人も龍子の病室にやってきた。

その都度龍子はおなじ嘘を繰り返した。当然だ。ほんとうのことをいったら精神鑑定って奴が待ち受けているに決まっている。

ふたりは、学院の丁寧に剪定された装飾樹木庭園を抜けて教会の正門玄関にたどり着いた。

龍子はそそり立つゴシック建築の教会を見上げた。針葉樹林のよ

うな尖塔アーチが空高く伸びていた。龍子は数瞬ためらった後、象眼の施された正門扉を押し開けた。直射日光に慣れた目が一瞬、暗がりに戸惑い、眩暈を憶えた。本堂の広い空間が広がっていた。ステンドグラスから日光がほのかに差し込んでくる。白樺製の教会席が整然と並んでいた。

説教壇に人影があった。神父様だ。静かにふたりのほうに歩いてきた。

「これは、詩本さん、凜くん、おはようございます」

伊丹爾三郎（いたみじさぶろう）神父がいった。

伊丹神父は五十を過ぎた落ち着きのある風貌の持ち主だった。黒い僧服の威厳と温和な笑顔が対照的だった。学院経由で詩本さんの事故に遭ったことを知りました、神父はいった。龍子にいたわりの言葉をかけた。

亡くなった人々と遺族のために祈りを捧げていたところです、伊丹神父はそういって表情を曇らせた。

「祈っても死んだ人は生き返らないですよね」

凜がいった。行き場のない怒りを表すように。

「凜兄」

龍子は言葉を返せなかった。自分も、凜とおなじことを思っていたからだ。

「ええ、凜くんのいうとおりです」

伊丹神父は率直にうなずいた。

ふたりに席を勧めた。龍子と凜が坐ると、神父も席に着いた。

「私は洗礼を受けた身ですが、生まれて初めて人の殺されるところを見ました。ショックでした。信仰が揺らいでいます。人は、強くないと自分の身を守れません、ちがいますか？」

龍子は訴えた。伊丹神父の双眸を射貫くように見る。神父の表情は揺るがなかった。

「はい詩本さん、悪を滅ぼすためには強くあらねばなりません」

伊丹神父は龍子を見つめた。

殺された、凜はその言葉に驚きを示した。龍子と神父を交互に見た。
「神父様、お訊きします、相手を殺さねば自分が殺される、極限の立場にお立ちになったら、神父様ならどうなされますか」龍子は攻撃的な気持ちになっていた。激情がとまらない。
「相手を殺します」
伊丹神父はためらうことなくいった。
「信仰は、信仰はどうなるのでしょうか」
龍子はすがる思いだった。
「この世には、どれほど意を尽くしても言葉の通じない、解り合えない敵がいます」
龍子は瞳を閉じた。あの少年の、いや、怪物の叫びが生々しく甦る。
「そのような敵相手に、私如きの説教は無意味です」
伊丹神父は陰りの色を面に浮かべた。
「おれも洗礼受けたのにこんなこといいたくないです、でもいいます、信仰って無意味じゃないですか」
「……私がカソリックに改宗する前まだアメリカにいた頃、プロテスタントのルーテル派で牧師と呼ばれていたときのことです」
伊丹神父は穏やかだけれど、力強い口調でいった。
「強盗殺人を犯した人から罪の告白を受けたことがあります。その人は第二の殺人を犯そうとしました。防犯設備のないごく平凡な田舎の一軒家に押し入ろうとしたそうです。その人は窓から部屋を覗きました。お母さんと小さな女の子がいたそうです。女の子はお母さんに口紅を塗ってもらっていたそうです。あしたの日曜の教会のミサに出席することを女の子は興奮して喜んでいたと。どうやらそのためのおめかしだったようですね。犯人はそのとき思い出したと、そういいました。自分の妹も幼い頃、おなじように母親から日曜のミサのときだけ特別にお化粧するのを許してもらっていたことを――」

伊丹神父は天井を見上げた。
吹き抜けの高い天井の装飾に目をやった。目をふたりに戻す。
「犯人は、いいました。急に、人を殺すのがばからしくなったと。いまでも神は信仰していない、にもかかわらずなぜかなんとなく殺す気力が萎えた、そういっていました」
「……そんな、いい加減なもんなんですか、なんとなくとか」
凜は上目遣いにいった。
「ええ、凜くん、信仰とは人それぞれですね、なんとなく、それも信仰なんです」
「犯人はその後どうしたんでしょうか」
龍子が聞いた。
「私は警察に自首を勧めました。その人は語り終えると教会を去りました、その後どうなったのか、幾日も新聞やニュースを丹念に追いかけました……彼の情報は入ってきませんでした」
「それじゃあ、その前に殺された人たちが浮かばれないです」
凜はどうにも納得のいかない様子だった。
「はい、凜くん、取り返しのつかないことをしたら、後戻りできなくなります。人はそのまま悪の道をひた走るか、あるいは、きっかけはなんでもよいのです、別の道を選び取るか、です」
翼堂のほうから二十代くらいだろう、若い助祭がきた。伊丹神父と何事かを話す。
「ほんの少し中座します、待っていて下さい」伊丹神父と助祭が翼堂へと入っていった。
凜はそれを見守った。伊丹神父の姿が消えると龍子のほうを向いた。
「伊丹神父、きれい事いってっけど、でもぜってえかぬかのことで恨み抱いてるよ、学院の親たちにさ、寄付金が集まらなかったせいでかぬかは死んだんだ、憎んでるに決まってる」
「凜兄、それはいっちゃ駄目だよ」
龍子は胸が苦しくなった。彼女の父親も寄付をやんわりと拒んだ

のだ。
「これだけはいえる、ほんとうの善人なんてこの世にはいねえよ、詩本」
「凜兄ってば、どうしたの」
「おまえ殺されかけたんだろ、なのに警察に嘘ぶっこいてさ、おれにも話してくんねえし」
「ごめん、折を見て話すから」
「世の中悪い奴らがいっぱいいるんだ、平気で人殺して平気で飯喰って寝てるような連中だ」
「私は神父様とお話ししたくってきたんだから」
「無駄だよ、伊丹神父だって人の子なんだからさ、ぜってえ親たちのこと恨んでるに違いねえし――」凜は口をつぐんだ。
凜兄？　龍子がいった。
――遅れてすいません、伊丹神父が翼堂から声をかけて戻ってきた。
「詩本、帰ろう」凜は席を立った。顔が苦痛に歪んでいた。龍子も立ち上がった。
「神父様、朝のミサがあるのに非礼な質問をしました。お赦し下さい」龍子がいった。
「きょうのミサはあなた方おふたりのためにありました。私の話を聞いてくれてありがとうございました」伊丹神父は龍子と凜、ふたりと握手を交わした。
凜は逃げるように教会の外に出た。凜兄っ、龍子が追いかける。
「凜兄待ってっ、どうしたの、急にっ？」
「神父様に八つ当たりした、おれバカだ」
凜は、早足で装飾樹木の青々とした茂みのなかの道を抜けていく。
「私だって酷い質問した」龍子は両の掌を握りしめた。なにもいうな、凜が小声で返した。
龍子は、ふと、名残惜しむように教会のほうを振り返った。
伊丹神父は教会の外に出てふたりを見ていた。遠目にも穏やかな

顔をしているのがわかる。
龍子は立ち止まった。つられて凜も振り返る。ふたりは、ただ、神父を見つめた。
伊丹神父が右手を高く上げた。やさしく振ってくれた。
龍子は突然、叫びだしたい衝動に駆られた。代わりに手を振って応じた。
――神父様、叫ぼうとした。
「すいませんでした、それから、説教悪くなかったよ神父様っ」凜が先に大声を上げた。
「マーティン・ルーサー・キング牧師にはかなわないけど、神父様の説教、悪くなかったよ、なんとなくだけどっ」凜は両手をぶんぶん振った。
ありがとうっ、なんとなくですねっ、伊丹神父も大声を上げた。おふたりとも、お気をつけて、お元気でっ、伊丹神父はふたりに笑顔を投げかけた。
龍子と凜は、八月の朝陽の降り注ぐ学院の装飾庭園を駆け走っていった。
凜が途中で止まった。やっぱりやだ、ちきしょう、つぶやくと走って引き返した。
「どうしたの」
「わりい、ちょっと待ってて詩本っ」教会へと走っていった。
龍子は疲れ切った体で芝生の上に坐った。直射日光が眩しかった。

2　二日目　その3“USBメモリ”

凜は神父の元へ走り寄った。
「凜くん、どうしましたか」
「神父様、その、おれ、嫌なことといっちゃって、すいませんでした」
「いやなこと、私の話のなかでそれほどいやなことなどありましたか」
「神父様の話じゃなくって、かぬかのことです」
「娘のことでしょうか、あの子のことでなにか？」
凜は伊丹神父をすがるように見つめた。神父は朗らかな表情で凜の言葉を待っている。
「いや、なんでもないです」凜はほっとした表情を見せた。
失礼します、そういって龍子のところへ再び走っていった。
伊丹神父は、名残惜しく感じながら手を振り続けた。ふたりが視界から消えてしまった。若さとは、すばらしいものだ、そう感じた。振っていた手を下ろした。指先が震えていた。
まるでアルコール依存症患者のように。何度か生唾を飲み込んだ。寂しげな表情を浮かべた。
？伊丹神父だって人の子なんだからさ、ぜってえ親たちのこと恨んでるに違いねえし？
黒塚凜の話すのを戻る途中で聞いてしまっていた。
伊丹神父の懊悩を貫き通す言葉だった。
教会の隣にある自宅へ向かおうとした。いてもたってもいられなかったからだ。
助祭がまた神父の助言を求めに声をかけてきた。体調が優れません、そういって教会の役務を助祭に一任してしまった。渇きを満たさねば……そう思った矢先だった。
人影に気づいた。己の欲望を見透かされたかのように感じて、足が止まった。

教会の建物の陰から、ひょいと長身の青年が現れた。
アルだった。
「ああ、これはアル君」
伊丹神父は狼狽を隠しながら挨拶の言葉を述べた。アルも丁寧に返す。
「神父（ドン）・イタミ、ふたりの非礼、どうかご容赦を」
「非礼など、そのようなことはありません」
僧服からハンカチをとりだした。
汗をぬぐう。冷や汗だった。
「ドン、なにとぞお体を御自愛下さい」
アルは唇を噛んだ。鳶色の哀しい眼を神父に向けた。
見抜かれている、伊丹神父は思った。
「アル君は、まだ、禁酒を……続けられているのですね」
若いふたりと話していたときの穏やかな口調とは打って変わったものがあった。
伊丹神父はアルの禁酒の理由を知りたいと常々思ってきた。
この不思議な修興大生とは何年も懇意にしてきた。アルが己の素性を語ってくれたことはついぞなかった。伊丹神父はこの青年の意志の強靱さに軽い嫉妬を憶えた。
アルは肩をすくめてイエスのサインを出した。皮肉げに口元を歪ませた。
神父に丁重な別れの言葉を述べると、龍子と凛の後を追うように走り去っていった。
伊丹神父はアルに対してもおなじように礼を尽くして見送った。喉が異様に乾いてきた。
所在なげに、視線を地に落とした。もうすぐ伊丹かぬかの命日だった。
龍子は携帯で時間を確認した。平日の十時を過ぎたあたりだ。J

R横浜線の車内は座席が埋まり、立っている乗客がちらほらといた。龍子と凜は並んで坐っていた。
「なあ詩本、新横浜へいってなにするんだよ、またヤベえことに巻き込まれんじゃないよな」
「凜兄はこなくてもよかったのに」
「だって、おまえが心配だし」
龍子だって凜のことが心配だった。もしも自分の想像が当たっていたとしたら。赤星剛というあの下品な若者は、？ホールデン？と名乗る何者かに、内田広大少年は敵対する化け物に体を乗っ取られたのだ。なぜホームに転落死なんてしたのかはわからなかったけれど。龍子はしづゑの言葉を反芻した。？人の大勢いるところにいけば安心よ、奴は正体の露見を嫌がるわ？だからこの程度の混み具合の電車を選んだ。もし凜兄が乗っ取られるようなことになったら。考えるだけでも怖ろしかった。そう、振り返ってみれば今朝の自分たちは隙だらけだった。
もうひとつしづゑの言葉を考える。？あなた方は、私たちの希望の星です？
しづゑさん、あなた方とは、私以外に誰のことを指すのですか、龍子は思った。
龍子はしづゑの死、ホールデンの死を悼んだ。赤星はともかく、内田少年の死が悲しかった。
大谷しづゑは自分の味方だった。そしてホールデンも。ふたりは互いを知っていた。ホールデンはしづゑになにかを伝えた。その内容がこのメモだ。デニムのポケットに収まっている。
〈ニッコウギン　新横浜支店　名義ウイリアム・ホールデン　貸金庫？〇六八　暗唱七三九二　ＵＳＢメモリ　代理人詩本のみ　アンツィオ作戦は危〉
ニッコウギン、日本興和銀行のことだろう。
龍子は、病院から退院したあと携帯で銀行のホームページにアクセスしてみた。貸金庫のシステムを調べた。貸金庫の名義人はホー

ルデンだ。彼でなければ基本的には開けることができない。ただし代理人に指定された者なら開けることが可能だ。それが自分のみ、だった。身分証明書が必要なため、健康保険証と高等部のＩＤカードを持ってきた。貸金庫の番号に暗証番号がこの数字だ。預けられた品物がＵＳＢメモリ――これに情報が入っているのだ。膝に抱えたデイパックの中にはメモリを見るためノートパソコンも持ってきていた。

そしてもうひとつ、なにも記録されていないＵＳＢメモリも。

そして最後の？アンツィオ作戦は危？――危険ということか。これが核心かも知れない。

龍子の携帯が鳴った。父親からだった。

「もううんざり、クソ親父何度もかけてくんなっつうの」

「たしかにおじさん、荒れてたよな」

「凜兄の見てないとこであいつ、酔って私をぶったんだから、私も殴り返してやったけど」

「おじさん、詩本のこと心配してんだよ、夜が遅いからあんな事件に巻き込まれたわけだし」

もう電源切ってやろうか、そう龍子がいったときだった。

ふたりの携帯が鳴った。〈ウィ・ウィル・ロック・ユー〉だ。アルさんからのメール――。

《ふたりともそのままわりを見たりせず読んでくれ。オレは別の車両に乗ってる。刑事たちも君たちを尾行してる。リョーコ、オレはしづゑから連絡を受けて状況を知ってる。心配するな》

龍子は息を呑んだ。

「しづゑってテレビでやってた死んだあのおばあさんだろ、なんでアルさん知り合いなんだ、詩本真相ってなんだ、なあおれにも教えてくれよ」凜は鬱屈した思いをはき出した。

「あとで話すよ、凜兄、私、頭がイカれたと思われたくないし」

「なんだよ、それ……」

龍子はメールのレスを打った。

《アルさんは私の味方？　敵はなんなの？　しづゑさんがあなた方っていったよ。私以外の誰を指すの？　凜兄の体が乗っ取られたりしたら私どうしよう？》
最後の質問を打つとき、指が震えた。龍子宛にレスが返ってきた。
《オレは味方。敵の名前はスカラワンガ、しづゑは君と凜のことを指していった。オレがあげたおメダイはしてくれてるよな、その緑の光が守ってくれる。もしなければ、いまからでも代わりを渡す。身につけていれば君と凜は乗っ取られることはない、だいじょうぶだ》
龍子は毎日身につけている。
「凜兄、アルさんからもらったおメダイ、してきてる？」
「え、うん、ぶら下げてっけど、それがどうしたんだ」
龍子は心底安堵した。
「よかった……」凜の顔を見た。
「どうした、詩本」凜も龍子を見つめた。顔が赤くなる。
「なんだよ、あんましじろじろ見んなよ」
「べっつに、なんでもない」涙の出そうになるのを懸命にこらえた。
またメールがふたりにきた。《新横浜支店の前で金髪でサングラスをかけた外人が待ってる。名前はルカ、そいつと合流してくれ》
ふたりは新横浜で降りた。日本興和銀行新横浜支店は駅前にあった。
支店前に青年が立っていた。歳は二十代前後か、背は龍子よりすこし高い。モデルのようなしなやかな体型だ。高級避暑地を連想させるサングラスをしている。息を呑むほどきれいなプラチナブロンドの髪が肩にかかるくらい、ウエーブをかけて伸びていた。肩から洒落たモスグリーンのリセバッグをさげている。通りを歩くＯＬや女子高生がちらりと振り向いていく。
「はじめましてリン・クロヅカ、リョーコ・シホン」青年は澄んだ日本語でしゃべった。
「ルカさん、ですか」龍子が訊ねた。

「ルカでいいよ、リョーコ、リン、さあ急ごう」
三人は支店のなかに入った。龍子が代理人手続をすませた。年配の女性行員が龍子ひとりだけを貸金庫室に案内しようとした。ルカが三人でいきたい、と申し出た。女性行員は事務的な口調で、規則で代理人しか入れません、といってきた。
チャンスだ、龍子は思った。ひとりになるチャンス。
「オネイサン、チョトいいですか」ルカがポケットサイズの首都圏路線図の紙を差しだした。
凛と龍子は見た。紙の裏側が暗緑色の光を宿している。
「チョト、この漢字ワカラナイデス」
「どれでしょうか」行員が紙を手にとった。
「僕たち三人は支店長の許可を得て貸金庫室に入る、これは許可証です」
ルカの口調はあくまで穏やかだった。
女性行員ののっぺりとした表情に変化が現れた。数瞬、戸惑ったように瞼をしばたたかせた。それから突然冷たかった顔が笑顔になった。
「はい、許可を承っております」どうぞこちらへ、といって女性行員は路線図の紙を持って、三人を率先して歩き始めた。龍子と凛は唖然としてついてきた。
「ルカさん、ひょっとして催眠術師かなんかなの」凛が聞いた。
「うん、まあそんなもんかな」
貸金庫室は十人ほどが入れる大きさだった。パールホワイトを基調とした、清潔そのものといった感じだ。壁一面にコインロッカーのような貸金庫が整然と並んでいた。
?〇六八……あった。龍子は見た。この中にＵＳＢメモリが入っている。
扉にテンキーパネルがある。これを押せば……。龍子は迷った。
「どういう事ですかっ」男の声がした。四人がドアのほうを振り向いた。

警備員がひとり入ってきた。代理人の随伴者は入室不可ですよ、ご存じのはずでしょう、と女性行員を詰問しはじめた。女性行員は自信たっぷりの表情で路線図を見せた。
「支店長の許可証です」
「許可証、ちょっと拝見、ってこれ、鉄道の路線図じゃないですかいったいあなたなにを……」
ルカが、もう一枚暗緑色に光る路線図の紙をいきなり警備員の肩に押しつけた。
警備員の体に震えが走った。硬直した。ぼんやりとした目でルカを見ている。
「君に命ずる、僕たちは――」
「ルカさん、お願いがありますっ。私をひとりにしてください」
「リョーコ、君は――」
「お願いします」龍子は精一杯懇願した。
女性行員は、ルカと硬直した警備員を見て驚きの表情を浮かべていた。我に返った様子で、それはいけません、行員一名の立ち会いは必須です、といった。ルカは、これを持っていなさい、と警備員に路線図を渡した。はい、持っています、うつろな表情で警備員はいった。
「なあ、詩本、どうしたんだよ」凜は状況についていけず声を荒げた。
「お願い凜兄、ひとりにさせて欲しいの、ルカさん、お願いします」
龍子は例のメモをルカに見せた。ルカは？アンツィオ作戦は危？の文字に釘付けになった。
「ルカさん、ご存じなんですね」
「リョーコ、君はどこまで知っている？」
「まだ、なにも」龍子は首を振った。
ルカの表情はサングラスのせいで読み取れなかった。
それでも真剣な眼差しで見つめられている、覚悟を決めろといわんばかりに、龍子は思った。

「ねえルカさん、詩本、おれ……」凜が詰め寄ってきた。
「……わかった。リン、リョーコの意思を尊重しよう」
「詩本……」
「ごめん、凜兄」
「っんだよ、そんな目で見んなよ」凜はつらそうだった。
「凜兄、必ずあとで話すから、約束するからお願い……」
「……OKッ、わかったよ」
「ありがとう凜兄」
いけません、女性行員がルカににじり寄った。ルカは素早くまた路線図を、今度は強烈な暗緑色に光る路線図を行員の額に押しつけた。女性行員と警備員ふたりを交互に見た。
「支店長からの退出命令が出た、ただちに退出するように、ただし誰にも見つからぬよう、ドアの手前で待機していること、我々三人が店を出たらこのことはすべて忘れること」
有無をいわさぬ口調だった。ふたりはよだれを垂らしはじめた。はい、ただ一言か細い声でいった。ふたりがふらふらと歩いていった。ルカが凜の肩に手を置いた。
「先にいっててくれないかい、すまない、リン」
「……うん」凜は不満げながらも出ていった。
「――メモリの中のフォルダ名は〈Operazione Anzio〉だ。予備の記録メディアは？」
「USBメモリを持ってきています」
「君は頭がいい」ルカが笑みをつくった。龍子にはなぜか、その笑みは悲しそうに見えた。
「白状しよう、僕は君の記憶を操作して、このフォルダを削除するつもりだったんだ、リョーコ・シホン……これだけは約束して欲しい、リン・クロヅカとアルフォンス・カミュウには、このフォルダのことを一切話さないでいてくれないか」
「はい、約束します」龍子はルカのサングラスの奥の瞳を透視したい衝動に駆られた。

「僕もこれから君のすることを見ない、僕の組織への反逆になるからね」ルカも出ていった。
龍子はそれを見届けた。すぐにテンキーを操作しはじめた。七，三，九，二……パネルのＬＥＤ表示に＊が四個並んだ。確定キーを押す。金属のこすれる、鍵の外れるような音がした。　扉を開けた。
黒いアルミボディのＵＳＢメモリが一個、入っていた。五，六センチほどの長さのよくあるスティックタイプのものだ。容量は一ギガバイトだった。
デイパックからノートパソコンと未使用のピンク色をしたプラスティックボディのＵＳＢメモリを出した。容量は念のため八ギガバイトのものを持ってきていた。パソコンを起動させる。メモリを二個とも差した。問題のＵＳＢメモリのフォルダを見た。いくつものフォルダが表示されている。フォルダ名はすべて英語表記だ。
その中にあった。このフォルダに間違いない。
フォルダ名は〈Ｏｐｅｒａｚｉｏｎｅ　Ａｎｚｉｏ〉……オペラツィオーネ・アンツィオ……これだけイタリア語だ。ほかにアンツィオの文字のつくフォルダやファイルを探した。これしかない。
龍子はこのフォルダのみ、空のメモリのほうに？移動？させた。

『ケーサツはほんとのこと隠してますよ、マジッスから、証拠のレコーダはケーサツが持ってちゃったけど、コピーがあるんすよ』テレビに映るということで、興奮しているのだろう、学生の声はうわずっていた。顔は映らないアングルで撮影されてあったけれど。
「アルさん、ノリさん、こっからがスゲえんすよ」杉浦達也はいった。
「マジかよ、タツ」川上徳人がいった。
テレビに映っている達也はノートパソコンで音声を流した。ＩＣレコーダで記録した例の音声？少年がしゃべり出した外国語？だ。レポーターがたしかに少年の声だね、と応じた。

『それからこの男の子、スゲえ怖かったんすよ、もう小学生って感じじゃなかったっていうか、それとケーサツの発表だとこの小学生、ホームから転落死ってなってるんすけど、自分から飛び込んだんすよマジで、そんでもって血文字を自分の血で書いてったんすから、スカラワンガって書いたんすよ、きっとなにかの暗号っすよ』映像がスタジオに切り替わった。

〈思いっきりドキュンな昼下がり〉という人気番組の有名司会者が、ではこの外国語、翻訳したんだけどね、こちらをみてちょうだいよ、といった。

アシスタントの女性レポーターが大きなフリップの前に立っていた。翻訳した文章が書いてある。レポーターが、実はこの言葉イタリア語なんですっ、と深刻そうな声音でいった。

「ね、スゲえでしょ、俺嘘なんかついてねえし」達也は得意げにいった。

「信じらんねえ、四回目の自殺ってなんなんだよ」徳人はテレビの翻訳文に釘付けになった。

「ねえアルさん、これ読むとまるでこの小学生が犯人みたいッスよね」徳人がいった。

「まあ、そうともとれるな」アルはじっとテレビを見つめた。

「っていうかそれっきゃ考えらんないッスよ、なのにケーサツのやつら、俺のこと疑いやがって、マジで現場で録音したのかって、おめえ嘘ついてんじゃねえのかって、取り調べみたいになったんすよ。こっちはあんな怖え思いしたってのに」達也が唇をとがらせる。

テレビでは内田広大少年の自宅がモザイクのかかった状態で映し出されていた。

少年の父親が顔を映さない角度で報道陣に答え始めた。

『ですからうちの息子はとてもイタリア語なんかできないんです、ほんとうなんです、信じてください』一部報道では息子さんが犯行にかかわっているとも伝えられているんですが、とレポーターがいった。

『冗談じゃない、うちの息子はきっと犯人に突き落とされたんです、そうに決まってます』
お父さん、いまのご心境は？　と何人ものレポーターが愚昧な質問を口々に発した。
父親はいままで必死にこらえていたのか、嗚咽をはじめた。
朝までは被害者として内田広大と実名で報道されていた。いまでは少年Aと報じられている。映像がスタジオにまた戻った。司会者が、最近よくテレビに登場する心霊研究家を紹介した。
『どうも、善道、アイ子、です。ええ、私の霊視がたしかならば、これは典型的な悪霊憑きです』
といいますと、と司会者が促す。善道アイ子が長広舌をはじめた。
「俺、マズいことしちゃったかな、男の子のお父さん、かわいそうだった」
達也が一転して落ち込んだ口調でいった。
カフェで飼ってる猫のメイが静かに寄ってきた。毛並みの美しいロシアンブルーに育っていた。伊丹かぬかの死後、一度は龍子の家で預かった。龍子の父親が猫嫌いなため、いまは龍子たちユリスモール院生行きつけのこのカフェで飼ってもらっていた。
達也は気持ちを切り替えたいのか、盛んに猫を撫で始めた。
「っつったってよ、おめえはほんとのこと話しただけだろ、悪りいのはマスコミだっつうの」
アルがチャンネルを変えた。
『ななんとっ、あの人気絶頂のアイドル、久利生翔さんと人気女優の雨宮？美さんの熱愛が発覚しましたっ』
別のワイドショーではなんとも平和な話題を報じていた。
「ねえアルさん、人が三人もひでえ死に方したっつうのに、俺らのすぐ目の前で、でも世の中って、関係なく動くんすよね」
徳人がいった。達也が力なく相づちを打った。
「……たしかにな、でもおまえたちよく偶然居合わせたよな」
アルがふたりのほうを向いた。

「いやそれが、紅葉ヶ丘の駅ついたんすけど、コンパの帰りでふらふらだったんすよ、でホームでタツと話し込んでたら、キャンペーンですとかっつってポケットティッシュもらって」
「そうッス、変ですよね、駅のホームでなにか配るのって禁止のはずッスよね」
「おまえら、まだそのティッシュ持ってるか」
徳人がポケットティッシュを取り出した。ほらこれッス、といってアルに見せた。
裏側の広告面が緑色に光っていた。蛍光塗料塗るなんて手が込んでますよね、徳人がいった。
「でもそれがどうしたんすか」
達也が聞いた。
「なんでもない、さあおまえたち、昼休憩終了だ、仕事仕事」
「っつってもお客さん、ひとりもいないッスよ」
達也がいった。
なら掃除だ、とアルがいった。ふたりはあくびをこらえてフキンでテーブルを拭き始めた。
「アルさん、俺ら詩本ちゃんのお見舞いいきたいんすけど、早めに上がっていいッスか」
徳人が聞いた。アルは、黒塚凜に付き添われてもう退院したといった。
「なあ、タツ、やっぱあのふたりデキてんじゃねえかな」
「待ってくださいよノリさん、マジヘコむッスよ、そんなの」
「それよりおまえら、大学の夏期の課題ちゃんとやってんのか」
アルが不出来な後輩たちを心配する風にいった。アルさんそれいわないで、二年生の徳人がそういってフキンを振り回した。ノリさん汚えって、一年生の達也は徳人に頭が上がらないので、控えめに抗議した。
「アルさんだって午前中サボってどっかにいってたくせしてさ」
達也がいった。

「そうそう、それに第一アルさんにいわれたくないっすよ、アルさん何年留年してるんすか、いい加減教えてくださいよ。歳だって教えてくんねえし」
徳人がアルの痛いところを突いた。
「アイニクとおまえらには知られたくないんでね」
アルは笑ってはぐらかした。白と黒のモノトーンのギャルソンエプロンを着けてカウンターの掃除に取りかかった。
〈ユリスモールカフェ〉の店内はこの修興大生三人しかいなかった。
ローズウッドで統一された壁やテーブル、ウインザーチェア。アンティーク調の店内は真鍮を多用した洒落た雰囲気を醸し出していた。紅葉ヶ丘駅を出ると小高い丘陵地帯がある。その中腹にカフェはあった。丘陵の上には聖ユリスモール学院高等部があった。高等部の学食の不味さは悪評が高い。それでこのカフェは昼時と放課後には大変な混雑になる。
オーナーの下でアル、徳人、達也がバイトで働いていたけれど、いま学院は夏期休暇中だ。オーナーはアルにカフェを任せて旅行にいってしまった。この時期には地元の住民が自慢のエスプレッソを飲むために時折訪れる程度だった。
ドアのカウベルの鳴ったときも、だから地元の客がきたのだろう、そんな感じで徳人と達也はドアのほうを見た。
ルカ、凜、龍子の順に三人は入ってきた。徳人が龍子を見ると驚きの声を上げた。
「詩本ちゃん、だいじょうぶだったのか、俺が通報したんだぞ」徳人は得意げだ。
「すいません、ノリさん、あんまり覚えてなくって、あ、メイッ」
メイが達也から離れて龍子にすり寄ってきた。龍子にいちばんなついている。抱きかかえてやさしく体を撫でてやった。メイ、最近遊んでやれなくてごめんね、猫に優しく語りかける。
ノリさんナンパ失敗して猫に負けてやんの、達也がおちょくる。
徳人が負けじと言い返す。

ルカが顔を伏せながら、イタリア語でアルになにかささやいた。
「ノリ、タツ、この三人はオレのお客さんだ、ちょっと?裏?に引っ込むから店を頼む」
わっかりやした〜、とふたりが威勢よくいった。
「メイ、ごめんね、いまは遊んであげられないの」龍子は猫を下ろした。
四人は店の裏手のドアを開けて出ていった。
「やっぱり詩本ちゃん、かわいいッスよねえ」
「なんだタツ、まだあきらめてねえのかよ、相手は女子高生だぞ、アルさんから殺人技術習ってんだぞ、ジーなんとかってやつ、黒塚といっしょにさ」
「でもかわいいもんはかわいいッスよ」達也は人なつっこい顔に照れ笑いの表情を浮かべた。

2　二日目　その４“裏の館”（前書き）

本作品の異能バトルは複雑すぎました。それが落選の一因ともなっていました。
そのため〈その少女破門者につき〉では簡素化した次第です。

2　二日目　その4“裏の館”

カフェの裏口を出た。テラコッタの使われた石畳の小径がつづいていた。

周囲をカエデの林に囲まれた、静謐さをたたえた空間が広がっていた。

凜たち三人は新横浜からの帰路、ルカの運転するレンタカーに乗ってきた。凜は車内で初めてきのうの横浜線での惨劇の真相を聞いた。にわかに信じられないことだらけだ。

――凜は石畳を歩きながら反芻した。やっぱり信じられない。

「なあ詩本、おれおまえを疑うつもりはねえけど……」

「わかってる凜兄、かんたんには信じらんないよね」

「ちょっとした証拠ならいま見せることができる。ここは？聖域？なんだ」

ルカがいった。

「聖域ってなんなんですか」

凜が聞いた。

「ニッポンでいえば神社や仏閣の跡地、先人たちが畏れ崇めてきた歴史のある土地を指すんだ、ここは奈良時代、土地の人々が土着の神を信仰して建てた祠のあったところらしいんだ」

「そういえば、なんだか空気がちょっと澄んでるっていうか」

龍子が息を吸い込んだ。

「すべてのあの光は使えなくなる。ふたりともおメダイを見てごらん」

ルカに促されてふたりはペンダントを首もとから出した。

緑のカラーストーンが白く透明になっている。凜は角度を変えて見てみる。光の加減ではなかった。たしかに透明になっていた。

「マジ、かよ……」

凜がつぶやいた。でも未だ半信半疑だった。

「どうリン、ちょっとは信じられるようになった？」
「おれ、なんていったらいいかわからないよ」
「ルカさん、そろそろ光の正体、説明してください」
龍子が聞いた。
「ルカでいいって、答えは君の手に入れたＵＳＢメモリに入ってるよ」
石畳の小径の先に洋風の赤茶けたレンガ造りの洋館があった。三階建てだ。レンガには西洋木蔦のひとつ、イングリシュアイビーが幾重にも絡まって茂っている。
洋館はコの字型だった。縦画に当たる正面棟の表玄関から入ると広間があった。広間の向こう正面に中庭に通じる裏玄関がある。中庭を囲むように左翼棟と右翼棟が伸びている。ガラスシェードのランプが洋館のなかでほのかに陰影を生み出していた。大きな振り子時計の時を刻む音だけが聞こえてくる。
その音がなければ、時間の止まったような感覚にとらわれる、そんな館だった。
広間左手の螺旋階段で三階に上がる。右翼棟の奥の一室に入った。ドアには？―？号と書かれた表示があった。靴を脱がずに部屋まで上がるというのは、日本人にとって慣れないものだ。
その部屋はロココ調の家具で統一されていた。猫脚の椅子が四脚、中央に重厚なつくりの大きめのテーブルが一台。その上に、部屋とは不釣り合いに四台のノートパソコンが置かれていた。豪華だった。生活感のまったくない部屋だったけれど。
「リョーコ、ホールデンからのＵＳＢメモリをセットして」ルカがいった。
龍子は一台のパソコンにブラックのアルミボディのＵＳＢメモリを挿入した。
「なんだよこれ、全部英語じゃねえのか」おれ英語苦手、と凛がいった。
「翻訳ソフトがあるから使ってみて」ルカが助け船を出した。

アルは黙って椅子に坐って三人を見守っている。
あるフォルダには黒塚凜の成長記録を記したワード文書が、別のフォルダには詩本龍子の記録文書があった。それぞれ盗撮写真が添付されてあった。
「なんだよ、これ……ストーカーかよ、アルさん、これなんだよ」
凜が上目遣いに睨んだ。
「人身保護計画というファイルを見てくれ」
アルが口を開いた。
龍子がファイルをクリックして読み始めた。
「発、外赦院（がいしゃいん）、ガイシャイン？　藤堂院長。宛て、教皇十字軍第二軍団所属アルフォンス・カミュ少佐……」
長ったらしい前文がつづいた。
「以上の観点から、外赦院占星官は賛成多数により、黒塚凜並びに詩本龍子両名を暫定的に業人？……と認定するものである。なお両名のうちいずれか一名が業人であるという結論に変わりはなく……外赦院は、全力を挙げて両名の人身保護計画を遂行するようここに命ずるものである」
藤堂という人物からアルに命令が下った日付は、龍子のユリスモール中等部進学時とほぼいっしょだった。
「これ、アルさんが中等部で私を截拳道研究会に誘ってくれた頃ね」
「そうだ、君がブルース・リー師祖のファンだということはリサーチ済みだった」
凜は見抜かれていたというわけだ。龍子が入れば、凜もついてくる、計画のうちだった。
「これってつまり、おれらを守れっていう命令？」
凜は戸惑いながら聞いた。
「そうだ」
アルが短くいった。口調にはいままでにはない、厳しいものがあった。
「業人ってなんですか」

龍子が訊ねた。
「僕らはカルマ人(びと)って読んでる、カルマ人のファイルを開けてみて」
龍子は従った。翻訳して読み上げる。
「カルマ人は不老不死の存在である。カルマ人の本来の肉体を祖体と呼ぶ。カルマ人の祖体が破壊された場合、その霊体は憑依霊の形態を成し、破壊された祖体を捨てる。これを捨肉(しゃにく)と呼ぶ。その後他の一般のヒトに憑依する。その被害者の霊体を完全に使役状態にした場合、被害者の肉体を支配することが可能となる。これを呪肉(じゅにく)と呼ぶ。呪肉した肉体と相性の合わない場合、カルマ人はその能力をすべて引き出すことが困難となり、眼球、鼻腔からの出血を往々にして起こすことが確認されている。カルマ人は、呪肉した肉体をまた捨肉することが可能である。この場合……呪肉した肉体が生物学的に死亡の状態とならなければ捨肉は不可能である」
龍子は椅子から浮き上がった。
「これ、このために内田って男の子は死ななきゃならなかったんですかっ」
「そう、報道では転落死だけど自殺させたんだよ、奴が」
ルカが感情を抑えた声音でいった。
「なんてことを」
龍子のなかで、謎が解け、抑えようのない怒りがわき起こった。
「私たちの敵、スカラワンガって何者なんですか」
「僕たちとおなじ、カルマ人のひとりだ」
龍子と凜は驚きを隠せなかった。
「僕たちの記憶はルネサンスと宗教改革、魔女狩りや疫病で混沌とした時代のヨーロッパから始まっている。僕らカルマ人たちは彼の地で内紛を起こし、憎み合う二派に別れたんだよ。僕たちはローマ教皇猊下の庇護の下、人類をもう一派のカルマ人どもから護ることを誓った、それが教皇十字軍だ。もう一派の目的は世界の政治経済の指導者を、きょう僕がしたように操り、人類を支配下に置くことにあるんだ。奴らは自分たちのことを?父祖の戦列?と呼んでいる。

僕等は単に破門者ども、っていってるけれどね。奴らの大半は、呪肉を繰り返して元の肉体、祖体を失った輩なんだ」ルカの声音に初めて忌々しげな感情がこもった。
「フソノセンレツ……ってどういう意味なんだろう」
凜がアルとルカを見やった。
「わからない」
ルカが答えた。
「あの混乱した時代の記録はヴァチカン機密文書館に保管されてる、そこに眠ってると僕は思ってる、でも存在しないかも知れない、いずれにせよ詮索することは禁じられてるんだ」
「そんな、勝てるんですかっ？　相手のことを知らなくって」
凜が苛立ちをあらわにした。
「先の大戦で、僕等は大きな勝利を収めた」
ルカの声に疲れがにじみ出ていた。
「ルカ、だいじょうぶか」
アルの声には気遣わしげな色がこもっていた。
「カミュウ？　僕を誰だと思ってる」
「ルカさん、どうかなさったんですか」
龍子が不安に駆られて聞いた。
「封印したんだ」
アルがいった。
「カミュウ……」
「隠すことはない、ルカは異次元にドデケえ破門者を一匹、先の大戦で封印するのに成功した」
「異次元、封印？」
龍子と凜が不思議そうにルカを見た。
「そう、封印だ、オレたちカルマ人は、普通のヒトの霊やカルマ人の霊体を異次元に封印する能力を持ってるんだ」
『――そこから先は私が話そう』
日本語だった。一台のパソコン画面に痩せこけた東洋系の老人が

映った。顔色が悪い。
インターネット回線でテレビ電話のできるソフトを使ったシステムでつながっていた。
『初めまして、黒塚凜くん、詩本龍子さん、私は外赦院院長、藤堂と申します』
アルとルカが直立不動の姿勢を取った。凜と龍子もつられて立ち上がった。
老人は病気を患っているようだ。病室のベッドで寝た状態で語りかけていた。
『いま私はローマにいます。朝の六時を回った頃です、きょうも朝日を見られたことを主に感謝せねばなりません』藤堂院長はそばにいる秘書に向かってイタリア語で指示を出した。
『破門者を封印したときの記録映像、アルフォンス・カミュ少佐の闘う映像をお見せしたい、準備が整うまで外赦院と内赦院のことをお話しします』老人は水差しからひと口水を飲んだ。
『ヴァチカンのローマ教皇猊下の直隷機関として内赦院と外赦院があります、内赦院はカソリック教徒を破門者どもから護ると共に、同教徒に呪肉した破門者を封印するため、外赦院はカソリック教徒以外のすべての人類を対象に同様の目的で新たに設立された組織なのです。ルカとアルは私の指揮下、外赦院隷下教皇十字軍第二軍団の団員です』老人が咳き込む。
『失敬、映像の準備ができました、ご覧ください』
もう一台のパソコンに画像が映った。
画面の揺れがすごい。撮影者は走りながら撮っているようだ。画面は薄暮のなか薄暗い。
広大な雪原だった。画面の手前に男、アルさんだ、走っている。遠くに老婆の走って逃げていくのが見えた。スピードが尋常ではない。老婆の体は青白色につつまれていた。
「詩本、この光がおまえのいってた……」凜は画面に見入りながらささやいた。

「そう、電車で見たふたつの光の青いほう」
アルはその左手に巨大なリボルバー式の拳銃を持っていた。
構えた。轟音と共に銃口が火を噴いた。それは、暗緑色の光だった。
「この光」龍子がつぶやく。
「凜兄、ルカさんが人を操るのに使った光だよ」龍子の言葉に凜もうなずく。
緑に光る銃弾は老婆の横腹を吹き飛ばした。老婆が泣き叫ぶ。
アルが撮影者に向かって、ロシア語でなにか叫んだ。アルの体に青白い光がわき起こった。
老婆がいきなり跳躍した。十メートル以上の高さに軽々ジャンプしたのだ。足下にひときわ青白い光が集まっていた。アルに向かってくる。再生が一時停止された。
『おふたりとも、老婆に呪肉した破門者の両手を見て頂きたい』
両手には、あの禍々しい暗赤色、血のような光が宿っていた。
「これがもうひとつ私の見た赤いほうだよ」
龍子がいうと、凜は渇ききった唇を噛んだ。
再生が始まる。老婆、いや破門者は左の拳をアルに向けて打ち出した。アルは寸前で回避した。右手にあの赤い、強烈な血の色の光を繰り出した。
老婆の右の拳がアルの左腕と衝突した。暗赤色と青白色の光の接点が爆発して輝く。黄昏の雪原が一瞬真昼と化した。共喰いでもしたかのように輝きが衰えた。アルの右ストレートが老婆の顔面を捉える。また赤と青の共喰いが起こり、アルの暗赤色が勝った。老婆の顔が四散していった。その瞬間、撮影者がロシア語で、つづいて未知の言語で呪文を唱えはじめた。
凜と龍子には何をいっているのかはわからない。けれどとても荘厳なものに聞こえた。
老婆は四肢をばたつかせ、やがて数回引きつらせたあと、動かなくなった。

そして、凜と龍子は見た。
老婆の体から暗緑色に光る、西洋の甲冑を身にまとった大男の姿をした光の塊が出てきた。緑に輝く男は文言に苦しめられるかのように空中でもがき光を明滅させた。画面のなかの雪原が照らし出される。撮影者が詠唱を終わった。同時に光る男が撮影者に吸い寄せられるように近づき、画面から消えていった。雪原に薄暮が戻る。画面にテロップが出た。ロシア語だ。
「一九九五年、十一月二九日、ロシア連邦、ヤマル半島、ノービ・ポルト近郊、北北西九キロ地点」
アルがそらで覚えているかのように訳してくれた。
「……緑の光は人を操るものだと思っていたのですが」
龍子が口火を切った。
『暗緑色の光、あれは封印された三種の使役霊のひとつ、憑依霊です。生物、無生物問わず宿らせることができるのです。憑依霊の憑いた物質を持っていれば、カルマ人に呪肉される恐れはありません。ルカはきょう、銀行で人を操るのに使ったと聞きました。操ることも可能です。アルフォンスは拳銃の弾丸に憑依させました』
アルさんからもらったおメダイのペンダント。緑に光るカラーストーンの正体がわかった。
『憑依霊と、青白い光すなわち守護霊は共喰いを起こします。この共喰いは瞬間的に起こりおなじ霊力だけ消えます。最後には、霊力の高かったほうがその分だけ残ります。強い憑依霊は、一瞬で敵の守護霊を消すことができるわけです。これを？瞬間消滅？と呼んでいます。ただし憑依霊は物質の破壊ができません。そのため、強力な銃器などに憑依させて使います。物質の破壊のほうは、銃器の力に頼らざるを得ないのです』
「破門者の奴、跳んだんですけどあんな使い方もあるんですか？」
今度は凜が聞いた。
『守護霊は物質を壊さずはじき返します。足下に集め守護霊を繰り出せば、地面と反発し、飛び上がることも可能となります。また生

物の肉体の傷を治癒する能力もあります。そして三種類のなかで唯一、おのれの霊力の自然回復能力を持っています』

「三つ目の赤い光はなんでしょうか」

龍子が聞いた。

『悪霊です。身にまとうことができます。手先、足先に集中させれば、強力な拳技、脚技を繰り出せます。たとえば手にナイフを持っていれば、持ち続けるかぎり、ナイフの先端まで悪霊を宿らせることも可能です。憑依霊との相違点は四つあります』

藤堂は言葉を句切った。

『一つ、攻撃にのみ使役できる霊です』

パソコンの画面にアルの招喚した悪霊たちの写真がスライドショウで映った。

『二つ、守護霊と共喰いを起こします。ただしこの共喰いは徐々に互いを消し去っていきます。悪霊は、おなじ程度の霊力の守護霊と闘うとき、長時間の攻防を強いられます。これを?漸減消滅?と呼びます』アルの悪霊と先ほどの老婆に呪肉した破門者の守護霊の衝突がスロー再生で映る。残光を残し両者の光が衰えていった。

『三つ、物質の破壊が可能です』

今度は見知らぬ白人男性が映った。カメラがパーンする。草原に巨大な戦車の停車しているのが映る。男が悪霊の宿らせた拳を戦車の側面装甲に打ち込む。戦車の巨体にめり込み、砲台が吹き飛んだ。車体は真っ二つに引き裂かれてしまった。

『四つ、呪肉した肉体は悪霊を使うと壊死を起こします。呪肉した肉体と相性のよい場合、壊死は起こりにくくなります』壊死したカルマ人の脚の写真。

龍子は目をそらした。凜が気遣わしげな視線を送った。

『三種の使役霊の共通点は自然界の物理的攻撃を遮断できるところにあります』

「……では撮影者の言葉はなんでしょうか」

龍子は畏れず質問した。

『？封印の儀？に使用する呪文です、これによりカルマ人は敵対するカルマ人を異次元に封印することができるのです。戦闘の最後に出た大男の憑依霊、あれが破門者の霊体です』
「おれ、幽霊って見えないもんだと思ってました」
凜は納得いかない様子だ。
『通常我々の周囲に存在する死霊たち、自由霊と呼びます。彼らは目に見えません、カルマ人は霊感が強いため、感じることはできます。感じ取り、精神集中すれば使役霊として封印することができます。封印した使役霊を招喚すると、あのような不吉な光を肉体に宿すのです』
「ということは、映像にあったように破門者を封印するには、肉体を破壊する者と封印する者ふたり一組で行動するのでしょうか」
『詩本さんのおっしゃるとおりです、我々は通常、前者の役目を悪魔祓師（エクソシスト）、後者を封印師（ベリアル）と呼びます。これを基本単位として戦闘団（カンプフグルッペ）と呼んでいます』
「っていうことは、強い団員はとにかくそこいらじゅうの幽霊を封印して、それで破門者のやつらも封印しちまえばいいんだ、一人二役だ」
『黒塚くん、残念ながら、封印できる霊力には個々人で限界に差があるのです、これを封印臨界値と呼びます。エクソシスト役が使役霊をため込めば、破門者を封印する余力がなくなるのです。逆にベリアルが破門者を封印しつづければ、使役霊はおろか、新たな破門者を封印する余力を失っていきます。要約するとカルマ人は主にふたつの能力値を有しています、本人の霊体の強さを現す霊力値、この値が強いほど、強力な使役霊の招喚が可能になります。もうひとつがヒトの自由霊やカルマ人の霊体を異次元に封印できる限界を示す封印臨界値です。』
「こういうのはどうですか？　十字軍のみんなが、破門者たちに憑依して体を乗っ取っちゃうってのはどう？　名案でしょ」
『黒塚くん、なかなかの発想力ですね、けれどふたつの理由からそ

れは無理なのです』
「え、なんでですか」
『我々には決して破ってはならぬ教会法外典という戒律があるのです。それによって軍団員が捨肉、呪肉をおこなうことを厳禁しています。もうひとつの理由は、カルマ人の霊体が別のカルマ人に憑依すると、その霊体は儀式を経ずに自動的に封印されてしまうからです』
凜はなんとか理解しようと躍起になっている様子だった。
「院長様、ひとつ質問してもよろしいですか」
龍子がおそるおそる語りかけた。
『どうぞ、詩本龍子さん』
「凜に……黒塚凜と私はカソリックの洗礼を受けました、内赦院の十字軍が人身保護計画に当たるべきだったのではありませんか？」
『鋭いお人だ、詩本さん、私は内赦院にあなた方の保護計画を要請したのです、内赦院は戦力不足を理由に拒否しました、お恥ずかしい事ながら、両院は友好的な関係ではないのです』
「そんな、そんなんで父祖の戦列とかってのに勝てるんですかっ」
凜はあきらかに苛立っている。凜兄、龍子が呼んで凜の腕を引っ張った。
『幸い、私たちは全世界の各軍管区において勝利を収めつつあります、残念なことに東アジア軍管区の日本戦区は、長きにわたり破門者の侵攻を受けてこなかったため、戦力が手薄になっていました、そこにあなた方、おふたりがお生まれになった、私は教皇猊下に直奏しました。その甲斐あってか内赦院もようやく重い腰を上げたのです。内赦院隷下の第一軍団所属、ウイリアム・ホールデン大尉を派遣したのです。ですが列車内でスカラワンガに封印されました、彼の最期は哀れでした。教会法外典を破戒してまで呪肉をおこない、詩本さんに危険を教えようとしたのです』
ホールデンさん……。そうだったのか。ということは、スカラワンガは……。

「内田くんの四回目の自殺という報道、あれはひょっとして」
「そうだよ、奴はホールデンを追跡するために捨肉と呪肉を繰り返した。瞬間的な速さで移動できるからだ。そのためだけになんの罪もないヒトたちが犠牲になった」ルカがいった。
「非道い」龍子は肩を震わせた。椅子に坐り込んだ。凜がそばに寄った。
　龍子は凜の手を握りしめた。凜も握りかえした。
「ルカさん、カルマ人は世界中どこへでもいけるってこと？」凜が聞いた。
「限界があるよ、霊力値が高い者ほどその力の重さ故に移動が鈍るんだ、スカラワンガの場合、霊力の推定値からしておおよそ一回の捨肉で三キロは一気に移動できる」
「……私を助けてくれた大谷しづゑさんもカルマ人だったのでしょうか？」
「オレの眷族だ」アルがいった。
「ケンゾク……」
「オレに協力してくれた長年の戦友だった。眷族とは、自らの意志でカルマ人の血液を、普通はカプセルに封入されたものを飲み、ある程度までの使役霊を使えるようになったヒトを指す。誰でもなれるわけじゃない、適性があるんだ」寡黙だったアルが一気にしゃべった。
「大谷さんは最期まで私を護ってくれました。私が生きているのは、あの人のおかげです」
「ありがとう、リョーコ」
　アルが微笑んだ。龍子はその笑顔に胸の痛みを覚えた。
「私、死んでいったみなさんの仇を取りたいんです、私ではお役に立てませんか？」
『ルカ・ユルゲンス大佐』
　藤堂院長の威厳のある声が呼んだ。
「はい」ルカの澄んだ声が響いた。

『君の霊視の結果を教えたまえ』
「はい、霊視の結果、間違いなくリン・クロヅカが十字軍所属のカルマ人です。タイプはベリアル、霊力値、封印臨界値はともに未だ未知数ですが」
「おれ、が……」
凜は顔を強張らせた。皆を見渡した。全員の視線が凜に集まっていた。
「凜兄が」
龍子は凜と眼をあわせた。凜は龍子を直視できなくなり視線を落とした。
「だって、おれ、霊感なんかなんもないです、不死身どころか喧嘩も弱えし、だっておかしいよカルマ人って大昔から生きてきたんでしょ、おれ生まれたの十七年前だよ」
「リン、君はまだ？カルマの開いていない？状態なんだよ」
「ルカさん、それってどういう意味だよ」
「おそらく遠い過去、君は自身のおこなった善悪なにがしかの行為によってそれに応じた報いを受けているのだと思う」
「おれの過去、って前世ってこと？」
「霊視による結果だけれど、君は憑依霊として時空を超越し、本来の黒塚凜の霊体の発生する前に君の母親の胎児として生を受けたんだ、そしていまここにいることになる、きわめて稀な現象だ、聖域で肉体を滅ぼされた場合、カルマ人の霊体は時空を超越する事例が報告されてる」
「そんな、ひでえよ、おれ、父さんと母さんのほんとの子じゃあなかったってこと？」
「ルカさん、そんな言い方、凜兄がかわいそう」
「リン・クロヅカ、嘆いている暇はないんだ。スカラワンガは日本に上陸した。奴はなんとしてでも君とリョーコ、ふたりを殺そうとしてるんだから、奴はカルマ人として十字軍に入る可能性のある者を片端から殺すつもりなんだよ、リョーコがカルマ人でなかったと

わかったとしても、君にとってリョーコはかけがえのない存在、かならずリョーコを狙おうとしてくる」
「そんな……」凜は途方もないショックを受けた様子だった。
「凜兄」龍子は凜の手を握った。
「おれが、しっかりしないと？」
「リン、リョーコを護ってやれるよう一日も早くカルマを開かせるしかないんだ」
「どうやって、どうすればそいつは開くの？」凜は必死の形相を浮かべた。
「僕の霊視に依れば」
「……」
「あと数日、数日で君のカルマが開く」
「数日」凜は口をつぐんだ。
『黒塚くん、過酷な運命を君に告知することになりました。けれど、破門者たちを封印しつづけた今日、我々には封印師役が不足しつつあるのです、君の協力が不可欠なのです』
「そんなことといわれても、おれ」
『すまないと思っています。私たちは神を信仰して神の奇蹟をもって対抗しようとしてきたこともありました。けれど、父祖の戦列と称する者どもに打ち勝つためにはおなじカルマ人の信仰に頼るほかありませんでした。彼らの研究のため、業（カルマ）という仏教思想まで援用しました。いまはただ、君の助力を願うばかりです』
　しゃべりすぎたのだろう、藤堂院長は苦しげに咳き込みはじめた。
「院長、何度も進言しているよう、守護霊治療をお受けください」ルカが進言した。
『いや、私はヒトとして己の運命を受け入れるつもりだ』藤堂院長はいったん通話を切った。
「……これから人身保護計画の最終段階に入る」アルがいった。
「この聖域で当分暮らしてもらうことになる、外出時には僕等のうち誰かを護衛につけることになるから」ルカの口調は有無をいわさ

ないものがあった。

凜と龍子はそれぞれの私室をもらった。三階の隣り合った部屋、?—?号と?—?号だ。

龍子は部屋に入る前に凜に声をかけた。

「凜兄、頑張ろうね」

「……OK、こうなっちまったら、しょうがねえよな」凜はまだ混乱しているようだった。

龍子は?—?号室に入った。八畳ほどの大きさだ。ベッドにテーブル、猫脚の椅子。液晶テレビも置かれてあった。奥にはつづき部屋があった。バスルームだ。ありがたい。

息をふうっと吐いた。風呂に入ってる気持ちの余裕はない。

ノートパソコンの電源を投入した。

ピンク色のプラスティックボディのメモリを出した。この中にあのフォルダが入っている。

〈Operazione Anzio〉……ホールデンさんは自分になにを伝えようとしたのか？　スカラワンガの襲撃だけではないはずだ。この中に答えがある。フォルダをクリックした。ワード文書ファイルが三つあった。イタリア語で表記されていた。

翻訳ソフトを使って一言一句丁寧に調べはじめた。

……日付の早い順、ひとつめの文書名は〈アンツィオ作戦計画指令書〉

作戦最高司令官は、ネーベ内赦院院長とあった。内赦院によって立案された作戦だった。

ふたつめ〈現地よりの緊急報告書〉報告者は——ルカさんだ。

三つめ〈霊視の結果を踏まえた意見具申書〉これもルカさんが報告者だった。

——ひとつめの文書を調べていくうちに龍子の顔から血の気が引いていった。

アンツィオ作戦計画の目的——内赦院の霊視によって判明した事

実に基づく――とは？
黒塚凜のカルマは自然には開かないことが内赦院占星官多数の霊視に依り解明された。
故に内赦院議会は全会一致により、黒塚凜のカルマを強制的に開かせることを決定した。
その唯一の方法、それは。
？詩本龍子が聖域内で――決して自死ではなく――殺害されること？だった。

2　二日目　その5“巨頭会談”

？――？号室には、アルとルカが残った。
「なにかいいたそうだね、カミュウ？」
「ノリとタツを救ってくれたことは礼をいうが、できればふたりに帰るよう命じて欲しかった」
「リョーコを救うためには、できるかぎり駅にヒトのいる必要があったんだ。カミュウ、僕の提案だけれど、ノリとタツは破門者と接触した。眷族として迎えて保護しないと危険だよ」
「あいつらを巻き込みたくはない、適性もまだわからない。……ルカ、ところでいつ外赦院に配置転換されたんだ」
　ルカは本来内赦院第一軍団員だった。
「先週、あなたのベリアルに着任するよう命令を受けたんだ」
　ルカはきのう十八時過ぎ、アルに成田空港に到着した旨の連絡を入れていた。
　アルは藤堂院長を見た。
「内赦院はなにをしてるのですか、外赦院と連絡を取っていれば、オレにもホールデンの来日がわかりました。ルカとシヅエの四人でスカラワンガを確実に封印できたはずです」
『アル、すまない、我が院がスカラワンガの来日を霊視できていれば事態は変わったやも知れぬ』
　藤堂に謝罪されては、アルも怒りを収めるしかなかった。
「院長、ホールデンはなぜ危険を冒してまで単独でリョーコにＵＳＢメモリを渡そうとしたのでしょうか、オレはシヅエからのメールで破門者襲撃を初めて知りました。ホールデンの封印やメモリの情報に至ってはリョーコの入院中にルカから知らされたんです。もっと早く情報が下りていれば、シヅエは、彼女の戦死は防げたはずです」
　声には無念さがこもっていた。

『内赦院に正式な回答を要求しているところだ、だがネーベのことだ、例によって情報を出し渋ったのであろうな……無念だ』
「両院がいがみ合うかぎり、前線は混乱をつづけます」
アルの言葉に藤堂院長はうなずいた。その眼には重責と病魔に屈しない決意が見て取れた。
「ルカ教えてくれ、ホールデンたちの闘いやメモリのことを知ったのはいつだ、彼がメモリを渡そうとした真意は霊視えたのか」
「闘いやメモリの存在については紅葉ヶ丘駅前で霊視をおこなって察知した……彼の真意まではわからない。ここであなたと合流するためレンタカーで移動してきたんだ。眷属に運転を任せるか、タクシーを使うべきだった」霊視に専念しようとすれば、車の運転は不可能だ。ルカの霊視がより早ければ、アルはルカから情報を受け取り、素早く出撃することもできたはずだ。
「お前らしくないぞルカ、眷族のひとりも連れてこられなかったのか」
「ウクライナ戦線で破門者たちの眷族と闘ってる、ニッポンへは引き抜く余裕がなかったんだ」
「だが、せめて駅でスカラワンガの捨肉を見計らって封印の儀をするくらい、お前なら――」
『責めないでくれたまえ、アル、ルカの封印霊力はもうすぐ封印臨界値に達しようとしている、最前線に立つには、つらい身だ。万が一のことを考え後方支援に回らざるを得んのだ』
「ほんとなのかルカ」
「……カミュウ、あなたには知られたくなかった」
ルカはいままで耐えてきた気概がはじけてしまったように、椅子に身を沈めた。
両腕で自身を抱きしめるような恰好をとった。まるで、必死に悪寒と激痛に耐えるかのように。
「ルカ、眼を見せろ」
「いやだ」

『ルカ、見せたまえ、君がいまどういう状態かアルは知っておかねばならない』
ルカはあらがう力が失せたようだ。院長の言葉に素直に従った。サングラスを外した。
透明な、どこまでも澄み切った緑色の瞳。その中心に光り輝くなにかがあった。
ちょうど猫の眼が暗闇で光るように。それは怪しげな力を誇示するように光を放っていた。
「凶眼(きょうがん)が出てるぞ」
アルがうめいた。封印した霊力の臨界に近づいた証しだった。
『ルカの臨界突破はなんとしても阻止せねばならん』
藤堂は苦しい息の下、それでも断固とした決意のこもった声音でいった。
アルは力なく椅子に坐り込んだ。重たい空気が流れた。
それを打ち消すように、もう一台のノートパソコンの電話回線が開かれた。
『おはよう、諸君』
肥満気味の体に禿頭の中年男性が映った。
朝食にフォカッチャ、仔山羊のココット焼き香草風味、仔羊のパイ包み焼き、リコッタチーズが食卓に並んであった。
『おはようネーベ』
藤堂が真摯な口調でいった。
「おはようございます、内赦院院長閣下」
アルとルカが直立した。
『ホールデンは残念だった』
ネーベは美味そうに仔山羊の肉にかぶりついた。皆を見ずに食べ続けながらいった。
『ネーベ、ホールデン大尉を破門する気かね?』
『当然だ、教会法外典破戒の罪で破門である』
『私は彼の恩赦決議案を両院協議会に提出するぞ、彼はすでにスカ

ラワンガに封印された身だ』
『拒否権(ヴェトー)を行使する、話題を変えようシニョール・トードー、ホールデンに替わって新しい団員を派遣する』
首からかけたテーブルナプキンで口元を拭きながらいった。
『ほう、誰かね』
『ダリオ・チマブエ少佐だ、詩本龍子の父親の護衛に当たらせる。現場指揮権はユルゲンス大佐の戦闘団(カンプフグルッペ)に委譲する。諸君、主のご加護のあらんことを』
「院長閣下、お訊きしたいことがあります」アルがいった。たまりかねた様子だ。
『両院協議会を通してくれたまえ、カミュ少佐』ネーベ内赦院院長は回線を切った。
「……チマブエ、あの脳天気野郎を」アルは歯ぎしりした。ルカは無表情だった。
『性格はともかく、チマブエは優秀なベリアルだ、各員協力して本計画を完遂してくれたまえ……頼むぞ、ルカ、アル』
「微力を尽くします」
ふたりはいった。

2　二日目　その6“決意”

夕方の六時を回った。アルは徳人と達也を呼んだ。
カフェを早じまいして夕食に誘った。ふたりは食費が浮くといって喜んで応じた。
ルカがカフェのキッチンでイタリアの家庭料理をつくって振る舞った。
「ルカさん、スゲえ美味いよ」
徳人がいった。
「ありがとう、ルカでいいよ」
ルカは色の薄いブルーカラーのサングラスに変えていた。
「ねえルカさん、どっかで会ったことない？」
達也が聞いた。
「バカ、タツおめえ、ルカさん男だぞ、ナンパのセリフだてめえ」
「ちげーよノリさん、マジ、どっかで会った気がするんだ」
「リョーコ、遅いな」
アルが話題を変えてやった。
ルカの駅での記憶操作は簡易なものだった。
「そうだよ詩本ちゃん、黒塚、様子見てこいよ」
達也が不服そうだ。
「……さっき部屋ノックしたんだけど、食べたくないっていったっきり、それだけです」
凛は元気なくリゾットをスプーンの先でつついた。
徳人と達也がどうしたんだろうと話し始めた。
ルカは黙々と空いた皿をキッチンへ下げた。アルは好物のサーモンのカルパッチョをほおばりながら、タブロイドの夕刊紙を片手にしている。アルさん行儀悪いっすよ、徳人がいいながらのぞき込んだ。一面には大見出しで〈紅葉ヶ丘のテロ事件を追え〉とあった。
「日刊キンダイじゃないっすか、おもしろいッスよねこの新聞、B

級だけど」
「ノリさん、B級どころかC級だよ」
達也が突っ込んだ。そういいつつ興味深げに読み始めた。
「……昨夜十一時半頃、紅葉ヶ丘駅でA少年がホームに飛び降り自殺する直前、同駅沿いの国道一六号線でタクシーが交通事故……死んだのは運転手と米陸軍少尉のW・ホールデン。目撃者によると、少尉と運転手は車内でもみ合いをしていて……タクシーは蛇行運転を繰り返し、側壁に激突、まるで自殺行為のようだった。不思議なのはその数分前に東京都町田市で学生が彼女とエッチをしてる最中飛び降り自殺、さらに同時刻神奈川県の長津田、って詩本ちゃんの家の近くっすよ、ここでも黒人が謎の自殺……目撃者のホームレスによると、黒人はケータイで外国語を話したあと突然ナイフで自分の首を切った……直後黒人の体から緑色に光るなにかが飛び出した……本紙はこの一連の事件の関連性を全力で取材するつもりって、なんすかこれ」
「タツ、こりゃあC級どころかZ級だな」
徳人がいった。
「ねえノリ、タツ、アルから話があるそうだよ」
ルカがいった。
アルは日刊キンダイを折りたたんだ。
「なあふたりとも、カフェの？裏？に引っ越さないか、家賃格安にしてやるぞ」
「マジッスかっ」
ふたり同時にいった。金欠のふたりは即話に乗ってきた。
ふたりのアパートは紅葉ヶ丘駅のすぐそばだった。
アルがカフェのとなりのガレージから車を出した。
「なんだよアルさんの車って、ボロすぎ」
徳人と達也が驚いた。
「プジョー四〇三コンバーチブルだ、ハードトップを改造してコンバーチブルにしたんだ」

アルはなぜか自慢げだった。所々ハゲかけたモスグリーンの塗装、トップの幌は薄汚れたホワイトだ。哀愁を誘うフォードアセダンだ。猫目を連想させるフロントマスクは優美だけれど。
「リン」
アルが呼んだ。凜は心配げにカフェのほうを見ていた。ルカが出てきた。
「僕がリョーコを護ってるから、心配しないで、リン」
「……うん、よろしくお願いします」
凜はプジョーに乗り込んだ。
四人の乗ったプジョーは廃車寸前の外見とは裏腹に、体に響く重低音のエンジンの咆吼をあげて走り去った。
「リョーコ、いるんでしょ」
ルカがカフェのほうを振り返った。龍子がドアのところに姿を現した。
「私――」
瞳には泣きはらした痕が残っていた。
ルカが、龍子のしゃべろうとするのを手で制した。
カフェを閉めた。龍子を連れて二階に上がった。テーブル席に坐った。
「カフェの一階は外敵対策のため監視カメラとマイクで見張られてるんだ、十字軍の司令部に」
龍子は悲痛な表情とは裏腹にその両の瞳に、強い意志の光を宿していた。
「……読みました、アンツィオ作戦の計画書、そのあとの二通の報告書も、全部」
「僕を恨む？　リョーコ」
ルカは龍子の手をやさしく握りしめた。
「いいえ、ルカ」
龍子は笑顔を見せた。顔は蒼白だった。
「あした、高等部の神父様にお会いして赦しの秘蹟を受けてきます、

先ほど予約したんです」
「僕がボディーガードとしてついていく」
龍子は頭を下げた。赦しの秘蹟――カソリックでいうところのいわゆる懺悔だった。
龍子とルカは長いこと語り合った。ルカは自分の知るすべてを龍子に語り聞かせた。
「――私、運命を受け入れます」
「君は、つよいひとだリョーコ・シホン」

3　三，四日目　その1“呪肉”

教会の告解室に詩本龍子と伊丹爾三郎神父が坐っていた。
質素だけれどきれいに整理の行き届いた、カウンセリングルームといった趣だった。
ハリウッド映画に出てくるような、木製の電話ボックスのような密室で網戸越しに神父と対面する、そういうタイプではなかった。
室内はエアコンがほどよく効いていた。龍子にはミルクティー、自分にはブラックコーヒーを淹れて、伊丹神父は静かに龍子の話し出すのを待っていた。
龍子は予約時間の朝の九時ちょうどにきた。十分近く経ったけれど話しださないでいた。
時折神父を見ては、また視線をテーブルに落とした。
「……神父様、お清めのおメダイをふたつ、追加で購入させて下さい」龍子はやっと話した。
わかりました、伊丹神父はいった。
翼堂のほうへ自ら赴いて保管ケースからふたつ取ってきてくれた。リング型だった。龍子に手渡す。
「お代は無料です」
伊丹神父は親しみを込めていった。
「ありがとうございます、川上徳人先輩と杉浦達也先輩の分なんです」
伊丹神父は目を細めた。懐かしそうにふたりが第何期生だったか思い出すように語った。
「あのふたりは、一年ちがいながらいいコンビでしたよ、しょっちゅう女子寮に忍び込もうとしました。私の前任者の神父でしたら、即座に退学処分になっていたのは間違いありません」
伊丹神父は朗らかに笑った。龍子もつられてすこしだけ笑みをもらした。

「――なにからお話しすればいいのか」
ふう、と吐息をつく。
「かまいませんよ、詩本さん」
「私のよくいくカフェで猫を飼っています。猫と遊んでいると、親友のことを思い出すんです」
伊丹神父はこの猫のことをよく知っている。
「私も時折、猫ちゃんに挨拶にいきます、最近のご機嫌はいかがですか」
「あいかわらず、静かです、鳴きません、ロシアンブルーってそういう種類みたいです」
伊丹神父は、あの優雅な毛並みを思い出した。
気持ちが安らぐときがある。悲しみを思い出すこともある。
龍子は深呼吸をした。気持ちの整理がついたらしく、一気に話し始めた。
「小学五年の時、私と親友の女の子はおなじひとりの男子に恋をしていました。その親友は亡くなりました。彼女の亡くなる数日前、私は約束をしました。十六歳になるまで、その男子に恋の告白をしないと誓ったのです。でも彼女はいいました。男子のほうから告白してきたら受け入れて欲しいと。私は高校に上がるまで、ひょっとしたら男子が告白してくれるのではないかと淡い期待を抱いて……」
唇を噛んだ。
「つづけてください、詩本さん」
伊丹神父は過去のつらい想い出と対峙せねばならなかった。自然と拳に力がこもった。
「でも、それが怖くっていままで彼に意地の悪い態度を見せたりもしてきました。……十月で十六歳になります。あと一ヶ月とすこし先の話ですが、私は親友との約束を破ります。思い切って告白します、男の子に、彼に……拒絶されても悔いはありません」
「彼は、あなたのことを好いてくれていそうですか？」
「私の思い上がりかも知れませんがすこしは、意識してくれている

と……でも、彼は高等部の女子にけっこう人気があってライバルが多くて……勝手な願望かも知れません」
「お話ししてくれてありがとう、詩本さん」
「お許しください、神父様に話すなんて、私、なんて残酷なことをしているのかと思うと……」
「天に召された親友は、あなたのことを許してくれることでしょう」
「……彼女は、いまでも最高の親友なんです」龍子は嗚咽をはじめた。
「ありがとう、詩本さん」
伊丹神父は龍子の手をそっと握りしめた。
「私は父と子と聖霊の御名によって、あなたの罪を赦します」
ふたりは祈りの言葉を神に捧げた。龍子の口調には重苦しいなにかがあった。
伊丹神父は違和感を覚えた。いくら親友との過去の大切な約束を破るとはいえど、彼女の口調にはなにか必死の想いがこめられているような気がした。詩本龍子はなにかまだいえない秘密を抱え、そして悩んでいるのではないのか。彼女は一昨日あのような悲劇に遭遇した。きのう、そしてきょう、自分を訪ねてくれた。力になれないのが悔しい、伊丹神父は思った。
伊丹神父は龍子を外まで送り届けた。
龍子は美しい外国の青年に肩を抱かれて教会をあとにした。
外はきょうも陽ざしが眩しかった。まだ十時前だというのに八月の暑気は容赦ない。
伊丹神父は教会のとなりの質素な自宅へ向かった。
眩暈がした。地下室に降りてキャビネットを開いた。ウオッカのビンが何本も並んでいた。すこしのあいだ、ためらった後、手を伸ばした。透明な液体をグラスに注いだ。ひと口あおった。胸を上下する。専用のケースのなかに大切に保存してきたＤＶＤ―Ｒが何枚もおさめてあった。伊丹神父がムービーカメラで撮ったものだ。
そのうちから〈かぬか　十歳誕生日〉と書かれたものを選んだ。

テレビに生前のかぬかが映し出された。詩本龍子、黒塚凜、数人の友達、親戚たちが笑っていた。場所はこの家だ。
伊丹かぬかが一時退院を許されたときのものだ。
伊丹神父はキャンバスチェアに坐ってなつかしい記憶をたぐり寄せた。
「かぬか、おまえはいい親友を持ったね」
ウオッカを飲みながら、伊丹神父はつぶやいた。
一人娘を亡くしてから、自分は弱くなった、自覚はしていた。プロテスタントに属していたとき、妻子を得た。程なく娘が病を患った。カソリックに改宗して神に祈った。高度医療を受けさせるため、寄付金を求めて奔走もした。すべては無駄に終わった。それからだ。日中に酒を求めるようになった。妻が離婚を申し出てきた。
自分を支えてくれていた者はすべて消えた。
信仰はどうだろうか。まだ自分のなかに残っているのだろうか。それを考えると欲しくなる。
酒が欲しくなる。いまも止めることができない。伊丹神父は映像に見入りつづけた。
――神父の足下を強い暗緑色に光るなにかが動いていた。紙切れだった。紙がひとりでに動いていき、伊丹神父の死角に入った。そいつはテレビの裏側に張り付いた。
映像が突然変わった。伊丹かぬかが微笑んでいる。場所はどこだろう。
こんな映像はこのＤＶＤには記録してなかったはずだ。
『ねえパパ、どうしてお金が集まらなかったの？　お金さえあれば私、心臓手術アメリカにいって受けることできたんでしょ、ねえどうしてなの』
「かぬか？」
なんだ、この映像は。
背後に気配を感じた。見知らぬ男が立っていた。いきなり緑色に光る手を伊丹神父の額にあてた。緑の光がスパークした。伊丹神父

は体の自由がきかなくなった。
「テレビを観るんだ、神父」
伊丹神父の両眼の焦点がバランスを失った。精神が憑依霊に蝕(むしば)まれていく。
『ねえパパ、学校に通うガキの親どもに頭を下げて回ったよな、なんであいつら金を腐るほど持ってやがるくせに寄越さなかったんだろうね』
「それは……最初は皆、喜んで寄付してくれようと……したんだ」
『じゃあどうして集まらなかった？』
「手術の、成功率が……二〇％未満だと話したんだ、そうしたら皆一斉に……態度が」
『なぜバカ正直に話した？　なぜなんだ、え、パパ？』
「人をだましてはならない、嘘をついては、いかんのだ……私はっ」
『ねえパパ、私、死にたくなかったよ、生きて黒塚くんと結婚したかった、龍子なんかに渡したくなかったんだ』
像のかぬかは泣きじゃくりはじめた。
『私がおっ死んだの、パパのせいだよ、パパが、なあ、てめえが悪いんだよ』
「……許しておくれ、かぬかっ」
伊丹神父はグラスを落とした。涙が止めどもなくあふれ出した。
キャンバスチェアからずり落ちた。
かぬか、つぶやきながら伊丹神父はひんやりとした床に這いつくばった。
『飲めよ、パパ、飲むんだ』
伊丹神父はウオッカを直接ビンから飲み始めた。映像のかぬかは笑いはじめた。
「これぐらいでいいだろう、神父に呪肉は骨が折れてしょうがねえ、でも相手としちゃあ、お前さんの体は相性が最高だぜ」
スカラワンガは嘲りの声を上げた。
テレビが煙を吐いた。映像が消えた。伊丹神父は混濁する意識の

下、最後の抵抗を試みた。
「おまえはかぬかじゃないっ、この悪魔めっ」
伊丹神父はふらつきながら立ち上がった。
「ふざけるなアル中神父め、我が名はスカラワンガ、父祖の戦列序列第？列に名を連ねし者だ」
「悪魔よ、立ち去れ……」
「悪魔などは存在しない、貴様らが勝手にでっち上げた虚像に過ぎん」
男は、黄金に輝く大型拳銃を手にとった。銃をうっとりと眺めてから自らの頭を撃ち抜いた。
巨大な暗緑色の光の固まりが男から抜け出た。
伊丹神父に乗り移った。神父の体が痙攣する。
伊丹神父は瞳を充血させた。強靱な精神力で抗ったけれど、ついにその場に頽(くずお)れた。

3　三，四日目　その2“チマブエ”

「ほんとかアル、ほんとに娘はストーカーに狙われてるのか、列車の事件はそのせいか」
詩本竜一は酒のせいで赤くなった顔をさらに紅潮させた。
「そのとおりです、リュウイチさん」
アルがいった。
凜、それに龍子は竜一を尻目に、長津田の詩本の自宅に入っていった。
引っ越し業者の若者がひとり、遠慮がちにつづいた。詩本家にある龍子と凜の私物を必要な分だけ軽トラックに運び込んだ。
「アル、俺はなあ凜くんの未成年後見人なんだぞ、俺を差し置いて――」
「リュウイチさん、リョーコに酔っぱらった状態で暴力をふるいましたね、何度も」
「それは、しつけ、しつけの一環だぞっ」
「近いうちに弁護士を挟んでお話ししましょう」
アルがプジョーに乗り込んだ。
「おじさん、連絡しますから」
凜が申し訳なさそうにいった。
「凜くん、おじさんはね龍子が反抗するからしつけをしたんであってね」
「おじさん、しつけで女の子の顔をぶったら、駄目です」
そういうとプジョーに乗った。
龍子は最後まで父親と会話を交わさなかった。
プジョーと軽トラックが紅葉ヶ丘に向けて走り去った。
詩本竜一は、黒い玉砂利の敷かれた庭にへたり込んでしまった。
砂利を門に投げつけた。
「龍子、なんてこった、だからいったんだ、年頃の娘が夜中に」

立ち上がった。酒が欲しい。
「八王子までいくなんざ、狂気の沙汰だ」
だからストーカーに目をつけられたんだ。
うちの龍子は母さんに似ていい女だ、そこいらの野郎どもが放っておくわけがないんだっ、竜一は独り言をいった。家に入ると、さっそく酒を漁った。リビングにあるワインセラー。駄目だ、もっと強い酒が欲しい。ブランデーやウイスキーを収納したキャビネットを見た。適当なＶＳＯＰを一本取り出した。ブランデーグラスに注いで飲み干した。
「龍子、お父さん、ひとりぼっちじゃないか……」
黒塚凜のいないときに何回かひっぱたいたことがあった。
「龍子、おまえが母さんに似てるのが悪いんだぞ」
自分を見捨てて離婚届を送りつけてきた。自分にもたしかに非はあった。父親の多額の遺産とこの屋敷が転がり込んできてから、竜一は即座に勤め先の会社に退職届をたたきつけてやった。
「毎日くる日もくる日もサービス残業だっ」
大声を張り上げた。広いリビングにむなしく響いた。そうだ、あんな仕事やってられるか。大事な一人娘の寝顔を深夜に帰ってきて眺める日々だったのだ。
そこに黒塚凜がやってきた。息子ができたようだった。うれしかった。そんなとき、遺産が入ってきたのだ。会社を辞めてなにが悪い？
竜一は勤めを辞めてから、酒に次第にのめり込むようになった。妻は幾度となく自分を諫めた。最初に妻に手をあげたのはいつだったか、思い出せなかった。
「気づけば離婚だ、女なんざ、そんなもんだ」
さらにブランデーを飲み続けた。
網戸の隙間から、緑に光る紙がするりと入ってきた。
そいつはふわりとリビングにある電話機に張り付いた。電話が鳴り始めた。

「誰だ、ちくしょうめがっ」
竜一は電話口で吠えた。
『私よ、あなた』
別れた妻の声だった。
「おまえ、いまさらなんだ、なんの用だ」
『龍子がね、私と暮らしたいといってきてるの』
「……っ、ふざけるなあっ、親権は俺にあるんだぞっ」
『アルって人が有能な弁護士を雇ってくれたのよ、あなたは龍子に暴力をふるってた、あなたに勝ち目はないわ』
「またか、またあのアルって外人野郎の差し金かっ」
竜一は酒と怒りで顔をどす黒く変色させた。
『じゃあねあなた、さよなら』
電話は一方的に切られた。
こんなバカな話があるだろうか。竜一は電話機をはたき飛ばした。あぐらを掻いて新しいブランデーの封を開けた。広いリビングの入り口に人影が差した。
「リュウイチ・シホンさん」
突然男の声がした。
竜一は男のほうを見た。なんだ、この野郎っ、酔った声で怒鳴りつけた。
見知らぬ男が勝手に入ってきていた。真夏だというのにブラックのスーツにネクタイ、丸いサングラスをかけていた。容姿から、中年の外人のように見て取れた。
「危ないところでしたねえ、リュウイチさん」
男はそういって、電話機に張り付いていた緑の紙を引き剥がした。
手から青白い光を出した。ぽん、と音がしてまばゆく光って消えた。
「なんだあ、てめえ、手品師か？」
「チマブエ、チ、マ、ブ、エ、と、申します」
男はにっこりと笑った。

「あなたもストーカーから命を狙われてますよ、私がボディガードいたします」
「そりゃあ、ほんとか」
「ええ、あなたが狙われていると知ったら、必ずやリョーコさんもあなたのことを心配するでしょう、仲が元通りになりますよ」
「そうかっ、あんた、弁護士紹介してくんねえか、厄介なことになっちまってるんだ」
「いいでしょう、ご紹介いたしますよ」
「へへ、ほんとかよ、よし前祝いだ、飲めよ」
ブランデーを勧めてきた。
「私は酒が弱くて、ビール、ありますか」
チマブエは遠慮がちにいった。
「おう、あるとも」
竜一はオランダ産の気に入りのビンビールを取りに冷蔵庫に走った。
チマブエはｉＰｏｄで音楽を聴き始めた。ルチアーノ・パヴァロッティの歌声のリズムに体が乗って動く。キャビネットに近づいた。白い粉の入った袋を引き出しに押し込んだ。
「持ってきたぜ、お、なに聴いてんだ、あんた」
「レオンカヴァッロの歌劇〈道化師〉です、ルチアーノの声は奇蹟ですね」
「知らねえなあ、まあいいや、チマチマさんよ、乾杯だっ」
「チマブエ、ですリューイチさん」
チマブエは陽気に応じた。

3　三，四日目　その3“護る”

「――以上のように僕等十字軍は、第一に教会法外典戒律、第二に十字軍軍法を守らねばならず、これに従わなければ破門者たちとなんら変わらなくなってしまうから、聴いてる、リン」
「ルカ先生、もう駄目、休憩しよう」
黒塚凜は目の前のノートパソコンを睨みつけた。
パソコンに表示された文書ファイルのタイトルは、読むだけで眠気を誘った。
?聖なる公同の使徒的ローマ教会の定める教会法外典戒律並びに教皇十字軍軍法典?……。
「僕の講義はどうだった」
ルカは凜の正面に坐って、サングラス越しに見つめてくる。
「うーん、霊力の話がわかりづらいよ、とにかく使役霊ってのがミサイル直撃されても跳ね返してくれるってのはわかった、でも霊力の単位、アーデルだっけ、霊力1アーデルでT……」
「?TNT換算?だね」
凜は要点を書き出したノートを見た。
「そうそれ、悪霊1アーデルで……?三・〇四TNT換算トンの破壊力?って完璧意味不明」
「そうだな、1アーデルを効果的に使えば、この館の建物が崩落するね」
凜は腕を組んだ。ここが、つぶやいて部屋を見渡す。眉根を寄せて上目遣いにルカを見た。
「ほかにもさ?ゲルメキア高等呪文?ってさ何語なの?、発音が上手くできないんだ」
「それを詠唱できなければ、?封印の儀?は執り行えないんだ、リン」
凜はため息をついた。それから、とつづける。

「三つの使役霊の招喚の仕方って、あれがなんのことやらさっぱり……」
ルカはなるほど、と思案げに腕を組んだ。
「ごめん、おれ、バカだ」凜は申し訳なさそうに上目遣いにルカを見た。
ルカは、僕の説明が悪かったんだ、そういった。
「聖域の外に出よう、リン、実物をお見せする」
「マジッ？」
ふたりは館の裏玄関を出て中庭を進んでいった。カエデ林に入る。崖につきあたった。
「すげ、落ちたらヤバイかも」
凜が怖そうに後ずさった。
ルカは、地面に設置してあるマンホールのフタのような物を開けた。縄ばしごが出てきた。
「これを使って降りよう」ふたりは十メートル近い崖を降りていった。
「スゲえ怖かった、ルカさん、どこまでいくの」
「もういいかな、おメダイを見てごらんよ」
ペンダントに緑の光、憑依霊が復活していた。
「スゲ、ルカさん、ほら――」
凜は言葉を失った。
ルカの体全体を青白い美しい光、守護霊がつつんでいた。
右手には妖しげな血の色をした光、悪霊が宿されていた。
「リン、悪霊には決して触れてはいけないよ、いいね」
ルカは真剣な表情でいった。
凜はうなずいた。
ルカはしゃがみ込んだ。右手の人差し指の先端に悪霊の光を集める。土や砂、小石の転がる地面に触れていく。まばゆい光が放たれて地面に焦げた痕がついていく。絵が完成した。出入り口の一カ所ある駐車場が描かれていた。ルカは駐車場の中央に？異次元、封印

臨界値５０？と人差し指で焼き付けた。おなじように出入り口に霊力値２３と焦げ目を入れた。
「僕等カルマ人の霊体が出入り口、異次元が駐車場、使役霊が車、そう思ってくれていい、僕等の霊体は、異次元への出入り口ってわけさ、封印するとは異次元へ閉じ込める作業だ」
凜は石焼きビビンバの香ばしい匂いを連想した。まったく場違いだったけれど。
実際に目で見てしまうと、気が動転するほどの現象だったからだ。
「リン、出入り口の大きさが霊力値、駐車場の大きさが封印臨界値だと思うとわかりやすい」
「どっちも、大きければ大きいほど、闘いに有利なわけでしょ」
「そうだ、実際にはエクソシストタイプのカルマ人は霊力値が大きく、封印臨界値がそれをすこし上回るくらいだ。逆にベリアルタイプは霊力値が小さい代わりに、封印臨界値はずっと大きいんだ」
「ルカさんはどっちのタイプ？」
「僕は典型的なベリアルだね、カミュウはエクソシストさ。さて、この絵に話を戻そう、極端な例だけど、封印臨界値ぎりぎりの４９まで悪霊を何体でもいいから封印したとする」
「うん」
「でも霊力値、出入り口の大きさは２３だけ、だから４９のうち一度に招喚できる悪霊は２３までなんだ、残りの２６は出したくても出せないんだ、闘いで１０消費したらその分だけ封印分の２６から繰り出せる」
「なるほど」
「現実には封印臨界いっぱいに一種類の使役霊を封印することはしない、ほかの二種類の使役霊が封印できなくなるからね、バランスよく使役霊を封印していかないとダメだ」
「じゃあさ、たとえば強い悪霊、４０ぐらいの霊力のある奴、こいつは２３の出入り口を入れないから封印できないんだね」
「それはちがうんだ、封印という儀式は駐車場の境界を飛び越える

作業なんだ、だから霊力４０の悪霊一体を見つけたら、封印しようと精神を集中して念じれば可能だよ」
「でも、招喚はできなくなるってこと？　出入り口よりもデカいから」
「それもちがう、使役霊は自由に分裂させることができるんだよ、だからこの場合、２３アーデル分裂させて招喚すればいい」
「霊力値いっぱいまで全身に悪霊を身にまとわせれば、最強じゃん、スキがなくなるね」
「そうもいかない、院長の話には出なかったけれど、悪霊と憑依霊は互いに通過しあう性質を持ってるんだ、だから全身が悪霊のとき、１アーデル憑依霊を憑けた銃弾で撃たれると」
「アウト？」
「そうだよ、守護霊を招喚しないと防げない、最悪ボディアーマーとかで防御する必要がある」
「じゃあ、霊力値２３のなかでなんとか三種類をやりくりして招喚させて闘うわけ？」
「うん、接近戦の攻撃主体なら悪霊１５、守護霊８の招喚、みたいにね」
「闘っていくうちに使役霊は減ってくでしょ、そしたら？」
「悪霊が１５から１０まで減少したとする、５を新たに繰り出せるよ、ただし使役霊は合体させることができないんだ」
「どうなるの」
「脚でも拳でもいいけれど、例えば利き手に１０、右足に５を宿らせたりして闘うことになる、悪霊が分散すると攻撃力は不利になるけれど、代わりに利き手と右足を使っての攻撃ができる」
「守護霊が減ったら？」
「８が５に減ったとする、３だけ繰り出せるけれど、合体はできないから、そうだな、敵と向かい合ってない背中にまわして、正面を５にしたりする。それとも１に減るまで我慢して７を一気に招喚するっていう手もある」

「８の招喚と同時に５をまた封印すればいいんじゃない？　そうすりゃ弱点がなくなるじゃん」
「出入り口の大きさ、霊力値を思い出して欲しい、車同士が衝突して一度には出入りができないんだ、同時に通過しあえるのは、先に話したとおり、悪霊と憑依霊の組み合わせのみだよ」
「そっか、じゃあ、どんだけ速く招喚や封印ができるかが鍵なのかな」
「うん、ここから先はセンスの問題さ、三種の使役霊を招喚や封印、分裂させるスピードは、僕等カルマ人のなかでもそれぞれ得手、不得手があるんだ、これを？招喚力？って呼んでる。戦闘中にいかに素早くできるかがポイントだ、カミュウは悪霊と憑依霊の招喚力がすごいんだ。守護霊は並かな、霊視力に至っては？からっきし駄目？だけれどね」
「ルカさんはなにが得意？」
「憑依霊と守護霊だ。霊視力は、自分でいうのも気が引けるけれど、十字軍随一を自負してる」
「じゃあ、敵は、スカラワンガって奴はどのくらい強いの」
「あの破門者は？父祖の戦列？序列第？列であることが確認されてる、第？列が最強だ、いちばん下位は第？列だといわれてる、血文字に序列を描くように、自己顕示欲の強い男だよ」
「？ってことは、真ん中か、タイプは？　エクソシスト、ベリアルどっち？」
「特殊なタイプだ、推定だけれど、霊力値はカミュウと互角かすこし上、およそ４００アーデル強、封印臨界値はカミュウの数倍、二五〇〇アーデル以上はある」
「それって、ヤバくない？　おれら勝てるかな」
「奴の招喚力はカミュウのそれに比べて数ランク劣ってるよ、それに増援の団員がくる、名前はダリオ・チマブエ、優秀なベリアルだ」
　アルさん、ルカさん、そのチマブエって団員、こっちは三人、敵はひとりか、凜はそういって考え込む。ついで地面の絵を見つめた。

「破門者を封印するってことは、この絵の駐車場を自分の駐車場のなかに封印するってこと？」
「ちがう、封印するのはあくまで霊体、出入り口に当たる部分だ、ただ、カルマ人を封印すれば、駐車場のなかの使役霊たちもいっしょに封印することができる」
「……駐車場はどうなっちゃうの」
「異次元は存在しつづける、封印されるということは出入り口が使えなくなるということさ」
「ねえ、封印されたカルマ人はまた復活できるの」
「……できる、呪文はある、いまの君には教える必要はないけれどね、さしあたっては封印の儀の呪文を早く覚えて欲しいな」
「英語だっておれ、苦手なんだけどな……」凜はなんとなく理解することはできた。
　ふたりは裏の館へ引き返した。
　自室に戻ると、道すがら考えていた疑問をぶつけることにした。
「でもさあ、破門者って呪肉してるわけでしょ、どうやってヒトと見分けるの？」
「まずは各院の占星官たちの霊視、十字軍の諜報機関である秘蹟認定局調査員の調査、現地での団員の霊視、これで相手の？霊波動？を見るんだ」
「それって？」
「カルマ人は使役霊を招喚してる間、各人固有の波動を出すんだよ、それを見極めるんだ」
「出してないときは？」
「憑依霊を憑けてみる方法だ。カルマ人なら即座に吸収、封印されて見分けがつくってわけさ」
「ふうん、覚えること、いっぱいありすぎだな」
「まあひとまず休憩にしようか、飲むかい」ルカは部屋に置かれたコーヒーメーカーを見た。
「どうせならアルさんの淹れてくれたエスプレッソがいいなあ」

ルカは細身のデニムから財布を取り出した。
「しまった、ユーロとドルしかないな」ルカは内線でユリスモールカフェに電話した。
電話に出たアルとなにやらイタリア語で押し問答になっている。
「ダメ、ツケはきかないってさ」ルカはお手上げのポーズをとった。
「あのさあ、おれたち、父祖の戦列っていう悪い化け物たちと戦う正義の組織なんでしょ、お金ないの」
「あまりいいたくないのだけれど、外赦院は今年度の予算が厳しいんだよ」
「……ねえ、そんなんでおれたち勝てるの」
「警察だって、予算で動くよ、統制された組織とはそういうものだよ、僕等は一応軍隊だ」
凜は押し黙った。リン？　ルカは気遣わしげに凜を見てくる。
「父祖の、破門者っていうんだっけ、やつらおばあさんだろうと小学生だろうと平気で殺しやがった。テレビで何度もやってる、小学生の子、四回の自殺が、っていってたんでしょ、スカラワンガの奴一晩でなんの罪もない人間を四人も自殺に追い込んだんだ……」
「……そのとおりだ」
「おれ、詩本を守りたい。ルカさん、おれにできるかな」
「外赦院の占星官、かんたんにいえば調査するスタッフだけれど、彼らの霊視に依れば君は相当な潜在能力を秘めてる、僕の霊視でも君の実力はたしかなものだ、恐るべきベリアルだ」
「おれ、昔の名前なんていうの？」
「君の過去は、占星官たちがいま全力で調べているところだよ」
「ルカさんの過去とかアルさんの過去ってどんな感じ？　スゲえ長いこと生きてきたんでしょ」
「そうだね、放浪と闘いの連続だったな」ルカはコーヒーを淹れた。凜にも勧めた。
いらない、といって凜は自分の部屋を見た。詩本家から私物を持ち出してまだ片付いてもいない。カフェの裏、この聖域の裏の館に

帰ってきてすぐにルカのレクチャーが始まった。
凜はもっとも核心に触れる質問をしたかった。
カルマ人はどうして誕生したのか？　なぜ十字軍と破門者の二派に分裂したのか？
「リン、君の次の質問が僕には手に取るようにわかる」
霊視したの、と凜。ルカははぐらかすようにただ笑った。
「僕等には、親の記憶がないんだ、誰ひとりとしてね……僕等の記憶はルネサンス期のイタリアから始まってる、まるで永い冬眠から醒めたように気がついたらある者は十代の、ある者は四十代の容貌をしていた」ルカは話した。イタリアのとある僻村の教会の共同墓地、迷宮のように地下に広がる、冥晦（めいかい）に満ちた死者の世界――カルマ人たちはそこで棺に納められて眠りについていた。ある日村人がその眠りを解いたのだった。その瞬間はルカの記憶も定かではない。混乱のなか、皆互いの名前だけは鮮明に憶えていた。あの動乱の時代を生き延びるため、使役霊の力を行使する道を選んだ。決して歴史の表舞台に出ることなく、常に闇のなかで闘い、ヒトの歴史に介入してきた。陽の差す所常に陰が生まれるように。そこがカルマ人の永久（とわ）の棲む処だ。強大な力を秘めながらも、ヒトの霊無くしてはなにもできない異能者の宿命だった。
「――そして宗教改革と魔女狩りの闘争に巻き込まれたんだ」ルカの表情は読み取れなかった。
「カソリックとプロテスタント？」
「そう、ローマ教皇に頼ろうとする者たちとプロテスタント派の勢いを悪用しようとする者たちに分かれてしまった、前者が教皇十字軍、後者が破門者どもになっていったんだよ」
そうだったのか。遥か数百年も前の話だ。でもどうしてカルマ人が生まれたのか、ルカの説明ではそれがどうしてもわからない。凜は代わりに思いついた疑問をぶつけることにした。
十字軍団員て世界中に何人いるの、破門者は何人いるの、矢継ぎ早に聞いてみた。

「僕にも閲覧できない機密情報だ」
「おかしいよ、味方の戦力も教えてくんねえの」
「僕が破門者に寝返ったら、情報が漏洩してしまうからね、それを防ぐためだよ」
「寝返るって、あんな化け物たちの側に」
「リン」ルカは口調を改めた。
「僕等も、破門者もおなじカルマ人だ、そして君も、君のいうところの化け物のひとりだよ」
凜はだらしなく椅子に預けていた姿勢を正した。
「ごめん、もう化け物なんていわない。でも破門者たち、おれ、ぜってえ許せねえんだ」
「それは僕もおなじだよ、リン」
「ねえルカさん、悪霊ってどんな感じ？　憑依霊とか、守護霊とか、ヒトの霊って」
「……そうだね、悪霊や憑依霊を招喚すると彼らの憎悪を感じるな。正直にいうよ、闘いの前になると彼らの怒りの声が高まって聞こえてくる、僕等カルマ人はその声に耐えなければならないんだ。逆に、守護霊からは慈しみが伝わってくるね」
「おれたちヒトの幽霊こき使って、声を聞きながら戦うんだな、なんだかつれえよ」
「リン、それが僕等カルマ人の業（カルマ）ってやつなんだよ」
部屋の振り子時計が午後三時を告げた。凜はローマ数字の？を見つめながら、三回澄んだ音色の鳴るのを聴いていた。押し寄せる不安のなか唯（ただ）、凜が護らねばと誓った存在、それは――。
ドアがノックされた。
「三時のおやつ、いかがですか」龍子だった。アンティーク調のティーワゴンを部屋に入れた。
シフォンケーキとミルクティーが用意されてあった。
「私がケーキ作ったんだよ、得意なんだから卵のシフォンケーキ」
「ちょっと焦げてんじゃん」シフォンケーキの上の部分に焼き目が

けっこう目立っている。
「凜兄、味は保証するから、ルカもいっしょに食べようよ」
「いいの？　リョーコ」ルカは腰を浮かしかけていた。
龍子はうなずいた。龍子がルカに目でアイコンタクトをとったような感じだ。いっしょにいてくれない？――わかったよ。そんなやりとり、男女の。凜にはそう見えた。
詩本……凜は胸がかきむしられる思いだった。横目でそっと龍子の整った顔を盗み見る。
「凜兄、なにむっとしてるの、せっかく人がつくってあげたのに」
「なんでもねえよ」凜は無言でひと口ケーキを食べた。思ったよりは美味かった。
「どう？」龍子が瞳を輝かせて聞いてくる。
「ま、こんなもんだろ」
「なにそれ」
三人はしばらく無言でケーキとアフタヌーンティーを共にした。
龍子が机を見た。スタンドパネルに写真が飾ってあった。凜、龍子、伊丹かぬかが写っていた。病室でいっしょに撮影したものだった。龍子はひときわ顔をほころばせた。
「ねえ凜に――」
「詩本、おまえって昔っからイケメンに目がねえよな」
「なにいいだすの」
「ルカさんのこと、もう呼び捨てだしよ、いまさっきもなんだかふたりで目配せしてるし」
ルカは一瞬、天を仰いだ。
「だって、ルカは呼び捨てにしていいっていってるじゃない」
「アルさんに目えつけてたかと思ったら今度はルカさんってわけだ」
「……」龍子はうつむいた。
「詩本が作ったシフォンケーキか、詩本がシフォン、なんだ共喰いかよ」
「ッ……なんですって」

「いいよ、喰ってやるよ、おれも」
龍子の顔がうっすらと赤くなった。
「……私、そんな、変な意味でつくったんじゃなくって」
「ハイハイ、わかってるよ、ルカ先生に食べさせたかったんだろ」
ルカは眼を閉じて、こめかみに細い指を当てている。頭痛がするとでもいうように。
「ああ、喰った喰った、ルカさんも喰いなよ、詩本の奴、ルカさんの感想聞きたがってるぜ、……なに、ルカさんなんかおれのこと睨んでない？」
龍子はすっくと立ち上がった。無言で部屋を出ていった。
「リン、あとを追いなさい」
「へ、なにいってんのルカさん」
「君がリョーコを好きだってことは先刻承知なんだ、オトコならあとを追いなさいっ」
凜は口ごもった。耳が赤く染まった。
「おれ、別にそんな」
「追いなさい、リン・クロヅカ」ルカは立ち上がって命令口調でいった。
凜はいてもたってもいられず部屋を飛び出した。
「詩本っ」凜は廊下を走った。螺旋階段の下を見た。龍子が一階に降りようとしていた。
龍子が階段を踏み外した。よろめきながら右足を引きずっていく。くじいたのだろうか。
手すりにつかまりながら数段飛びで駆け下りた。龍子は中庭のガーデンテラスへ出ていった。
中庭はコの字型の館と緑に囲まれていた。カエデの林、天に向かってしゃにむに伸びようかとしているような常緑樹のブルーヘブンの木立。三時過ぎの夏の陽ざしをさえぎって、爽やかな陽気だった。穏やかな午後。セミの鳴き声だけが響き渡る。かつて凜と龍子のいた日常だ。

龍子はメイに餌をあげようとしていた。缶詰を開けて皿に盛る。
ロシアンブルーの毛並みの美しい猫が美味そうに食べ始めた。
凜は声をかけることもできず、ただ眺めていた。風が吹いて小高いブルーヘブンの木々を揺らしていった。メイは食べ終わると、気持ちよさげに伸びをした。
「凜兄、伊丹さ、メイのことかわいがってたよね」
「ああ、かぬかのやつ猫好きだったよな」
「……もうすぐ、伊丹の命日だね」
「……だな」凜もひざまずいてメイの毛並みを撫でてやった。
猫はうれしそうに喉を鳴らした。
「部屋にさ、三人の写真、あったね」
「うん」
「片付けもまだなのに、真っ先に飾ってくれたんだね」
「そりゃ、おまえ、かぬかはおれらのダチだろ」
「……ありがと、凜兄」
「なんだよ、おまえ、改まっちゃってよ」
「伊丹ね、私が最後のお見舞いいったとき、とてもうれしそうにしてたんだ」
「なにかあったのか」
「好きなひとからね、プレゼントもらったんだってさ」
「好きなって、……思い出した、クラスメートのなんつったけな、キモト、キダ、あれ、誰だっけ、かぬかのこと、糠漬けとかいってやたらとからかってた奴、いたんだぜ。初等部でさ、かぬかのまだ元気だった頃、女子校舎にわざわざ昼休みに出かけていっては、かぬかをからかうんだ、でもあいつ、かぬかのことスゲえ好きで、おれにだけ打ち明けてくれたんだ、あいつさ、病院の前までいってはいっつも引き返してたんだって、でも勇気を出してマスクメロン持ってったんだぜ、あいつの実家、フルーツ屋でさ店から盗んだんだ、傑作だろ、家帰ったらオヤジにぶっ飛ばされたんだと、たぶんそいつだ、図星か」

凜は、つらい想い出の話をなんとかして乗り切ろうとした。それで饒舌になってしまった。
龍子の様子が変だったからだ。無理もない。こんな異常な、あり得ない事態に巻き込まれた。
紅葉ヶ丘の事件は、まだ二日前のことだ。三日前まで自分たちはありふれた日常にいた。この中庭のような。つらいこともあったけれど、少なくとも命の奪い合いをすることはなかった。
そう、ここは安全な日本なのだから。
「もういい、凜兄」
「え？」
「そうだね、たしかにマスクメロン、あったなあ」
龍子は猫を撫でながら、心ここにあらず、といった雰囲気だ。
龍子は唇を動かした。なにかをしゃべろうとした。凜の顔を見た。
「詩本？」凜は龍子の瞳に釘付けになった。
どうしてこんなに透き通った栗色の瞳を持っているのだろう、凜は胸が苦しくなった。
勇気を奮い起こした。財布からベイスカイ横浜のワンデイチケットを二枚出した。
「これ……ベイスカイ横浜（ベーヨコ）の一日遊べる、あっ」龍子はチケットに見入った。
日付指定になっていた。十月の土曜日、翌日の日曜日は龍子の十六歳の誕生日だった。
「別によ、深え意味はねえし、たまたまその日のチケットがとれたからさ」
「……」
「おまえ、湘南でヤンキーにナンパされんのいやがってたろ、ベーヨコだったら客はファミリーか、カップルかって感じだし、いや、別におれらカップルじゃねえけどよ、温水プールでさハネのばさね？　っていやおまえの水着を見てえとかそんな下心はねえぞ、いっとくけどよ」

龍子のほうをまともに見ることができない。
「凜兄ったら、いっつもやることが遅いの、やっぱサイテー」
「っんだよ、それ、おじさんからもらった小遣いで買ったんじゃねえぞ、コンビニのバイトで稼いだんだ」凜は龍子を見た。
「……」
「おい、詩本、なに泣いてんだよおめえ、なあ」
龍子は顔を背けた。首を振った。
「泣いてなんかないよ」立ち上がった。右足をかばおうとしてよろめいた。
「泣いてんじゃねえか、おまえ――」凜はとっさに龍子を抱きしめた。
凜の腕の中で、龍子は静かに泣いていた。
凜はまわした腕に力をこめた。
「泣くなよ、おれのせいで巻き込まれて怖えよな？　いま。やっぱ」
龍子は、怖いよ、と一言つぶやいた。
「おれ、どうすればいい」
「……顔見ないでくれる、凜兄」
「なんで」
「凜兄にこんな顔見られたくない」
凜は唾を飲み込んだ。口のなかが渇いてしょうがなかった。
抱きしめた龍子のぬくもりが伝わってくる。心臓の鼓動までがわかった。強く脈打っている。龍子は体を震わせていた。きれいな黒髪が凜の目の前で風に揺れた。
凜はダメ元だ、そう思った。覚悟を決めた。
「詩本、おれ……おれさ、おまえが」
――お～い詩本ちゃ～ん、と、威勢のいいかけ声が近づいてきた。杉浦達也がユリスモールカフェのほうから走ってやってきた。テラコッタの石畳の上を突っ走り、表玄関を豪快に開けた。広間で詩本ちゃん、とまた呼んだ。裏玄関から中庭に入ってきた。
「あ、詩本ちゃん、黒塚、あれ、なにやってんだ」

龍子はメイを撫でてやっていた。凜は、草むしりをやっていた。
「あ、タツさん、アルさんに草むしりやれっていわれて、ったく夏場は雑草が大変だから」
ああ大変だ、そういって一心不乱に草をむしり取っている凜を達也は不思議そうに見た。
「ふうん、あ、詩本ちゃん、俺さこいつ買ったんだ」
達也は自慢げに最新型のムービーカメラを見せた。片手にすっとおさまるサイズだ。
龍子は、汗を拭く真似をしながら涙を拭いた。
「わあ、高そうですね、なにを撮るんですか」
「うん、将来さ、俺、ネットでいろんな動画を配信する事業とかやりたいなあと思ってさ、まずは記念に詩本ちゃんを撮りたいなと思って、撮っていい？」
龍子の顔がぱっと明るくなった。
「はいっ」うれしそうに截拳道のファイティングポーズを決めた。
「よっしゃあ、スーパー少林少女、詩本龍子っ」達也はさっそく撮影を始めた。
「凜兄、組み手やろうよ」
「だって、防具がなんにもねえぞ」
「型をタツさんに撮ってもらうだけだから」
「じゃあやるか、タツさん、かっこよく撮ってくださいよ」
「わかってるって」達也がモニターを開きながらいった。
凜が縦拳を繰り出した。龍子は右足を引きずりながら、縦拳を捌こうとした。
「詩本、おまえ、足が」
「いいの、凜兄、だいじょうぶだから」
「駄目だ、しっかり治さねえと」
龍子は構えを解いて、テラスの椅子に坐った。
「もう、私にかなわないからって、メイ、おいで」猫が龍子の膝に飛び乗った。

「お、いいね今度は猫を抱く美少女っ」達也は、夢中になってモニターに映る龍子と目の前の龍子とを見ている。この中庭にさえいれば安心だ、そんな気を起こさせる光景だった。

木漏れ日のなかで、龍子はひときわ輝いて見えた。風が吹いて、龍子のロングヘアをなびかせる。髪を両手でかき上げる龍子、いい風、といって目を細める龍子。

凜は、龍子の笑顔に見惚れた。

おれが、護る、凜は思った。

3　三，四日目　その4“包囲”

七時頃始まった夕食は豪華だった。きのうにつづいてルカが腕をふるった。

きのうは夕食をとらなかった龍子もそろった。六人全員がカフェのテーブルに集まった。

前菜にオリーブオイルとレモンをかけた、夏が旬の岩牡蠣、イタリア産の高価な生ハムのプロシュートの盛り合わせ。エアコンで冷えたでしょう、ルカがそういってトリッパのトスカーナ風煮込みを熱々で出してきた。徳人と達也が奪い合うように自分の皿によそった。凛がふたりとも大人げないよ、といった。

ふたりは、互いに相手に喰われる前に喰うんだ、そういって譲らなかった。

アルと龍子は、そんな食卓を楽しげに見ていた。

ルカがせわしなく料理を運んでくる。カフェのほのかな間接照明の下、誰の顔にも笑顔があった。

美味しいよ、ルカ、龍子の声が弾んだ。ありがとうリョーコ、ルカが微笑んだ。

最後にフレッシュなバジルをふんだんに使ったジェノヴァ風スパゲティが供された。

龍子は美味しいといってうれしそうに口に運んだ。

「ルカさん、詩本の大好物、よく知ってるね」

凛がいった。牡蠣、生ハム、バジルを使ったスパゲティ。

「リョーコから聞いたんだ、彼女、きのう体調崩して僕の料理を食べ損ねたからね」

「なんか、イタリアンって喰ってっとやっぱワインとかいいッスよね」

達也がいった。

「バカおめえ高校生がいるんだぞ、なあ、詩本ちゃん、黒塚」

いいつつも徳人もまんざらではない様子だ。
「タツさんハタチになってましたっけ」
龍子がイタズラっぽく聞いた。
「え、あ、十九だ、でも俺十七から飲んでるッス」
「もう、タツさんがうちの父さんみたいにならないか心配」
達也が、オヤジさん、アル中ッスか、と聞いてきた。徳人が失礼だろと突っ込んだ。
「アルさん、やっぱダメッスか」
達也が徳人と揉み合いになりながら聞いてきた。
「おまえ、ほんと酒が好きだな、でもオレはいま禁酒中だから付き合え」
ふたりはつかみ合いをやめて驚きの声を上げた。アルさんが、禁酒っ、爆笑をはじめた。
「オレの決意を知らないな」
「だってアルさん、ガキの頃から飲んでるってのが口癖じゃないッスか」
達也が笑い転げた。
「もういい、おまえらにリョーコからプレゼントがあるそうだけど、やらないことに――」
「マジッスか」
徳人が大きな目をさらに開いた。
アルとルカが龍子を見た。龍子はうなずいてリングをふたつ見せた。
「伊丹神父からいただいたおメダイです、先輩たちがいつまでも仲よくバカやってくれますようにって、願いこめました、ふたりを護ってくれるから、外さないでくださいね」
龍子はちらっとピンク色の舌を出して微笑んだ。
ぜってえ外さないッス、そういってふたりは喜んでリングをはめた。
「きれいな色ッスね、エメラルドっていうか」

達也がしげしげとリングを眺めた。緑に光り輝くカラーストーンがはめ込まれていた。
「タツてめえ、なに薬指にハメてやがんだ」
「詩本ちゃんからのプレゼントッスよ、いいじゃないッスか、その気にさせてくださいよ」
「その気になられても困ります」
龍子がわざと素っ気なくいった。
ひでえ、詩本ちゃん、達也がグチった。徳人はここぞとばかりにからかう。
「伊丹神父、懐かしいッスね、俺らが高等部のとき院生全員の名前覚えてくれたからなあ」
徳人がいった。達也が神父さんいま元気かな、と聞いてきた。
「神父様、ふたりのこと憶えてましたよ、女子寮に何度も忍び込もうとしたって」
ったくおまえらは、アルがからかう。徳人と達也はそれでも憶えてもらっていたのがうれしい様子ではしゃいだ。あした神父さんに会いにいこうぜ、徳人がいった。達也が喜んでうなずいた。ルカさんも喰ってくださいよ、皆が口々にいった。キッチンからルカが出てきた。
「みんな、ペリエなら用意したよ」
ルカはさりげなく徳人と達也のティッシュの憑依霊を回収した。緑の光を放つティッシュ広告の厚紙が床をつたう。
光はルカの革靴に吸い込まれ消えた。厚紙をゴミ箱に捨て、七五〇ミリサイズのビンを持ってウインザーチェアに坐った。
「しょうがない、おまえら、ペリエで我慢しとけ」
アルが栓を開けた。
炭酸水じゃないッスか、達也がいった。それでも皆の顔に笑顔があふれた。
「ＢＧＭでもかけようか」
ルカがいった。

「じゃあジョン・レノンのがいいな」
龍子がいった。
俺もレノン大好きッス、徳人がいった。ノリさんまた調子あわせようとしても無駄ッスよ、達也が横やりを入れた。ふたりが頭をはたきあう。龍子はそんなふたりを見て笑った。
ジョン・レノンの〈平和を我等に〉が流れはじめた。
凜はとっさに自分の携帯に反応してしまった。龍子からのメールの着信音に指定した曲だったからだ。凜は曲に耳を傾けながら、龍子を見た。なんだか以前の日常に、平和な日本に住む当たり前の世界にもどってこれたかのような、食卓はそんな風景だった。
皆の前にペリエのつがれたグラスが行き渡った。アルが立ち上がった。五人がつづく。
「じゃあ、みんな、乾杯」
アルがいった。
乾杯っ――グラス同士の擦れあう音が、レノンの歌声と共に軽やかにカフェに響き渡った。
六人は深夜零時を過ぎても楽しく語らいあった。
ルカが立ち上がった。アル、ちょっときて、そういってキッチンの奥に引っ込んだ。
「どうした」
アルはホールのほうを見やった。
四人は楽しく、ユリスモール高等部の話で盛り上がっていた。
「僕の使い魔に反応があった」
使い魔――憑依霊を憑かせた物のことだ。この場合、ルカは憑依霊をレーダー代わりとして使ったのだった。使役霊が近づいてくれば反応するように。ルカは周囲のカエデ林一帯の地中に憑依させた小石を配置させてあった。
「どっからくる？」
「坂を登ってくる、数はひとり、霊波動は微弱、個人識別までは不明だ」

「やはり正面からくるか」
無理もない。裏の館のまわりは急峻な斜面に囲まれている。カエデ林が密集しており、そこ一帯が聖域だった。聖域の外側から守護霊を使った跳躍をしたとする。うまく裏の館に着地できたとしても、そこは聖域のど真ん中だ。着地のショックを和らげてくれるはずの守護霊は効力を失ってしまう。強靱なカルマ人の肉体でも地面に墜落してただではすまない。呪肉した肉体だったらさらに脆い。ひとたまりもなく即死。聖域で肉体が滅びれば、カルマ人の霊体は時空を吹き飛ばされる羽目になる。
アルはキッチンの奥のオフィスに入った。六畳くらいの部屋だ。アルの私物の入った金庫があった。ロックを解除する。巨大な拳銃を手にとった。凜と龍子が見たビデオ映像でアルの使っていた拳銃だ。手入れのゆきとどいた、輝くメタリックシルバーの銃身。グリップはブラックのラバー製だ。装弾数五発の五〇口径リボルバーだった。
マテバE五〇マセラツィオーネ――イタリア語で虐殺の意を冠されたアルフォンス・カミュ少佐の愛用拳銃だった。ヴァチカンがマテバ社に秘密裡に製造させた特注品だ。
溝の刻まれていない肉厚のシリンダーに五発のペイント弾を装填していく。弾丸は暗緑色の強力な憑依霊を宿され光っていた。肉体の破壊が目的ではない。破門者の守護霊を破るための銃弾だ。この国では憑依した実弾の使用は、各団員の所属する院の許可が必要だ。アルはスカラワンガ襲撃の報を聞いて以来、再三外赦院に申請した。藤堂院長は快く応じてはくれた。
外赦院議会の議員票のほうが割れてしまい、未だに使用許可が下りていなかった。
ルカがリセバッグをしょってホールに戻った。
「さあみんな、裏の館に戻って。ノリ、タツ、引っ越しの荷物まだ部屋に置きっぱなしでしょう、リン、手伝ってあげなよ」
皆がごちそうさまでした、といって席を立った。

龍子はすれ違うときルカと眼をあわせた。
達也が、詩本ちゃん俺の部屋手伝ってよ、といった。徳人がすかさず、いや俺の部屋に、といってくる。ふたりが途端に言い争いになった。凜がふたりの間に割って入った。
「ノリさん、タツさん、詩本は足をくじいてるからおれが手伝いますよ」
凜がいった。
あ、そっか、ふたりはいった。黒塚、こき使ってやるぞ、そういいながら凜の頭を撫で繰りまわした。四人は和気あいあいとしゃべりながら、裏へつづく小道を歩いていった。
ルカはそれを見送った。裏手につづくドアの鍵を閉めた。
アルがマセラッティオーネを携えて出てくる。
「くる、カミュウ少佐、僕は二階を護る」
頼む、アルがいった。ルカがカフェの階段を上がっていった。
アルがマセラッティオーネを左手で構えた。
ヒトならば、両手で構えねば腕を痛めるだろう、そういう拳銃だ。
カフェの振り子時計が時を刻む。不気味なほど静かだった。ルカの霊視力でも個体識別できない微弱な霊波動。スカラワンガの使役霊が闘いを前にして暴れて波動を出したのだろうか。
何分経ったろうか、アルは大声で二階のルカを呼んだ。
ドアのカウベルが鳴った。男がふたり入ってきた。
「いやあ、リュウイチさん、酒がお強いっ」
チマブエが顔を赤らめながらいった。
「チマチマよお、おめえこそなにがビールくれだよ、あ？　とっときのワインまで飲んじまいやがってよお」
詩本竜一もできあがった様子でカフェに入ってきた。
アルはとっさに拳銃を背中に隠した。
「シホンさん、どうされたんですか」
アルがあっけにとられていった。
「お、アル、この野郎、娘にあわせろってんだ、なあチマチマ」

「チマブエです、リューイチさん」
「チマブエ、貴様また任務中に飲んだのか」
「いえいえ、ちゃんとボディガードの役目を果たしてましたよ、リュウイチさんは寸前のところで憑かれるかも知れませんでした、スカラワンガの使い魔が忍び込んでいたのです」
竜一はイタリア語の会話についていけず、カフェの奥のカウンターにどっかと坐り込んだ。
「チマブエ、ルカの使い魔に反応があった」
「それは……リューイチ・シホンに呪肉防御の憑依霊を憑けはしましたが……」
「お～い、チマチマ、こっちきて話そうぜ」
竜一が呼んだ。
チマブエはアルの脇を通って竜一の隣に坐った。
アルはうんざりした様子で舌打ちした、その瞬間だった。
詩本竜一はいきなりチマブエを殴り倒した。
チマブエのスーツのなかに手を突っ込み、拳銃を奪い取った。
アルは瞬時にマセラツィオーネを竜一に向けた。
竜一は自分の頭に拳銃を押しつけながら後ずさった。
「娘に会うんだ、龍子は俺の娘だ、女房になんざいまさらやってたまるもんかってんだ」
「シホンさん、銃を下ろしてください」
守護霊を帯びたルカが階段を駆け下りてきた。
チマブエが驚愕の色を浮かべてへたり込んでいる。娘に会うんだっ、雄叫びを上げて竜一は裏へつづくドアを開けて走り出した。
アルがあとを追った。閉められたドアを開けようとした。
――開かなかった。
「カミュウ、この感覚は」
「ああ、でかい憑依霊だ」
アルは、マセラツィオーネの銃弾を憑依されたペイント弾から、されていない強装弾に交換した。憑依霊に憑依霊をぶつけても、両

者は反発しあうだけだ。すかさずトリガーを引いた。カフェの建物の中で轟音が響いた。シリンダーから大量の発射ガスが吹き出した。ドアに大穴が開いた。そこには暗緑色の光の壁ができていた。つぶれた弾頭が床に落下した。アルは拾い上げてジャケットに隠した。憑依霊が鉄壁のバリアをつくっていた。カフェは聖域の外側だ。罠が仕掛けられていた。

竜一の走る後ろ姿が、穴から見えた。この憑依霊を招喚したはずの破門者の姿は……。

アルは感覚を研ぎ澄ました。敵が見つからない。

「ルカ、破門者は霊視えるか」

「おかしい、反応ゼロだよ」

「クソッタレ」アルの反応は素早かった。守護霊の青白い光を足に集めて一気に階段を跳躍した。雨戸の閉まった窓ガラスにもう一発マセラッティオーネが火を噴いた。

窓が粉微塵になる。

――ここにも緑色の光の壁ができていた。アルの顔に初めて狼狽の色が浮かんだ。

ルカが跳躍してきた。遅れてチマブエもやってくる。

「カミュウ、外のドアにも憑依霊が」ルカの切迫した声。

「はめられた、チマブエ、スカラワンガの推定霊力値は４００強のはずだろ」

「報告ではそのはずです、これはいったい、秘蹟認定局の調査が手ぬるかったとしか」

「泣き言をいうな」アルは拳銃を腰に差した。両手に悪霊を招喚した。ひしゃげた二発の弾丸を悪霊の力で蒸発させた。それから窓、壁、次々とカフェの外壁をぶち抜いていく。

――どこもかしこも憑依されていた。緑色の光の壁。

「カフェの建物全体が憑依されてるんだ」ルカがいった。

「そんなバカな……スカラワンガだけじゃないぞ」

有力な破門者がほかにも来日したということか？　あるいは複数

の奴の眷族の協力か？
　チマブエは、酔いも吹き飛んだらしく顔面蒼白だ。
「ルカ、チマブエ、ありったけの守護霊を招喚してくれ」
　三人はただちに取りかかった。
　ヘリコプターのうなり声が聞こえてきた。音はますます大きくなってくる。
「ヘリだ、カミュウ、スカラワンガは上空から憑依霊を撒いたのかも知れない」
「ッ……チマブエ、お前の拳銃、憑依弾は？」
「も、もちろん、憑依させてあります」
「バカ野郎ッ、弾丸は実弾かペイント弾かと聞いてるんだ」
「ね、念のため、実弾を……強装弾です」
「ふざけるな、ニッポンでは実弾の装填は院長の許可がいるのを知らなかったのかっ」
「……知ってますとも、ネーベ院長の許可は得ていました」
　アルは守護霊一体７６アーデルを招喚した。憑依霊の壁に渾身の力で打撃を加えた。憑依霊と守護霊が？瞬間消滅？を起こす。フラッシュのような残光が尾を引く。等しい霊力同士が消える――アルの守護霊のほうが先に完全消滅した。憑依霊の壁はまだ残っている。
　アルは天を仰ぎ見た。裏の館には丸腰の四人のみ。凜、龍子、徳人、達也。
「そんなはずは、私たちはいったい何アーデルの憑依霊に包囲されたのでしょう」
「泣き言はたくさんだ、ふたりは守護霊は何アーデル招喚した？」
「三体計１２８です」
「僕は１３６」
　――三人の招喚した守護霊の霊力合計３４０アーデル。それでも憑依霊は消えない。これからの闘いに備えて、貴重な守護霊すべてを消滅させるわけにもいかない。
「……最後の手段だ、全身に悪霊を招喚して身にまとえば、素通り

できるはずだ」
　たしかに、悪霊と憑依霊は反発も共喰いも起こさない。両者の霊力は素通りする。
「カミュウ危険すぎる、悪霊の全身への招喚なんて前例がない、人体にどれだけ危険があるか」
「呪肉した肉体じゃない、壊死はどうにかなる」
「僕は許可できない、カミュウ少佐」ルカは言い切った。
　アルはルカを見た。
「大佐殿、四人の命がかかってる」アルの声はいつものルカへのものとはまったくちがった。
「多少時間はかかるけれど、カフェの地下室からすぐ外までのトンネルを掘る。悪霊を招喚して三人でやればすぐにできる、異論は？」ルカはふたりの部下を見た。
「なるほど、それは名案ですよっ」チマブエが我が意を得たりと相づちを打つ。
　ヘリの操縦者は誰だ？　スカラワンガ本人か？　いずれにせよ聖域では使役霊は使えない。
　生身の人間同士の闘いだ。竜一の武器は拳銃のみ。四人が裏の館に立て籠もっていてくれれば、あそこは窓が防弾ガラスになっている。
「……仕方ない」アルは折れた。
　三人はキッチンを抜けてオフィスへ入る。倉庫になっている地下室へつづく階段を下りた。悪霊を招喚する。三人が壁に掌を押し当てた。壁がめり込んだかと思うと一気に破壊された。　裏の館のほうから銃声が聞こえはじめた。
　三人は木の根や土砂を悪霊で粉砕していった。無言でトンネルを掘り続けた。

3　三，四日目　その5“父娘の絆”

「なんなんだよ、このオッサン、マジ鉄砲とかありえねえっつうの」
徳人は涙声だ。
「開けろ、おい、娘を出せ、クソッタレのドちくしょうめ」
龍子は窓の外を見た。詩本竜一。父親が拳銃を持って館の表玄関の前で暴れていた。
「お父さん……」
「おじさん、どうしてこんな」
凜は目の前の光景が信じられなかった。
「なに、このオッサン、詩本ちゃんのオヤジさん？」
徳人が聞いた。龍子がうなずく。
「じゃあ、ケーサツ知らせっと、詩本ちゃんのオヤジさんが捕まっちゃうわけかよ。ヤベえよ、逃げたほうが、ってタツ、てめえなにやってんだっ」
達也は体を震わせながら、ムービーカメラで竜一を撮影しようとした。指が恐怖で動かない。
「怖えけど、でもこれ世界中に配信しなくっちゃ、俺の使命っつうか、なんつうか」
「バカ野郎、なにが使命だ、てめえ戦場カメラマンにでもなったつもりかよ」
ドアを叩く音が消えた。ヘリコプターの音がする。
「なんだ、今度は？」
四人は表玄関脇の窓際に集まって、上のほうを見た。
ヘリが高度を下げて近づいてきていた。
窓にいきなり竜一がへばりついた。徳人と達也が腰を抜かして後ろに飛びのいた。
「詩本、危ないよ」凜が龍子を窓から引き離した。龍子の顔は無表情だった。

竜一は、防弾ガラスにシグザウエルP二二九の銃口を押し当てた。立て続けに撃った。
「だいじょうぶだ、ルカさんがいってた、防弾ガラスだって」
凜がきっぱりといった。
「防弾って、この建物なんなんだ」
徳人が聞いてくるけれど、真実を話すわけにはいかない。
チマブエの拳銃、シグザウエルには不幸なことに特殊な銃弾が装填されていた。ＴＨＶという名前の、軍隊や警察専用の銃弾だった。貫通力に重点を置いてつくられた代物だ。
防弾ガラスに蜘蛛の巣状のひびが入っていく。
「おい、やばくね？」
徳人がいった。
竜一が十四発全弾を撃ち尽くした。シグザウエルを表玄関脇に放り捨てた。
透明だったガラスは、無数のひび割れで真っ白になっていた。それでも防弾ガラスは強度を保っていた。竜一は、左の拳でガラスのいちばん弱くなったところを打ち抜いた。ガラスが音をたてて崩れた。
「逃げろっ」
徳人が逃げ出した。
竜一が乗り込んできた。左手がつぶれてしまっている。それでもニタニタした笑いをやめず平然としている。防弾ガラスをたたき壊す力、ヒトのものではない。
「お父さん……」
龍子は震える手で携帯電話を握った。一一〇を押そうとするが指が動かない。
ヒトの力ではなかった。……呪肉されてしまったのだろうか？
スカラワンガに。
「詩本、こっちだっ」
凜に引っ張られた。四人は表玄関前からコの字の建物の左翼棟奥、

一階の倉庫に逃げ込んだ。鍵をかける。わずかの差で間に合った。ドアが激しく揺さぶられはじめた。竜一が怒号をあげてタックルしてくる。

「もう駄目だっ」徳人は携帯で一一〇番に通報した。

「ノリさん、モップ持ってて」

凜が差し出す。

「どうすんだよ、こんなもんで」

「モップの先の糸にこいつをぶっかける」

凜が、倉庫にあった食用油の一斗缶を指さした。

「よし、火攻めか、おいタツ、撮ってねえで手伝え」

男子三人が反撃の準備を始めた。龍子は部屋の隅を見た。メイが猫用ケージのなかでこっちを見ていた。龍子は震えが止まらなくなった。涙があふれる。

ついにお父さんまでをも犠牲になってしまったのか。こんなことになるなんて……。

「詩本？」

凜が龍子に寄り添った。

「泣くな、だいじょうぶだから」

「泣いてないっ」

龍子は両眼を覆った。

「……そっか、思い出した、あんときだ」

凜はぼそりとつぶやいた。

凜はぎゅっと龍子を抱きしめた。龍子の頭をやさしくなでると準備にもどった。

達也がライターでモップの先に火をつけた。かなりの勢いで炎が上がった。禁煙しねえでよかった、達也がつぶやく。凜が二本目のモップを用意しようとした。

ドアの鍵が壊された。

竜一が乱入してきた。喰らえっ、徳人がモップをつきだした。炎が竜一の顔面に直撃した。　竜一が悲鳴を上げた。怪力でモップを

跳ね返してきた。炎が天井に燃え移ってしまった。
「チッキショウ、ヤベえぞ」徳人がモップを下ろした。
「ノリさん駄目だっ」凜が叫んだ。モップ糸の炎が床にこぼれた食用油に乗り移った。
火の手が床をなめる。竜一は、罵詈雑言を吐き散らしながら逃げ出した。
「俺たちも逃げろっ」徳人が声を荒げた。怖ろしさのあまりか、体を動かせないでいる。
凜は、右足をくじいた龍子を抱え上げた。
「凜兄、メイがっ」
「ふたりとも、猫をお願いします」凜はいうと、龍子を連れて部屋を飛び出した。
「熱ちいっ」達也はケージを開けた。燃えたシノワズリ文様の壁紙がメイに舞い落ちる。
猫は悲鳴を上げた。ノリさん、手伝ってっ、達也が叫ぶ。
徳人は四つん這いになりながら、ボロ布を持ってきた。猫の体についた火を払うようにして消した。メイは火傷を負ってぐったりしていた。
「タツ、俺らも逃げっぞ」ふたりと一匹は炎をかいくぐってなんとか倉庫を抜け出した。
裏の館の一階には煙が立ちこめはじめていた。
凜は、龍子を抱えながら煙のなかをさまよった。表玄関を探した。ふたりとも咳き込んだ。
後ろから竜一が現れた。凜を殴り倒した。
「詩本……っ」凜はなんとか立ち上がろうともがいた。
「すまんなあ、凜くん、さあ龍子、いっしょに逝こうっ」竜一は龍子を抱き上げた。
「お父さ……」息が上手くできない。煙のせいで涙が頬をつたった。
竜一は龍子を裏玄関から中庭のほうへ連れ出した。
ポケットからナイフを出した。

ヘリコプターがけたたましい音をたてて中庭に着地した。ブルーヘブンの木立が風に揺れた。
「父さんが……なんで？　ちがうはず」龍子は苦しい息の下なんとかそれだけいった。
「父さんなあ、おまえといっしょに死ねたら、死ねた……」竜一の顔に苦悶が走る。
ナイフを右手で振り下ろそうとする。左手でそれを必死に止める。
まるで竜一のなかでふたつの人格が相争っているかのようだ。
「もうやめて、父さん」龍子が父親のナイフを持つ手を止めようとする。
竜一はもういっぽうの手で龍子を殴り倒した。
龍子は地面に倒れた。なにかをいいかけてから、気を失った。
「だめ、だ、できない、私には無理だっ」竜一はくずおれた。
ヘリから、フルフェイスのヘルメットをかぶった男が降りてきた。
かつて伊丹爾三郎だったそいつは、愉快そうに首を振った。
「まあ、リュウイチ・シホン、てめえはそこまでの役者だな、アンツィオの主役はこっからは俺が張らせてもらおうか」
「なんだ、貴様」竜一はふらふらになりながら、ナイフを構えた。
「父祖の戦列序列第？列に名を連ねる者のひとり、スカラワンガだ、さらばだ、憐れな父親よ」
スカラワンガは脇の下のホルスターから大型拳銃を引き抜いた。
シャンパンゴールドの黄金の塗られたデザートイーグルを愛おしげに眺めた。
爆音が響き渡った。デザートイーグルから放たれた五〇ＡＥ弾が竜一を無慈悲に撃ち倒した。
スカラワンガは龍子を担ぎ上げた。ヘリに押し込んだ。裏の館のほうを見た。
「あとはリン・クロヅカをぶっ殺せばいい」館のなかへ入ろうとした。
地響きが起きた。ユリスモールカフェのほうから土煙が立ちのぼ

った。
凶悪な赤いきらめきが見えた。アルたちの悪霊だ。スカラワンガは舌打ちした。
「けっ、盛大にやるもんだ」急いでヘリに乗り込んだ。
ヘリが上昇をはじめる。アル、ルカ、チマブエが石畳を走ってきた。三人はヘリと裏の館の炎を見た。ヘリは、煙の立ちのぼるなか、炎に照らされながら急上昇していった。
「詩本がっ」凜が館の表玄関から出てきた。
「連れて行かれたっ」
ルカは折り紙をリセバッグから出した。憑依霊を憑かせるとヘリに向かってふわりと放った。
折り紙ははためきながら飛んでいった。ヘリの底部にへばりついた。
アルとチマブエは裏の館へ飛び込んだ。
「助けて」徳人と達也の叫び声が聞こえた。アルは煙のなかを感覚を研ぎ澄ませて走った。
廊下で咳き込んでいるふたりを抱き上げて外へ向かった。チマブエは、廊下に設置してある消火器で倉庫の炎を消し始めた。火の粉の舞い落ちるなか火災は徐々に勢いをなくしていった。
アルはふたりを表玄関から外に避難させた。
「ここにいろ」アルは再び裏の館に戻っていった。
「マジヤベえ、死ぬかと思った」徳人は涙を擦った。腕の中のメイを見た。だいじょうぶか、メイ、不安げに声をかける。猫の呼吸は浅かった。大火傷を負っている。
達也は一心不乱にムービーカメラでカフェの建物を撮影していた。
「なに撮ってんだ、タツ……」徳人も見た。
石畳と林のつづく向こう側、カフェ全体が不気味な暗緑色に光り輝いていた。
その光が急速に縮みはじめた。ふたつの光に収束されていく。その中心にはそれぞれ紙のようなものが見えた。それを核にしてふた

つの光はカフェの建物から離れた。宙に舞い上がり、空の彼方へと飛び去っていった。ふたりは、一瞬で遠ざかっていく光をただ見つめた。
「見た、見たか、タツ」
「幽霊だよ、ノリさん」
達也はそれだけいうので精一杯だった。
「バカ、タツ、この世にはなそんなもんいねえんだ、すべて科学で解明できんだよ」
「じゃあさっきの光はなに」
「アレはな、たぶん米軍の秘密兵器だ、この近くに米軍の施設あったろ」
「じゃ、じゃあ詩本ちゃんのオヤジさんが襲ってきたのと関係あるのかな」
「それは、ケーサツが調べてくんねえとわかんねえだろ、おまえの撮った映像見せてやれ」
「いやだよ、また俺がイタリア語の少年のときみたく、尋問されちゃうよ」
パトカーのサイレンが近づいてきた。
「メイ手当てしてもらわねえと」徳人がいった。
「でもお盆時だし、動物病院開いてっかな」
ふたりは、ケーサツだ、獣医さんだ、と口々にいながらカフェへと走り出した。
裏の館の火災は鎮火されていた。
中庭の詩本竜一の亡骸の前に、凜、アル、ルカ、チマブエがいた。
「おじさん、ちくしょう……」
凜は草を握りしめて引きちぎった。途端、昼下がりの光景が場違いに浮かんできた。凜が意を決したとき、達也に邪魔をされてしまった。自分はあわてて草むしりをはじめた。あのときの龍子の笑顔——目をつぶった。泣いてる場合じゃない。
「チマブエ、てめえっ」

アルがチマブエを殴り倒そうとした。ルカのほうが早かった。
ルカはチマブエに平手打ちした。
「っ、申し訳ありません、大佐」
「チマブエ少佐、この失態は内赦院に報告する、覚悟しておきなさい」
凜は驚いた。ルカの表情は信じられないほどの怒気に満ちていた。
「カミュウ少佐、ニッポン警察がくる、僕たちはすぐにヘリを追わなくては」
「おれも連れてってください」
凜は必死だった。
「駄目だリン危険すぎる、おまえはまだカルマが開いてない」
アルが突き放す。
「僕が許可する、リン・クロヅカ、僕たちのそばから離れないように」
「ありがとうございます」
凜の顔に決意が浮かんだ。
「ルカ、どういうつもりだ」
「リンの命も狙われている、ここに残しておけない」
「あの、私が残ってリンくんの保護計画を遂行しましょうか」チマブエがおずおずといった。
「チマブエ少佐、君にはここに残ってニッポン警察に事件の説明をしてもらう、けれどリンは預けられない、理由はいわなくてもわかるはず」
チマブエは肩を落とした。
「さあ急ごう」
ルカが凜を促した。先頭を切ってカフェに向かって走り出した。
アルはイタリア語で悪態をひとつついてあとに続いた。三人は闇夜のなかを疾駆していった。
凜は俊足のふたりのあとを走りながら、遠ざかる竜一の亡骸に想いを寄せた。

おじさん、かならず仇を取ります、凜は誓った。
――チマブエは三人を見送った。ひとりになると落胆の演技をやめた。
にこやかに歌を口ずさみはじめた。レオンカヴァッロの〈道化師〉だ。建物を抜けて館の表玄関から出た。そばに捨てられてあったシグザウエルの自分の指紋をハンカチでぬぐった。
中庭に戻る。
斃れた竜一の手に持たせた。
「リュウイチ・シホン、娘をかばう心意気、私の眷族として最低の部類ですが、想定通りの働き、感謝しますよ」
スーツから注射器を出した。竜一の腕に薬液を注入した。

3　三，四日目　その6“アルVS．スカラワンガ”

カフェの前に神奈川県警のパトカーが止まっていた。
警官たちの大声が聞こえてくる。
ルカはカフェの建物のすぐ後ろにきた。
「跳ぶよ」
抱えられた凜にいう。
凜はうなずいた。
ルカとアルは守護霊を足に集め、跳躍した。
凜の体にものすごい加重が加わる。息ができない。三人は山頂方向へ跳んだ。
真夏の夜空は天の川のきらめきに満ちていた。星々が一瞬で遠のき、体が降下していく。ユリスモール高等部の有料駐車場のある場所へと降りていった。
ルカの借りたレンタカーが駐車してある。
三人はアスファルトの駐車場の上にふわりと着地した。
白のフォードアセダンに乗り込んだ。アルが運転する。急発進させた。
アルが藤堂と携帯で話す。老人が病身の身を押して緊急電話に出た。
よろしい、藤堂がいう。
「院長大権を行使する」
実弾の使用許可が下りた。
アルがニヤリと笑う。復讐の笑みだ。
「ヘリは東、川崎方面に向かってる」
ルカがナビゲートする。
三人をのせて国道一六号に入った。
「リン、シホンのオヤジさん、どんな様子だった」
「人間とは思えない怪力だった」

リアシートに坐った凜は記憶をたぐり寄せる。
アルが、些細なことでいい、思い出してくれといってくる。
「そうだ、おじさん、詩本をさらうとき、おれに向かってごめんて謝ったんだ」
アルが目を細める。謝った、オウム返しにつぶやいた。
「ルカ、オレは、オヤジさんは誰かの眷族になったと思う、おまえはどう見る」
「僕も同じ意見だ、それとカフェを包囲した憑依霊は二手に分かれて飛び去った、破門者はスカラワンガのほかにもうひとりいる、あるいはかなりやり手の奴の配下の眷族か」
「どうなってるんだ、外赦院の占星官たちは、来日した破門者はスカラワンガのほかにはいないと霊視したはずだ」
アルは、きのう送られてきた外赦院からのＦＡＸ報告を詰った。
「いずれにせよ罠が待ち構えてるよ、カミュウ」
アルは無言でうなずいた。
「罠ってどうしてですか」
凜が聞いた。
「ヘリの破門者は、リョーコの命をその場で奪わず、逃亡した、そして敢えてヘリに憑依霊を憑けなかった、だから僕は憑依霊を憑かせてあとを追わせることができてる」
「詩本を囮にして、おれたちを誘ってるってこと？」
ルカがうなずいた。
「ひとつ教えてくれ、ルカ、ヘリを一気に乗っ取るだけの憑依霊はもうなかったのか？」
「うん、無念だけれど、使い果たしていた」
「……そうか」
レンタカーは第二京浜道路へ入った。
ルカがカーナビゲーションのモニターに見入った。
「ここだ、ここにヘリが着地した」
場所は、川崎駅から数キロ西、鶴見川の東側に接したところだっ

た。
地図には《ヘルマン&ハイネマン・ジャパン川崎製薬工場》と表示されていた。
アルは第二京浜を降りて製薬工場へと車を走らせた。
鶴見川に接した製薬工場は暗闇に包まれていた。所々の窓から明かりが漏れている。アルは堂々と正門前に車を止めた。近隣には化学工場などが点在していた。
工場地帯に人気はない。
「各自携帯電話のバッテリを確認して」
ルカがボディアーマーを着用しながらいった。
「OKだけど軍隊の無線とかは？」
凜もアルに着方を教わりながら訊ねた。
「第二軍団（ニグン）の官給品は性能が悪いから都市部では使わない」
アルが答えた。
三人は準備を整えると、車を降りた。
ルカは数十枚の折り紙に憑依霊を憑かせて使い魔をつくった。
いっせいに放つ。使い魔は緑色の残光を描きながら広い工場施設の各地へ散っていった。ルカが霊視に入った。
「……コントロールルームのモニタ画面が見える。警備員が十二名、全員憑依され……いや一名は眷族、武装はマシンガン、イングラムM一〇、肝心のスカラワンガの反応が見当たらない」
「ルカさん、詩本はどこ？」
「三号研究棟、P三実験区画、眷族といっしょにいる、扉手前に布のかぶった障害物」
「ほかの十一人の配置は？」
アルがいった。
「全員がコントロールルームのある本部棟に配置されてる、カミュウ少佐、リンと共にリョーコの救出を頼む」
「了解大佐」
アルはマセラッティオーネに、憑依された実弾を五発装填した。

次いで凜にも拳銃を渡した。S&WM三七エアウエイト。リボルバー式。日本警察の制式拳銃のひとつだ。エア、の名前通り軽量合金で製造されている。弾丸は実弾を五発。
凜に操作の仕方を教えた。
「カミュウ少佐、残余守護霊は？」
「39が一体」
ルカは黙ってアルの手を握った。青白い光がルカの手から現れ、アルの体へと移った。
「大佐、こんなに」
「61アーデル一体、これが精一杯だから」
「……かならず四人揃って正門前で落ち合おう、大佐、本部棟をお願いする」
ルカがうなずく。アルは凜のほうを見た。
「オレの体に触れていれば、守護霊はおまえにも力を及ぼしてくれる、オレから体を離すな」
わかった、凜が力強く応える。跳ぶぞ、リン乗れ、凜はアルにいわれ背中に乗った。
三人は跳躍した。アルと凜が三号研究棟へ。ルカは本部棟に。
アルは三号研究棟の屋上に着地した。凜を下ろす。出入り口は施錠されていた。
アルが悪霊で頑丈な金属製のドアをたたき破った。ふたりは手をつないで廊下を走った。研究棟は常夜灯のみが点灯されていた。
薄暗いなかをひた走る。
突然、ビル全体に振動と破壊音が鳴り響いた。
ふたりは立ち止まった。アルの携帯が鳴った。ルカからだ。
『少佐、実験区画周辺に巨大な霊波動の反応……スカラワンガだ』
凄まじいマシンガンの銃撃音のなかからルカの声が聞こえてきた。
「スカラワンガのお出ましか」
いまのコンクリートの崩れる大音響。
奴は外で息を潜めていたのか。突然、ノイズと共に館内放送が流

れた。
『こい、アルフォンス、リョーコはあと数分で死ぬぞ』
デジタル処理で変声された男の声。
罠だ。わかってはいる。
ふたりは左手に窓の並ぶ廊下を走った。曲がり角につきあたった。
この先左に曲がったところがＰ三実験区画だ。アルは後ろに凛を退かせ、曲がり角の手前までにじり寄った。
右手には悪霊一体１７２アーデルの招喚。
マセラツィオーネに装填した五発の実弾には各３０アーデルの憑依霊を招喚して憑かせてある。
守護霊はルカからもらった虎の子の６１。
計３８３アーデルの招喚。アルの霊力値は４１６。憑依霊招喚力はＡクラス。
アルの異次元に封印してある憑依霊は１５４アーデル分存在した。悪霊と守護霊の封印分は少ない……。射撃戦に持ち込んで、憑依弾を消費していけば、封印した憑依霊をさらに予備の実弾へ招喚できる。
スカラワンガの憑依霊招喚力は推定Ｃ。まずは射撃戦でスカラワンガの守護霊を弱らせてやればいい。
ルカと合流した後封印してやる、アルは覚悟を決めた。
濃いブルーのサマージャケットからしわくちゃの折り紙を出した。十枚数えてそれぞれに１ずつ憑依させた。使い魔を左の廊下に放った。反応を待つ。
――この先に憑依霊の塊がいた。
――緑に光るＯＡ用紙がアルたちの頭上、天井の通風口から顔をのぞかせた。
奴の使い魔だ。
アルはジャンプして守護霊で消滅させた。
エンジンの唸りが廊下じゅうに響き渡った。
それは実験区画のほうから突進してきた。アルは霊視（みた）。憑依霊

に憑かれた大型バイクが突っ込んでくる。障害物の正体はこれだったのか。
ホンダのＣＢ１０００ＳＵＰＥＲ　ＦＯＵＲだ。
「リン、背中に飛び乗れっ」
凜が乗った瞬間――。
ＣＢ１０００が左の角を曲がってきた。アルが悪霊でＣＢ１０００の巨体を殴り倒して鉄屑に変える。
ふたりの背後の天井が崩落した。
全身に守護霊をまとったフルフェイスヘルメットの男が穴から躍りかかってきた。
振り向きざま、マセラッィオーネが轟音と共に緑の火を噴いた。
男に命中する。強烈な共喰いの光。
あたりを真っ白に照らす。
男の青白い光が波紋を描くように波打った。これでマイナス３０。
男はひるまず右手に持ったなにか――鞭だ――振り下ろす。悪霊を帯びた鞭だ。
アルは見事なフットワークでかわす。後方に守護霊でジャンプした。
男もジャンプしてくる。
もう一発マセラッィオーネを撃つ。
男がのけぞる。マイナス６０。
男の守護霊はまだ健在。
アルは残り三弾を撃ち込んだ。――奴の守護霊マイナス１５０。
男の守護霊は、光を減衰させたけれど未だ輝きを放っていた。突進してくる。
こいつ、どれだけの守護霊を――アルが後方へさらにジャンプしようとした刹那、鞭がアルの左手に絡まった。鞭の悪霊がアルの守護霊と共喰いを起こす。
男が左手の拳を繰り出す。
アルがさらに後方に跳ぼうとした。

行き止まりだ。すぐ背後はＰ三実験区画だった。
悪霊と守護霊は徐々にその霊力をそぎ落としあう。
?漸減消滅?現象だ。霊力の強いほうがやがて喰い合いに勝っていく。
アルの守護霊６１が漸減消滅を始めた。５４……４９……４１。劣勢だ。
鞭が、マセラッィオーネを持つ左手に絡まって離さない。アルに照準を定める隙を与えない。
「リンッ受け取れっ」
アルは凜の持つＳ＆ＷＭ三七の弾丸に封印憑依霊１５０を送り込む。
「撃てっ」
Ｍ三七の五発の実弾に各３０アーデル。
凜は目の前の男に至近距離から撃ち込んだ。
一発目は外した。
二発目。当たった。マイナス１８０。
三発目。命中した――マイナス２１０――男の守護霊が急速に陰るのがわかる。
男は廊下の窓側の壁を左のフックでたたき壊した。
コンクリ片が中空へ吹き飛ばされていく。
四、五人が一気に飛び降りできるほどの大穴が開いた。
男が外へ飛び出した。
ここは四階だ。アルが鞭に引きずられて落ちそうになる。
男が新たな守護霊を招喚した。
男は宙づりの状態で、ホルスターからシャンパンゴールドに光るデザートイーグルを出した。
アルは凜を突き放した。一気に男と共に落下していった。
「アルさんっ」
凜は廊下の反対側の壁に激突した。激痛をこらえて壁の穴から地面を見た。

男が鞭を捨て、跳躍して別の実験棟の屋上に逃げた。
アルも跳躍してあとを追っていくのが見える。
凜の携帯が鳴った。ルカからだった。
凜はルカにアルと破門者の闘いを話した。
「こちらは制圧したよ、リン、君はリョーコのところへ急いで」
「……わかった」
凜はM三七を構えて正面の扉を見据えた。
〈P三実験区画　関係者以外立入禁止〉……。
物々しく金属製の扉に書かれてあった。

3　三，四日目　その7“ＤＯＯＲ”

詩本龍子は頭痛と共に目を覚ました。右手に携帯電話を握りしめていた。

まわりを見る。部屋は最小限の明かりだけが灯っていた。理科の実験室のようなところだ。頑丈そうなガラスケースの設置されたキャビネット、各種の実験装置。監視カメラがあった。

そして、男がいた。歳は三十代ぐらい。警備員の恰好をしている。手にマシンガンを持っていた。目が虚ろだ。憑かれている、龍子は一瞬で見抜いた。

「目、覚めたか、どうせ、死ぬのに」

龍子は、男の首からさげた身分証を見た。遠藤という名前だった。

「遠藤さん」

「そう、俺、遠藤」

遠藤は龍子のミニスカートから伸びた白い太腿を凝視していた。

龍子は立ち上がった。右足が鈍く痛んだ。まだ、捻挫の痛みが引かない。

「俺もあんたと一緒に死ぬ、死にたくないけど死ぬ」

イングラムＭ一〇を龍子に向けた。

龍子は分厚いドアを見た。小さなガラス窓がついている。その向こうにもうひとつドアが見えた。手前のドアにはタッチパネルで暗証番号が入力できるようになっていた。

入力しなければ開かないようだ。タッチパネルの脇に穴がうがたれていた。

導線が伸びている。

先にあるのは大きなダンボール箱だった。

「さわると爆発、みんな死ぬ」

龍子は首からさげたおメダイを取りだした。緑の光が消えていた。

ここは、聖域だった。

龍子は大きく深呼吸をした。
「どうやったら爆発するの」
「あいつ爆発しないとか大嘘ついてたから……もういいや……ドア、壊そうとしたら爆発。暗証番号が正しくても、間違えても、入力したら爆発。俺、あんた、助からない」
「そう？」
龍子は渇いた唇を舌で潤した。
「あんたの仲間がきたら、この銃でドア、ぶっ壊せってさ、でも俺、仕掛け、わかったから」
「ねえ遠藤さん、暗証番号はこのドアのパネルから直接打ち込むしか方法はないの？」
「コントロールルームからも遠隔操作できる……でも俺の仲間がいる」
「ふーん、そうなんだ」
「……もう駄目、助からねえ、俺、あんたみたいなかわいい女とつきあいたかった、なのにもう死ぬ、嫌だ……ひでえよ、工業大学出れたのに、工学の知識あんのに、就活の面接でいつもしくじっちまった……俺、最期にあんたとヤッて死にてえ」
イングラムを向けた。
「撃ちたければ撃ちなさい」龍子の声が実験区画に響き渡った。
遠藤はうろたえた。
「撃ちなさい、さあ」龍子は足を引きずり歩みを進める。
遠藤は後ろに下がった。
「よせ、俺、人殺したくない、あんたみたいな、いい女を殺すなんて、できねえっ」
「お願い、撃って欲しいの、いまなら間に合うの」龍子はさらにじり寄った。
遠藤は片手を頭にやった。痛え、と叫んだ。体を上下に揺さぶった。
「……どうしたの」

遠藤がシャツのポケットからしわくちゃの小さなビニールパックを出した。なかにカプセル状の薬のようなものがいくつも入っていた。
ひとつかみ出して口に放り込む。噛み下すと、肩で息をし出した。おおきく何度もあえいだ。頬を涙が伝った。
「痛えよ、頭痛え、チキショウなんで俺ばっかりこんな目に遭うんだよ」
泣きじゃくりながらさらにカプセルを何粒か飲み込んだ。
龍子は思いだした。大谷しづゑさんも飲んでいた。ホールデンさんのＵＳＢメモリにも眷族に関する文書ファイルがあった。適性のあまり合わないヒトが眷族になると、脳に重大な障害が出るという。それを抑え込むためには、さらにこのカルマ人の血液の入ったカプセルを飲みつづけねばならない体になっていってしまうのだと、そう書かれてあった。
「ダメだ、もう、痛くて……死にそうだ」
床にうずくまった。
遠藤は自分の腹にむけてイングラムを撃とうとした。
「やめてっ」
龍子が飛びかかった。龍子の反射神経が勝った。
イングラムの銃口を遠藤の体から逸らした。マシンガンの銃弾が爆音を立てた。弾丸が実験区画の設備を破壊していった。
「お願い、何人もの人が死んでしまったの、あなたまで命を粗末にしないで」
龍子はイングラムを奪い取った。遠藤はあらがう体力を残していないようだった。龍子の顔を見た。きれいだなあ、アンタ、そうつぶやいて笑みを浮かべた。両眼の焦点がおかしくなった。痙攣（けいれん）を始めた。
「遠藤さん、しっかりしてっ」
遠藤は吐血して倒れた。龍子は遠藤の上半身を抱き起こした。
「遠藤さん……」

遠藤が苦しい息の下、口を動かす。龍子は耳をすまして聴く。遠藤がしゃべり出す。
「……ひゃ、百万くれるっていうから、治験のバイトだからって、黒人のオッサンに……渡されたカプセル飲んだ、何週間も飲み続けた……それからおかしく……なっちまった」
龍子は遠藤の頭を優しくなでた。遠藤は震える手で首からさげたお守りを出した。
非道い、龍子はつぶやいた。だまされて眷族にされてしまったのか。
「初めて、おふくろに仕送り、できたんだ、派遣をやるようになって、初めて……」
「もう、しゃべらないで」
「あんたに、聞いて欲しい、から」
遠藤は龍子の胸のなかで、最期を決意した表情でいった。
「……」
龍子はうなずくしかなかった。
「これ、おふくろが、送ってくれた、仕送り喜んでくれて、送ってくれた近所の、神社の……」
遠藤は吐血しながら、なおもしゃべりつづけた。近所、ガキの頃、よく遊んだんだ――。
遠藤は痙攣する指先で龍子の頬を撫でようとした。
「アンタ、母さんみたい……だ、いい匂い……する」
龍子は遠藤の手を握りしめた。自分の頬にあてがってやった。
「おれたち、しぬんだ、ごめんなさい」
ごめんなさい、遠藤はさらに何度も繰り返した。
龍子は遠藤を抱きしめた。
「……かあさん?……ああ、かあさん、きょうね、ばんごはん、ね……」
遠藤は朦朧とした表情で、最期にそういった。血を吐きながらも笑顔でいった。

両眼と鼻からも鮮血を流しはじめた。
息絶えた。
龍子は遠藤の両眼を閉じてやった。
「私こそごめんなさい、巻き込んでしまって……」
遠藤の上半身をそっと床に置いた。ドアのほうを見た。
そのとき、奥のドアが開いた。
「――凜兄っ」龍子はドアに片足をかばいながら駆け寄った。
凜がドアの向こうでなにか叫んでいる。まったく聞こえない。
凜が、手にした拳銃でドアに向かって二発撃ち込んだ。
「やめて凜兄っ」
龍子は携帯を窓に近づけた。手で指し示す。凜も携帯を手にとった。駄目だ。圏外だ。
分厚いドアに電波が遮断されているのだろうか？
龍子は夢中でメール画面で文章を打った。文章を窓に近づけて見せた。
《爆薬がしかけられてる。こじ開けたら爆発する》
凜もメールで文章を打って見せた。
《かんたんだ、じゃあ横の壁を悪霊でぶち抜けばいい》
《ダメ、ここ聖域みたい》
凜は、驚いた様子で自分のおメダイを見た。凜は息を呑んだ。
《なんとかする方法は？》
龍子は迷った。
《正しい暗証番号を入力すれば開くって》さらに打つ。《向こうに倒れてる警備員に聞いた》
凜は血相を変えた。のぞき込んだ。凜のほうからは、実験器具に邪魔されて、遠藤の脚だけしか見えないようだ。首を振って、パニックになったように顔をゆがめている。
《どうしたの？》
《ドアのパネルを拳銃でぶっ壊したどうしよう》
龍子は、ほっと安堵の吐息を漏らした。

《コントロールルームってところから遠隔操作できるって》
凜の表情が笑顔に変わった。
《よかった、ルカさんがそっちにいってる、暗証番号教えて》
龍子はふわり、と笑った。
《その前に教えて、お父さんはどうしてる？》
凜の表情が強張った。
《警察に連れて行かれた》
凜は、必死の笑顔を作った。
凜兄……いつも顔にすぐ出る、そんな彼を龍子はずっと見続けてきた。龍子はうつむいた。
泣くな、自分に言い聞かせる。凜兄の前で泣くな、と。
凜がドアを叩いた。龍子は顔を乱暴に拭いた。
《おまえ無理すんな、おじさん、いま留置場にいるけど、泣きたいときは泣け》
龍子は首を振った。
《凜兄の前で泣いたことないから》
《嘘つけ、おまえ昔大泣きした。おれが生まれて初めておまえの泣くところ見たんだ》
《いつ？》
《裏の館の倉庫に立て籠もったとき、おまえメイを見て泣き出したろ。あれで思い出した》
龍子は首を傾げた。
《かぬかの亡くなった日だ。おまえ大泣きした。おれもスゲえ泣いた。あのときおまえ誓ったろ、自分が泣くとおれも泣くから、おれの前では泣かないって》
「……凜兄」
《おまえ、あの日から強くなろうとしてブルース・リーにハマったんだよな》
《なにエラそうなことといって、忘れてたくせに》
《忘れらんねえよ、かぬか、おれのこと好きだったんだから》

龍子は凜の瞳を見つめた。凜兄、伊丹の想いに気づいていてくれたの？――。
龍子は思わずにはいられなかった。
《凜兄、伊丹の気持ちに気づいてたの》
《当たり前だろ、かぬかのやつすぐ顔に出すんだぜ》凜がなつかしむように笑った。
龍子もつられて笑う。あなたを好きになってよかった、心から想う。
《ばっかみたい、どっかの誰かといっしょじゃん》
《誰だよそれ》
《たとえば目の前の誰かさん》
凜はふくれっ面になった。
《私とこの夏対戦するたんびに、私の胸見てひとりで赤面しそうになってた》
凜の顔があっという間に赤くなった。
《オトコってやらしーよね、女なら誰でもいいんだ》
凜は下を向いた。龍子はドアを叩いた。
《図星でしょ、ほら》
凜が、龍子を見た。正面から逃げずにまっすぐ見つめてきた。
《誰でもよくねえ》
凜は一呼吸おいた。意を決したように携帯を、迷いを断ち切るように素早く操作した。
《良子、おまえが好きだ》
龍子は、ぷっと吹き出した。
ここぞってときに誤字変換だ。無理もないかも知れない。いままで凜兄は自分のことをずっと詩本、と呼び続けてきたのだから。携帯の変換でもりょうこ、で龍子は出なかったのだろう。
《凜兄ったらサイテー》
凜は携帯の液晶画面をのぞき込んだ。あわててまた文章を打つ。
《龍子、おまえが大好きだ。おまえが自分より強い奴しか好きじゃ

ないってことは知ってる。それでも好きだ》
凜兄……ドアを隔てて、一枚向こうに最愛のひとがいる。
いますぐ抱きしめて欲しかった。龍子も返事を打った。
《私も凜兄のこと好きだよ》
凜は、真っ赤になりながら、それでも龍子のことを見つめてきた。
《マジでかよ》
《うん、凜兄、大好きだよ、伊丹との約束、破らずにすんだ。ありがとう》
《約束ってなんだ》
《ごめん、女同士の秘密ってことで》
《おれ、もうすぐカルマ人ってやつになるんだ、強くなる。おまえを守れる男になるんだ》
龍子は、うん、とうなずいた。
《頑張ってね、正義の味方》
凜は、いてもたってもいられない、そんな風になってそわそわし始めた。
《破門者倒して、ベーヨコ、いっしょにいこうぜ。十月おまえの誕生日だ。一日遊び放題だぞ》
龍子はまた、うん、とうなずいた。震える指先で、デジタルの文字を打っていく。
《ノリさん、タツさんは？》
《ぴんぴんしてる》
《メイは？》
凜の顔が曇った。
《大火傷負ってる、ノリさんたちに任せて龍子を追ってきた》
龍子も不安がこみ上げた。あの仔にもしものことがあったなら、そのときこそほんとうに伊丹かぬかとの絆が切れてしまう、そんな恐怖に駆られた。
《お願い凜兄、メイを助けてあげて》
《約束する》凜は力強くうなずいた。

龍子はふと、疑問に思ってきたことを思い出した。
《凜兄、メイを拾ってきたってほんと？》
《嘘。ロシアンブルー超高えし、買えねえからゆずってくれる人必死になってネットで探した》
そうだったのか。
《かぬかのことネットの掲示板に書き込んだら、ようやくゆずってくれる人が見つかった》
龍子は、顔を見せることができなくなった。
《凜兄、初めていうけどサイコー♪》
龍子は、しゃにむに片手でハンカチを探した。見つけて目許を拭った。
《なんだそれ、遅ーんだよ》
後ろのドアが開いた。アルさんが飛び込んできた。
もう、安心だ。
凜とアルが話し始めた。アルが事情を飲み込んだようだ。アルが凜をせかしている。
凜があわてて文章を打ち込む。
《長居は無用だ、暗証番号教えてくれ》
龍子は一文字一文字力を込めて打った。
《７４５５５５》
龍子は、精一杯、いままで生きてきたなかで最高の笑顔を凜に見せた。
凜は笑顔で応えた。アルも笑顔を小窓に見せた。
龍子は親指を立ててサムズアップのサインをした。凜とアルもサインで返した。
ふたりは奥のドアを開けて走り去った。
これでだいじょうぶだ。あとはルカがやってくれる。
龍子は背を扉に預けた。
「私、最高の笑顔できたかな、凜兄に見せられたかな」
声音が震える。恐怖という名の感情に喰われそうになる。

ジョン・レノンを歌いながら、足を引きずっていく。床にうずくまり、遠藤警備員の亡骸に寄り添った。彼の上半身を胸に抱きしめた。子守歌を歌うように〈スタンド・バイ・ミー〉を歌った。歌いながら、遠藤の背中をやさしく、あやすように叩いてやった。

繰り返し、何度もおなじフレーズを歌った。

はたと気づいた。そういえば、この歌は、ベン・E・キングの歌だっけ。

まあいいや、と思う。ジョン・レノンはこの歌をカバーしていたから。

「凜兄、私、やっぱめんどくさい女だったね」

ダンボール箱からのぞいて見えるランプが点灯した。

龍子は、遠藤の亡骸をぎゅっと抱いた。

ダンボールが爆発した。

3　三，四日目　その8“開くカルマ”

凜とアルは廊下を走っていた。ルカのいるコントロールルームに携帯がつながらない。

「リン、地上に降りるぞ、背中に乗れ」アルは業を煮やした。

ふたりは、フルフェイスの男、スカラワンガの開けた大穴から地上に降り立った。

アルは携帯型軍用無線機で交信を試みた。通じない。電波妨害（ジャミング）を受けていた。

「アルさん、スカラワンガの野郎が邪魔してるってことはまた襲ってくるかな？」

「さっきのような強襲はまずない、奴の使役霊は相当弱ったからな」

ふたりは建物を迂回して本部棟に向かって走った。凜は携帯をかけ続けた。圏外だったものがアンテナ三本になった。ルカの携帯につながった。ルカさんっ、凜は携帯に叫んだ。

『リン？　いまどこにいるの？』

「いま、アルさんと、ええと一号って書いてある建物の前」

凜は、龍子を助けるための暗証番号のことを話した。

『７４５５５５、間違いないね』

「うん、頼むよルカさん」

『……おかしい、エラー表示が出た』

ルカの緊迫した声が聞こえた。

「なっ――」

地響きが聞こえた。三号研究棟からだ。大爆発の炎が吹き上がった。

凜とアルは爆風に吹き飛ばされた。アルは危ないところで守護霊を招喚した。

ふたりは、爆風を跳ね返す安全な守護霊のバリアのなかで見た。

三号棟のほとんどが崩落していた。爆炎に包まれ跡形もなくなっ

てしまっていた。
「嘘だ、そんなの嘘だ、龍子っ」凜が叫んだ。
アルは無言で三号棟の残骸を睨みつけていた。
「下ろせ、下ろせよ、龍子を助けなきゃっ」
「……ダメだリン、まだ炎上してる」
「いやだ、嘘だこんなのありかよおおおっ」凜は力の限り絶叫した。
「リン？」
凜の力は尋常なものではなくなっていた。
アルは急に後ろへと守護霊が吸い寄せられていく感覚を覚えた。
凜が？封印？を始めていたのだった。
凜は咆吼をあげて跳躍した。アルから吸い取った守護霊で夜空を飛翔していく。
「リンッ」
アルは即座に跳躍してあとを追った。
凜は三号研究棟の炎のなかへ入っていく。炎が守護霊にはじき飛ばされていく。
「駄目だリンッ、聖域に踏み込んだ瞬間使役霊が使えなくなるぞっ」
このままでは凜が炎のなかで焼け死んでしまう。
アルは憑依霊を感じ取る。凜がスカラワンガに対して外した一発。さらに発射したらしい二発の憑依弾。爆風で吹き飛んでいた。帰ってこい、念じる。３０アーデル憑依した潰れた弾丸が三発飛翔してきた。アルの手の中に収まる。受け取った憑依霊を地上に展開させた。使役霊が霊力を失うことなくカバーできる限界――１アーデルにつき二平方メートル――まで９０アーデル分が地表を覆った。巨大な炎が酸素を遮断され鎮火された。聖域の一角だけが炎をあげていた。アルは、我を失っている凜に奪われる前にすかさず三体の憑依霊を封印し直した。
煙のくすぶる残骸のなか、ふたりのカルマ人が立ち尽くしていた。
「ああ、うあああっ」
凜はもがき苦しみ始めた。

アルは感じ取った。
凜が周囲数キロ四方のありったけの自由霊を集め始めていた。
しかも容易に見つかる、悪霊、憑依霊になりやすいタイプの自由霊たちだ。凜は悲痛な叫びを上げつづけていた。
〈因縁霊〉〈地縛霊〉〈浮遊霊〉……さまざまな自由霊たち。封印され、凜の異次元で悪霊と憑依霊、二種の使役霊と化していく。
使役守護霊になってくれる自由霊〈指導霊〉はまったくいなかった。
アルはマセラッティオーネにペイント弾を一発装填した。憑依霊をペイント弾に２０アーデル憑かせた。凜に吸い取られた守護霊を瞬間消滅させるには充分な量だ。
狙いを定め撃った。凜の小柄な体躯に命中した。凜の守護霊が消えた。
凜が狂気に満ちた両眼でアルを睨めつけた。体に付着した憑依弾の生き残り数アーデルを封印した。ハーフパンツの腰に差していたＳ＆ＷＭ三七エアウエイトを引き抜いた。弾は残っていない。凜はＭ三七を放り捨てた。悪霊を招喚する。突進してきた。左右の縦拳を繰り出す。
アルは跳躍した。凜のすぐ背後に回り込んだ。凜が振り向く。
アルはワンインチパンチ――截拳道の奥義――を凜の腹部にめり込ませた。
相手はカルマを開いた肉体だ、手加減はしなかった。無論、悪霊は招喚しなかった。
凜は口から泡を吹いてその場に倒れ込んだ。アルは支えてやった。
力強く、抱きしめた。

4　四日目　その1“猫”

ルカは、コントロールルームのなかにひとりいた。
整然と並ぶ制御卓の前でひとり、凜とアルの闘いを霊視していた。
携帯でイタリア語のメールを送った。相手はネーベ内赦院院長だった。
《オペラツィオーネ・アンツィオ前半段階成功しました。後半段階に移ります》
ルカに向かっていくつもの使い魔がもどってきた。ルカに憑依霊を封印し直されて、ただの折り紙にもどっていく。ルカは一枚一枚丁寧に折りたたんでリセバッグにしまった。
ルカは携帯を、日本語入力できるもう一台のほうに取り替えてみた。
ダイヤルボタンを見た。
?7?と?4?を、それから?5?を四回押すと……。
「74555555……リョーコ、君の想い、受けとめたよ」
ルカは携帯を閉じた。
制御卓の上の通信電波妨害装置をリセバッグにおさめ、足早にルームをあとにした。
彼の坐っていた席の制御卓には――三号研究棟のP三実験区画の暗証番号を遠隔操作するパネルがあった。
パネルには《74555555　暗証番号が一致しません。再入力願います》との表示が点滅していた。

四日目

ルカは霊視の瞑想を解いた。
窓にユリスモールカフェからもどってきた使い魔が張り付いてい

た。
新横浜のホテル・グランパレスの三五階からの眺めは素晴らしかった。
ルカは窓辺から離れた。
「カフェにいたニッポン警察は撤収したよ、立ち入り禁止になってるけれど」
「そうか」
アルは唇を噛んだ。無性に喉が渇く、そんな感じだ。
アルはソファに坐っていた。E五〇マセラッィオーネの手入れを終えた。ショルダーホルスターにおさめた。ブルーのサマージャケットを着る。
狭いシングルルームのベッドに凜が横たわっていた。意識不明の状態が続いていた。
「ルカ、リンのカルマの開いたのと、リョーコの死、関係あると思うか」
「……わからないな、前例が機密文書館で眠ってるはずなんだけれど、リンの過去、聖域での肉体滅亡のケースがね、ただ、精神的ショックが与えた影響は充分推測できる」
アルは、ルカの目を、サングラスをじっと見つめてくる。
「カミュウ？」
「おまえの霊視でも、わからないことがあるのか」アルはうつむいた。
「僕は万能じゃないよ、カミュウ……」
アルの携帯が鳴った。二台ある携帯のうちの軍団で使うほうからだった。もう一台、修大生としてのアルの使う携帯には、出ないようにしていた。チャイニーズ・マフィアから必死に逃げ回っている、そういう演出をせねばならなかった。ルカとチマブエも口裏を合わせる算段になっていた。電話の相手は藤堂外赦院院長だった。
『黒塚凜のカルマが開いたそうだね、いま報告書を読んでいるよ』
「リョーコ・シホンの保護に失敗、スカラワンガの罠で彼女は、殺

害されました。リンはショックで昏睡状態です。どんな処分も受けます」
『アル……自分を責めてはならん』院長の声音にも苦痛の色があった。
『正式な処分は追って通達するよ、いまは黒塚凜の保護に全力を挙げて欲しい、君は任務の失敗に慣れておらん、メンタル面が心配だ』
「ご心配にはおよびません」
『……昨日しづゑのお孫さんが生まれたとき、日本に帰国してお祝いした。月日は早いものだ』
「オレは出席できませんでした、院長、リョーコ・シホンとシヅエ・オオタニ曹長のために祈りを捧げてください」
『うむ』
長い間があった。
『……しづゑのお孫さんが生まれたとき、日本に帰国してお祝いした。月日は早いものだ』
「はい……ところで二体目の破門者の来日は確認できたのですか」
『まだだ、報告を聞いてこちらも占星官が再度の霊視をおこなっている』
「正確な情報を期待します、両院協議会を通じて、内赦院との合同霊視を意見具申します」
『すでに申し入れたよ、アル、ネーベが拒否権（ヴェトー）を行使しおった、合同霊視の見返りに、有力な第二軍団員を何人か、第一軍団に寄越せといいおった。要求リストにアル、君の名前があった』
アルは大きく深呼吸した。空いた手の拳を握りしめる。唇を噛んだ。
「前線を政争の具にしたいのでしょうか」
『怒りはわかる、アル』
藤堂院長がアルをなだめる言葉をかける。
アルの耳には入ってこなかった。
『――アル、どうしたね』
黒塚凜が、むくりとベッドの上で上半身を起こしたのだ。澄んだ

瞳で、窓のほうを見ている。
「竜一おじさん」
「カミュウ、リュウイチ・シホンの霊だ」ルカが室内の一点をじっと見つめた。
アルも内赦院への怒りを静めた。遅れて詩本竜一の霊を感知した。
「オヤジさん、自由霊になったのか」
「おじさん、……うん、そうか、急ごう」
凜が虚空に左手を差し出す。手の先にまばゆい青白色の光が現れた。
凜の体に入っていった。
詩本竜一は黒塚凜の守護霊になった。
凜はふたりを見た。
「ルカ大佐、アル少佐、おれ、龍子と約束したんです、メイを守るって。カフェに跳びます」
アルが立ち上がった。
「体調はだいじょうぶなのか、リン」
凜は微笑んだ。以前の凜のする表情ではなかった。
窓辺に立った。窓を開けると一気に飛翔した。
速い。
ルカが荷物を持つとあとを追って飛翔していく。アルは院長に事情を説明して通話を切った。
「リンッ」
アルもつづいた。
昼？の飛翔。ヒトに目撃されてはならない。三人は守護霊を総動員して高く、高く跳躍した。
ビルからビルへ。ルカがやっと凜に追いついた。
「リン、日中は一般人に目撃される危険が高すぎる、控えたほうが」
「急がなきゃ、メイが死にそうなんだ」凜はさらに高空へ、真夏の陽ざしを一身に浴びながら、カルマ人にとっての？常識？を凌駕する極みの空へと跳んでいった。

「信じられない」ルカは目をみはった。
アルがやってきた。
「リンは？」
「大変な跳躍力だ、追いつけないよ」
「なんてこった」
リン・クロヅカ……どれほどの潜在能力を秘めている？　ふたりは、人目を忍んで六階建てのマンションの屋上から降下した。走り出す。とにかくユリスモールカフェにもどらなくては。
「なあルカ、？リンが誰だったか？わかったか？」
「ダメだ、リンの霊波動はまだ不安定でつかめない……でもおかしいよ」
「なにがだ」
「あれほどのカルマ人なら、僕の記憶のなかにあるはずなのに」
凜は高度千メートル近い上空の突風を切り裂き、入道雲のなかを跳んで、新横浜から二十キロ以上離れた紅葉ヶ丘まで数回の跳躍でたどり着いた。守護霊に包まれた体を急降下させる。
凜はカフェの屋根の上にふわりと音もなく着地した。カフェのなかに入った。
メイは、一階のカウンターの内側に無造作にうずくまっていた。ほとんど死にかけている。大火傷を負っていた。
凜は猫に両手をあてがった。
「ほんとにいいんだね、おじさん、猫、あんなに嫌っていたのに」
？――――――――？
「……うん、わかった、龍子との約束だもんね」
凜の手から青い光が猫へと乗り移った。やさしく暖かみを帯びた光が、小さな体を包み込む。
光が脈打った。メイの小さな体の傷をすこしずつ、癒していく。
光が衰えていく。竜一の霊体が、声が弱っていく。醜い火傷の傷が徐々にふさがっていった。
「……頑張って、おじさん、メイ」

凜は静かにふたつの魂の鼓動を見守った。

4　四日目　その2“封印の儀”

――黒塚凜とメイはしばらくのあいだ静寂な時間を共にした。猫はゆっくりと呼吸していた。

凜、アルフォンス・カミュ、ルカ・ユルゲンスの三人は、カフェで再会した。

チマブエがルカに携帯で連絡してきた。神奈川県警の事情聴取で語った作り話だ。彼の用意していた筋書きを――きわめて不本意ながら――ルカはふたりに話し、確認しあった。ルカが天井の監視カメラを見た。アルが凜に監視カメラの設置してあることを話した。数分後、天井のスピーカから女性の声がした。十字軍第二軍団日本戦区司令部だ。当局へ出頭の許可を与える旨の通知だった。そのあと三人は神奈川県警の事情聴取に応じるため北相模原署に赴いた。

三人が帰宅を許されたのは夕方五時を回った頃だった。

川上徳人、杉浦達也が、先に事情聴取から解放されて署の前の駐車場にいた。

三人に駆け寄ってくる。

「アルさん、詩本ちゃんどうしちゃったんすか」

達也が切羽詰まった声音で聞いてきた。

「ケーサツに全部話してきた、リョーコから聞いたんだが、自分のオヤジさんと横浜のチャイニーズマフィアのクスリの取引、見ちまったそうなんだ」

「リュウイチさんの自宅から薬物が見つかったんだ。彼の体からも薬物反応が出たらしい。君たちの見た彼の怪力は薬物の効果に依るものだったみたいなんだ」

ルカが話を引き継いだ。

チマブエが詩本邸に隠した薬物が警察によって発見されたのだった。チマブエの注射によって決定的となった。徳人と達也が龍子のことを聞いてきた。

「オレたちは車で逃げ回ったよ、新横浜でリョーコを逃がした。遠い親戚を頼るっていってた」
「遠い親戚っつったって、詩本ちゃんが可哀想すぎますよ、それじゃあ、おい、タツ泣くな」
「……泣いてねえッスよ」
達也はティッシュで鼻をかんだ。
泣いてんじゃんかよ、そういって徳人も涙を乱暴に手で拭いた。
「黒塚、落ち込むんじゃねえぞ、詩本ちゃん強いからぜってえだいじょうぶだって」
「ありがとう、ノリさん」凜は控えめに笑みを浮かべた。
徳人が、凜の持っているプラスティックケースを怪訝そうな眼で見た。
「猫用のキャリーバッグです、メイがいま眠ってるんです、警察に預かってもらってました」
メイ助かったのかよっ、徳人は驚き、ケースののぞき穴を見た。猫が静かに横たわっていた。
「まだ不安定だからつきっきりで見てるんです」
徳人は信じらんねえ、を連発した。
五人はプジョー四〇三コンバーチブルに乗って北相模原署の駐車場から走り去った。
凜はサイドウインドウから見える景色を眺めていた。穏やかな紅葉ヶ丘の町並みが見えてきた。子連れの主婦が買い物袋を下げて歩いている。幸せそうに子供がはしゃいでいた。
これが、凜と龍子のいた――龍子はもういない――日常だった。平和で、それでもなにがしかの悩みがあって、時折ニュースで怖ろしい報道のもたらされる、そうした世界だった。
凜は携帯のワンセグでニュースを見てみた。紅葉ヶ丘事件の続報。東京の一家五人放火殺人事件、容疑者の在日朝鮮人は中国に逃亡しており、逮捕は容易ではなかった。与党の国会議員が汚職で逮捕される直前自殺して被疑者死亡のまま書類送検された事件。いじめと

暴行を苦に自殺した高校一年女子の控訴審判決、被告人の女子生徒らは、複数のクラスメイトの？いじめはなかった？との証言で無罪が確定した。遺族の両親が記者会見で泣き崩れていた。
日本も、外国も、ユートピアじゃあない。それぐらい高校二年の凜にはわかっていた。
わかってはいたけれど、少なくとも自分の知っている世界には、ヒトの霊を操る超常の異能者など存在しないはずだった。それが常識だった。脆くも潰えてしまった。その常識と日常の名残があった。携帯だ。アドレス帳を呼び出した。ゼロ三個のところにたしかにある。
《詩本龍子》の電話番号、メアドを見た。電話番号とメアドは、そこに残ってくれていた。
車内で誰かの携帯が鳴った。〈イマジン〉の着うただった。
――龍子の着うた。
凜は慌てて携帯に出ようとした。鳴らしたのは達也だった。詩本ちゃんの着うた、イマジンにしたんすよ、達也が徳人にいった。徳人が俺も、といってダウンロードし始めた。
「詩本ちゃんのいちばん好きな歌なんだよな黒塚？」
達也が聞いた。
アルが凜を振り返って見た。
カミュウ、前を見て運転して、ルカが小声でいった。
「――うん、大好きですよ」
凜は小さな笑顔で応えた。
徳人と達也は、東京に用事があるから、そういって紅葉ヶ丘駅で車を降りていった。
プジョーがカフェに到着した。警察による立ち入り禁止は日中のうちに解除されていた。
カフェからは灯りが漏れていた。ふたりの男の声が聞こえてくる。
アルが最初に入った。男ふたりが立ち上がった。チマブエと伊丹爾三郎神父だった。

「神父（ドン）・イタミ」
アルは予想外の賓客に顔をほころばせた。
「おお、アル君、なんと申し上げればよいのか」アルと伊丹神父は固い握手を交わした。
「お坐りください」
アルは伊丹に席を勧めた。
ルカが五人ぶんのコーヒーを淹れた。伊丹がルカに砂糖もミルクもいりません、そう伝えた。
「――ありがとうございます、ルカさん」
伊丹はコーヒーを受け取った。
アルのコーヒーを口に運ぶ手が止まった。
「なんという残酷なことでしょうか」
伊丹は重々しく、詩本竜一の死を悼む言葉を口にした。
「ドン・イタミに事件のことをお話ししていたのです」チマブエがいった。
「凜くん、つらいでしょうが気を落とさないで下さい」
「はい、神父様」
凜は聞いてみたかった。龍子が伊丹神父に赦しの秘蹟でなにを語ったのかを。無理な話だ。信者と神父だけの秘密とされるからだ。それでも、神父様、と凜はいいかけた。
「ところで、？龍子さん？はどうなさったのでしょう、心配です」
凜は全身を強張らせた。
「ええ、なんとか逃がしてあげたのですが、本人は警察で保護されるのを嫌がっています」
アルがいった。伊丹はうなずいて、暗い表情を浮かべた。
「あしたの仕込みがありますので、ちょっと席を外します」
アルはいって、キッチンの奥へ引っ込んだ。
凜、ルカ、チマブエ、伊丹の四人が残った。
「アル君は気丈な青年です、凜くん、どうかあなたも見習ってください」

「そりゃどうも、神父」
凜は上目遣いにいった。神父を見る目が据わっている。
「……どうかされましたか、凜くん」
伊丹は凜の怒気をはらんだ表情を見ていった。
アルがキッチンの奥から出てきた。守護霊をまとっている。マセラッティオーネを構えた。
カウンター越しに伊丹に向かって銃口を向ける。
「アルくん、いったいなにを」
「猿芝居はやめろ、ドン・イタミはルカ・ユルゲンスとは初対面だ、なぜ名前を知っている」
全員がウインザーチェアから立ち上がった。ルカが冷静に、チマブエは慌てて守護霊を招喚した。
凜も、わずかに残った詩本竜一の守護霊を――大半はメイの命を助けるために消滅した――招喚した。唇を噛みしめて、必死に激情に耐えていた。
「それは、龍子さんからお名前をお聞きしました」
伊丹は血相を変えている。
「ドン・イタミは娘のカヌカ・イタミとの約束を守ってきたんだ」
アルがいった。
「そうだよ」
凜がいった。
「かぬかは龍子を下の名前ではぜってえ呼ばなかった、龍子が嫌ってたからだ、父親の伊丹神父もそれに倣って、かぬかの死んだあとも龍子のことをかならず詩本さん、と呼んできたんだ」
「待ってください、なにをおっしゃってるのか――」
「ルカ、こいつに憑依霊を憑けてやれ」
カルマ人なら憑依霊は瞬時に封印されて消えるはずだった。
「……おかしいぜ、あのアル中神父の記憶はコピーしたはずだったのによ」
伊丹の表情が激変した。破門者は全身に守護霊を招喚させた。

凜の顔に憎悪が、これ以上ないほどの激しさで浮かんだ。
「てめえ、伊丹神父にまで呪肉しやがったのかよっ」
凜は怒りのかぎり声を上げた。
「久しぶりだ、ルカ、アルフォンスよ」
下品な嘲笑を浮かべた。両眼がつり上がる。伊丹爾三郎神父の肉体に呪肉したスカラワンガがそこにいた。
「破門者視認、霊波動スカラワンガ、憑依実弾発砲の許可を請う」
アルは、カフェのマイクに向かっていった。銃口は伊丹の心臓を精確に捉えて離さなかった。
『……発砲を許可する……いや……許可しない現状維持せよ』
第二軍団司令部将校が答えた。声には動揺があった。
突然女性下士官の声が割り込む。ローマより直通回線開きます――。
『――カミュ少佐、正当防衛でないかぎり攻撃は許可できん、スカラワンガはカソリック教徒の肉体に入っておる。攻撃権限は内赦院にある、治外法権だ』
藤堂院長のやむにやまれぬ、そんな声がスピーカから漏れる。
「治外法権なら軍法会議で甘んじて処罰を受けます」
そんな原則は百も承知の上、アルの怒気のこもった声には言外にそんなニュアンスがあった。
『それが治外法権は十字軍軍法では裁けなくなった、教会法外典破戒行為に昇格したのだ』
「通達が下りてません、いつですっ」
『教理省の外典委員会から半時間ほど前通知がきた。アル、発砲すれば、外典破戒だ、君を十字軍破門せねばならなくなる』
藤堂は怒りと苦痛を抑えた声でそういった。
「お待ち下さい院長、外赦院はこの破門者と前日からすでに交戦状態にあります」
待ちたまえルカ、藤堂がいった。スピーカから秘蹟認定局の幹部の声が流れ出した。

『前線へ通達、我が局は、前日の敵がスカラワンガだという正式の認定を未だ――』
「目の前でリョーコの仇が嗤ってやがるんだっ」
アルが幹部の声を圧倒した。
「私に銃をかしてください、カミュ少佐」
チマブエがいった。
アル、ルカ、凜の視線が集まる。スカラワンガはあいかわらず半笑いを浮かべていた。
「私こそ内赦院隷下第一軍団員。私ならば攻撃要件を満たします」
チマブエが手を差しだす。
「許可できない、第一及び第二軍団員相互の武装の貸与は軍法違反行為だ」
ルカがいった。
「なにをおっしゃるんです、大佐、いまとなっては形骸化している内規ではありませんか」
チマブエがうろたえる。アルはルカを見据えた。
「大佐？」
アルはつぶやいた。ルカの真意を探ろうとして、鳶色の眼に疑念がこもった。
ルカはゆっくりと首を振った。
『その通りだ、拒否権（ヴェトー）を行使する』
ネーベ内赦院院長の声が流れた。
『ネーベ、チマブエ少佐の提案が最善策だぞっ』
藤堂がめずらしく声を荒げた。
『貴院の支援は受けぬ、シニョール・トードー』
ネーベはあくまで冷たい口調だった。
『ネーベ、いい加減にしたまえ、私にも受忍限度というものがある』
『調べたところ教理省の決定は十八時間も前に成されていた。我が院への通達はつい今し方だった。私は教理省の怠慢を教皇猊下に効奏するが、貴院も加わらぬか？』

『猊下の威を借りてまで論旨をすり替えるか、ネーベよ』
藤堂の声が震えた。
スカラワンガの嘲笑がさらに大きくなった。
「聞いたかリン・クロヅカ、これが十字軍、ヴァチカンとやらの実態だ、ただの腐った官僚組織にすぎん、いまからでも遅くはねえ、我が？父祖の戦列？序列第？列に加わるがいい」
「……うるせえ糞野郎」
「では私は予備の武装を持ってきます」
チマブエは夕闇の迫る丘陵の坂道を敵前逃亡の体で走り降りていった。
ふざけるなっ、アルがイタリア語であらん限りの罵声を上げた。
――ルカが凜のそばに寄ってささやいた。
凜の焦りの表情が変わる。うなずいた。
「やれやれとんだ茶番だったぜ、出直すとしよう、撃てるもんなら撃ってみろや」
スカラワンガは蔑みの視線を三人に寄越した。ウインザーチェアから立ち上がった。
アルの銃口の前を悠然と横切って出て行こうとする。
凜が、ドアの前に立ちふさがった。
「リン・クロヅカ、なんの真似だ、ああ？」
「藤堂院長、おれの身分は？　おれはまだ十字軍に入ってないはずですよねっ」
凜が監視カメラに向かって叫んだ。悪霊を招喚した。両の掌に１２５と８３アーデル。
「お前、序列ド真ん中なんだってな？　半端野郎はおれひとりで充分だぜ」
凜が嘲笑い返した。
『黒塚くん待ってくれたまえ、君には実戦はまだ早すぎ――』
「……このカルマを開いたばかりの小僧っ子めがあっ」
スカラワンガの嘲りと怒声とが、藤堂の狼狽した声をかき消した。

守護霊跳躍でカフェの奥に跳び下がった。
「院長発砲許可をっ」
アルがマセラツィオーネの狙いを定める。
スカラワンガが僧服の懐からデザートイーグルをとりだす。
『許可する』
藤堂の声が響き渡った。
アルが、マセラツィオーネを連射した。３０アーデルを四発、すかさずスカラワンガが新たな守護霊を招喚する。さらに一発……。スカラワンガの蔑む嗤いは消えない。
「野郎っ」
アルは悪霊一体１７２アーデルを招喚した。
「――待って、カミュウ少佐、リン、あの、奴の守護霊が霊視えるかい」
凜がルカにうなずく。進み出た。メイを抱いていた。猫はまっすぐスカラワンガを見ている。
「どうしたリン・クロヅカ、俺様とタイマン張りたいんだろ、ええ？」
「いま、霊視えたんだ、こいつが招喚した守護霊は伊丹神父の霊体だ、神父はまだ健在だ、完全に使役されきってないんだ。だから記憶のなかでも大切な想い出は完全にコピーできなかったんだ、それに、加えて二体大きな守護霊が封印されてる」
猫が鳴いた。
「伊丹神父、あなたを助けたいんです、応えてください」
「くだらぬ真似をいって……」
そのとき、スカラワンガの表情が――初めて嘲笑が――崩れた。
デザートイーグルを持った手がひとりでに動き始めた。
「なんだっこれはっ」
スカラワンガの引きつった声。銃口が伊丹神父の体のほうを向いた。
凜、アル、ルカは聞いた。

?――――――?

「ドン・イタミの声」

アルはいった、一筋の光明を見いだした、そんな風に。

スカラワンガの呪肉に抵抗した、伊丹神父の霊体の最後のひとかけらが、いま、必死の抵抗を試みていた。そこへさらに二体の声が加勢する。

?――――――?

「なんてこった……シヅエ、封印されていたのか」

アルの顔に驚愕を押しのけて笑顔が広がる。

?――――――?

「それにこれがカヌカ・イタミの声だね」

ルカがいった。

「そうだよ、こいつの自信の源は三体計６００アーデル以上の守護霊の力だったんだ」

「使役霊の分際で、貴様ら、やめろ、勝手に出てくるんじゃねえ、俺のいうことを聞けっ」

スカラワンガが冷や汗をたらして雄叫びを上げた。

デザートイーグルが自らに向けて火を噴いた。外れた。さらに撃つ、全弾撃ち尽くす。

「……霊視えた、リン、その猫だ」

「大佐？」

凛がルカを見た。

「……その猫だよ、その仔がカヌカ・イタミの力を解き放つだろう、こいつの霊力値を超えて、三人が自ら出てこようとしてる、その猫が鍵だよ、リンッ」

「霊力値の突破？」

アルがつぶやく。

凛はメイにも守護霊を宿らせていた。一気に跳躍してスカラワンガの前に差し出す。

「受け取れ、かぬかっ」

凜はメイをスカラワンガの額に押し当てた。
額から青白色の光が爆発した。美しい光がカフェの隅々を、カルマ人たちを照らし上げた。
「ぎゃあああっ」
スカラワンガはのけぞった。表情が、変わった。
?――――――ッ?
伊丹かぬかの守護霊力がふくれあがっていく。
守護霊たちはスカラワンガの霊力値４２５を数百アーデルも突破し、自らの力で招喚を果たした。
「使役霊が霊力値の上限を突破した、初めて見る現象だ」
ルカが用心深く見守りながらいった。
「伊丹神父？　ですか」
凜が問いかけた。
「……いまです、すぐに、この肉体を……滅ぼしてください……」
伊丹爾三郎神父は両眼、鼻、口から細い血の流れを出しながらか細い声でいった。
「ドン・イタミ、あなたの霊体がまだ健在なら、助かる道はあります」
アルがいった。
伊丹神父は首を振った。
「私の体は……不浄の輩に、穢されました、それに、もう、保ちそうにない……」
?ぶっ殺してやる、てめえら全員、ぶっ殺して……?
スカラワンガの叫びが皆の耳にとどろく。
「凜くん、いままで……ありがとう」
伊丹神父はいうと、二階へと守護霊の力で駆け上がった。
三人も急いで後を追った。
伊丹神父は、守護霊を消して、窓の開いた穴から下の崖へと飛び降りた。

「神父っ」
三人も降りた。カエデ林に着地する。伊丹神父が血を吐いて倒れていた。
三人が神父に駆け寄った。凛がしゃがみ込んで、伊丹神父の傷を治そうとした。
傷は、深かった。
ルカが掌を伊丹神父の額に当てた。眼を閉じ、神父の精神を霊視する。首を振った。
「ドン・イタミをなんとかして助けられないのか」
アルがいった。
「精神汚染が酷い」
ルカはアルを見ていった。
伊丹神父は虫の息で何事かつぶやいた。
「………凛、くん……娘のっ、わがままで、あなたと詩本さんは結ばれずに……きまし……」
凛は、そっと、伊丹神父の手を握った。かぬかの霊体が――守護霊となって伊丹神父を護ってきた――出てきてくれた。青く煌めく光がふたりの手のなかで瞬いた。
?――――……………?
「……かぬか?………女の子同士の約束?……龍子の誕生日?……そうか、そうだったんだね……おれを好きになってくれて、ありがとうな、かぬか」
凛の表情が震えた。
「りん、くん、むすめ、わがまま……ゆるして、って、くださ……」
凛は伊丹神父の手を両手で強く握りしめた。
「――手遅れだ、カミュウ少佐」
ルカはそういって、凛を見た。
凛はルカを見た。ルカは、凛の無言の訴えに首を横に振った。
「?封印の儀?を、リン・クロヅカ」
凛は、メイを伊丹神父の腕の中に預けた。猫は神父の頬を愛おし

そうになめた。
伊丹神父の表情に、苦痛を払いのけて笑顔が広がった。
「メイ、ああ、かぬか、おまえのねこ……こんな……りっぱに……な、たよ……」
伊丹神父の両眼から急速に生気が失われていく。
「リン・クロヅカ、スカラワンガの霊体が飛びだす」ルカが宣告した。
凜は立ち上がった。十字を切った。
「……外赦院式典執行典範に則り、我、汝を……」
凜の視界を涙が塞ぐ。詠唱が途切れた。
「リン、無理なら僕が封印する」
ルカは覚悟を決めた様子だった。
「大佐、体は保ちそうなのか」
アルが問いかける。
ルカは冷静を装った風にうなずいた。アルは顔を凜に転じた。
「できるか？　リン」
アルが凜の肩に手を置いた。
？やめろ、リン・クロヅカアアアアッ、俺を見逃せっ？
「――我、汝を封印せんと欲する者也、父と子と聖霊よ……」
？やめてくれ、お願いだ、モナコのクレディ・ロスチャイルド銀行に七六〇万ユーロあるぞ、俺の秘密資金だ、貴様にくれてやるから、やるからっ、暗証番号はっ？
凜は涙を腕でぬぐった。両の掌を合わせる。決意のこもった眦を結んだ。
「……聖霊よ、我に呪われし古代ゲルメキア高等呪文の詠唱を許し給え」
？ヤメロオオオオッ？
神父の亡骸から、暗緑色の巨大な憑依霊が出現した。大昔の山賊のような恰好をしていた。
不気味な緑の光がカエデ林を強烈に照らし出す。

「ダス　イスト　ヴォス　フォラス　クラーケンヴェーラムイール、汝に命ずる、我が身のうちに入れっ」
スカラワンガの断末魔が、三人にのみ聞こえる凶悪な悲鳴がとどろき渡った。
「地獄に堕ちろ」
凜は破門者の霊体に向かってつぶやいた。
スカラワンガは明滅しながら、リンの体躯に吸い込まれていった。
スカラワンガは黒塚凜に封印された。
――――周囲の林に、薄暮と静寂が戻った。
「……っ……あ」
凜は胸をかきむしった。
アルが凜の体を支える。
「よく頑張ったな、リン」
アルが抱きしめて、凜の髪の毛を愛おしそうになでた。
「初めての封印だから拒絶反応が出ている、休息が必要だ」
ルカが凜の額に掌を当てた。
アルは凜を抱きしめると、跳躍してカフェへともどった。裏の館の凜の自室に向かった。
ルカは伊丹神父を見た。
神父の手には、詩本竜一を射殺したデザートイーグルが握られていた。
そっと、両眼を閉じてやった。
「あなたの死後の名誉を汚すこと、お赦しください、神父（ドン）」
伊丹爾三郎は晴れやかな笑顔を浮かべていた。
愛おしげに、大切な誰かを抱きしめているかのように――。
すべての者を赦すかのように微笑んでいた。
猫が鳴いた。ルカは猫を抱きしめて跳んだ。
カフェのなかの？不自然に潰れた？弾丸を消滅させた。
それから一一〇番に通報した。

5　五，六日目　その1“降霊の儀”

アルとルカは一日中、県警の北相模原署で聴取を受けた。
夜七時頃から始まり、翌日夕方五時までつづいた。
ふたりがカフェに帰ると、マスコミの大群が出迎えた。マスコミでは詩本竜一が薬物で錯乱し、カフェを襲撃、彼を伊丹が射殺、伊丹が目撃者を消すため再びカフェを襲撃した、そんな論調だった。フラッシュや記者たちの怒号のなかをかき分けて、カフェに入って鍵を閉める。
徳人が、達也が待っていてくれた。
「もうイチンチじゅうスゲえんすよ、マスコミのやつら」
徳人がいった。
達也は押し黙って、ムービーカメラの映像を見ていた。
アルはふたりに凜の容態を聞いた。よく寝てるとのことだった。
ふたりは伊丹神父の犯罪を信じられないと訴えた。
「ふたりともつらいことが立て続けに起きたろ、辞めてもいいぞ、ここ」
「俺ら、辞めないッス、なあタツ」
断固とした口調だった。
「いつか事件が解決したら詩本ちゃん、カフェにもどってくると思って」
達也がつぶやいた。
「……そうか、これからも頼む」
三人の男たちは力強くハイタッチをしあった。
ルカはそんな三人を見ながら、キッチンに入った。サングラスを外して哀しげに瞳を閉じた。
それから、日付の改まった頃、徳人と達也が裏の館の一階で寝静まった。
深夜。アルはルカをユリスモールカフェに呼んだ。

凜が二階の奥、八人ほどがくつろげるリラクゼーションルームのロングソファに寝かされてあった。淡い間接照明の灯りの下で、凜の顔色は悪く見えた。ソファの前のローズウッドのテーブルには、カフェの二階のネットルームに常備してあるノートパソコンが二台おいてあった。

「どういうつもり、カミュウ？」

「ルカ・ユルゲンス大佐にも聞きたいことが山ほどある、だがその前にホールデンに聞く」

「……呼び出すんだね」

アルはうなずいた。凜の体には、スカラワンガが、そして奴に封印された内赦院隷下の教皇十字軍第一軍団員ウイリアム・ホールデン大尉も封印されていた。

メイがすこし離れたウインザーチェアに坐っていた。

アルたちを見ている。

ルカはメイを一階に連れて行った。

館にお帰り、そういって裏口から出してやった。

アルは駆血帯を右腕に巻いた。採血管ホルダーを慣れた手つきで準備する。採血針を右腕の静脈に刺入した。血を採り終わると、採血管の血液を床に垂らしていく。凜の寝るソファの周囲に奇妙な図形を描いていった。フローリングの床にミミズの這ったような文字らしきものや幾何学模様が完成していく。

ルカはノートパソコンで両院院長を呼び出した。

血文字の魔方陣が完成した。アルはゲルメキア高等呪文の詠唱を始めた。

？降霊の儀？――封印したカルマ人と会話する儀式だった。

長い呪文の詠唱が終わる。

凜の体が痙攣を始めた。

やがて、凜がむっくりと上半身を起こした。

体を小刻みに動かす。顔には苦渋が見て取れた。

両眼を開けた。アルとルカを見る。凜の声でしゃべり出した。

「……お久しぶりです、ユルゲンス大佐、カミュ少佐」
凜は――ホールデン大尉は敬礼した。
「大尉に聞きたい、なぜ来日してすぐオレと合流しなかった。なぜたやすくスカラワンガに捕捉された。なぜ単独でリョーコにＵＳＢメモリを渡そうとした」
アルはルカを振り返った。
「大佐殿、あなたほどの能力者でも、カフェの憑依霊包囲を気づけなかった、なぜです。リョーコの話した実験区画の暗証番号の間違っていたことが気づけなかった、なぜです。製薬工場で突然ジャミングを受けた、なぜです。彼女の死と共に怖ろしいほどタイミングよくリンのカルマが開いた、なぜです」
さらにアルはネーベ内赦院院長を見た。
「老獪な戦略家でらっしゃるネーベ院長閣下が、ホールデン、つづいてチマブエという戦力の逐次投入の愚を犯した、なぜでしょうか」
『君の結論を聞こう、アルフォンス・カミュ少佐』
ネーベがいった。
「リョーコ・シホンは最初から殺害される予定ではなかったのですか。それがリン・クロヅカのカルマを開かせる唯一の手段だったとしたら、どうです？」
「すべて……なにもかもお話しします、カミュ少佐」
ホールデンがいった。
ルカは一筋の汗を垂らした。ハンカチで拭って、窓際にあるひとり用のソファに坐った。
「大佐殿、アイニクいまはあなたの体調を気遣う余裕がないんです」
アルが皮肉げにいった。
ルカは弱々しく降参のポーズを取った。ソファの上で背中を丸める。
「アンツィオ作戦（オペラツィオーネ・アンツィオ）が四ヶ月前、発動されました。最高司令官はネーベ閣下、カンプグルッペの現地指揮官はユルゲンス大佐、その指揮下に自分とチマブエ少佐が配属されました」

「目的は」
アルが聞いた。
「少佐のおっしゃるとおりです、内赦院の占星官は半年前、リン・クロヅカのカルマを開かせる唯一の方法を霊視で解き明かしました。?聖域内でリョーコ・シホンを、自決では不可です、殺害すること?でした。そしてもう一点、リョーコ・シホンもカルマ人であることを発見したのです。それにより本作戦が発動されました」
「リョーコが、彼女も、カルマ人なのか」
アルは魔方陣ぎりぎりまで近づいた。眼に一縷(いちる)の希望を宿していた。
彼女は聖域で肉体を喪った。いつの日か、転生して甦ってくれるはずだ。
「はい……ですが、それが危険な事態に陥りました」
「スカラワンガの来日か、ちがうか?」
「その通りです、大佐は、四ヶ月前に来日されてからひたすらリョーコ、リン両名の霊視をされていました、そんな折り大佐は使い魔でスカラワンガ入国を察知されたのです、ただちに内赦院に対して〈現地よりの緊急報告書〉を書かれました。作戦は一時中止すべきだと進言されたのです。ですが、ネーベ閣下は強行するよう命令なさいました。一週間前、大佐はふたたび報告書を出されました。〈霊視の結果を踏まえた意見具申書〉です。」
「大佐殿はどんな霊視を?」
「……リョーコは、リン・クロヅカと愛情を確かめ合った後に殺害されたならば、彼女はこの時代、リンと近しい関係として時空を超越するだろうと」
「……」
アルはルカを見た。
「大佐はスカラワンガを封印し、なおかつふたりの愛の交歓を確認しあった後、リョーコを殺害すべきであると進言されました」
「なぜユルゲンス大佐の進言を退けて作戦は強行されたんだ?」

「内赦院は外赦院の占星官の霊視を、スパイという言葉は使うに忍びないのですが……監視していました。もう少しで外赦院の霊視もふたりが共にカルマ人であるとの結論を見いだすとの情報を得たのです……少佐、これは両院同士のあいだのカルマ人の獲得競争です」
「……そういうことか、ネーベ閣下、あなたは、リン・クロヅカは外赦院に取られても仕方ない、リョーコ・シホンだけでも内赦院がもらおう、そう考えられたのでは？」
『彼女は外赦院保護計画下にある。貴院が霊視に成功し彼女をカルマ人だと認定すれば、外赦院隷下となる。十字軍法典の大原則である』
ネーベはこともなげにいった。
画面のなかで、藤堂が病床から上半身を起こした。
『我が院の霊視を失敗させるには、成功する前に詩本さんを亡き者にするしかほかに道はない。転生させれば、それが何十年後だろうと内赦院も隷下にできる可能性が生じた。詩本さんはそれだけの価値のあるカルマ人だからだ、ちがうかネーベ』
藤堂の声は悲しげだった。
「あなたという方は……」
アルは怒気をみなぎらせた。
『先の大戦で我が院は勝利を得たが損害も大きかったのだ、？ピュロスの勝利？だったのだ、リン・クロヅカ生誕の報を聞いても極東に派遣する戦力がなかった、いわば、リンを貴院に譲ってやったのだ、リョーコだけでも隷下に置こうと考えてなにか不自然でもあるかね？　そもそもふたりともカソリックの祝福を受けた身だ、本来ならば両名共に我が院の隷下に置かれるべきであったのだ、ちがうかね、カミュ少佐』
ネーベは画面のなかで従者を呼んだ。
『喉が渇いた、ワインを』
「院長閣下っ」
『アルフォンス・カミュ少佐、両院院長を昼食時に呼び出しておい

て、なにを声を荒げる』
「ネーベ閣下と犬猿の仲の首席枢機卿に直訴します、教皇猊下に謁見賜りこの件を――」
『少佐っ、これ以上両院の亀裂を深めてくれるな、猊下の宸襟を安んじねばならぬ……ネーベ、カミュ少佐の意をくみ取ってやってはくれぬか、少佐は来日してから幾歳月、黒塚くんと詩本さんを見守りつづけてきたのだ』
藤堂院長が病床から訴えた。
『だから困るのだ、シニョール・トードー、彼の融通の利かぬ性格、保護対象者に対する過度の愛着、故に彼への贈賄も考えたがあきらめたのだ』
「オレが受け取るとでも？」
『だから作戦は破綻したのだ。君の性格が故にオオタニ曹長は戦死した、そう思わないかね』
ルカがサングラスを外した。両手で顔を覆った。
アルはネーベとルカに一瞥をくれた。
「……ホールデン、オレの先の質問に答えてもらうぞ」
「はい、少佐、大佐が〈霊視の結果を踏まえた意見具申書〉を出された後、自分とチマブエ少佐は三人でホテルの一室に集まりました、そこでチマブエ、あいつは驚くべきことを言い出しました。証拠のビデオがあります、大佐の指示で私が隠しカメラをしかけました。映像はある企業のストレージサービスに保存してあります」
アルがノートパソコンをもう一台、ネットルームから持ってくる。
「暗証番号は――」ホールデンが英数字を伝えた。アルがアクセスする。つながった。
映像をダウンロードする。ノートパソコンに豪華なスイートルームが映し出された。皮肉なことに、凜、アル、ルカがシングルルームに泊まった、新横浜のホテル・グランパレスだった。
「豪勢なところにお泊まりだったんだな、大佐殿、さすが内赦院は予算がちがう」

アルは怒りを押しとどめる風にしていった。ルカは顔を覆ったままだ。
『……ですから大佐、リョーコはスカラワンガに殺させましょう、我々はカミュ少佐といっしょにリン・クロヅカの護衛に徹すればよいではないですか』
ダリオ・チマブエが力説していた。
『正気か、少佐』
画面のなかでルカが豪華なソファから立ち上がる。
『もちろんですとも、もし我々がリョーコの暗殺に成功したとします、我々は身内のカルマ人を殺害したのですよ、外赦院にこれが漏れれば、どうなります？　いまは穏健派のトードーが実権を握っていますが、彼は老い先短い、いずれ強硬派の副院長が取って代わります。我々は外赦院から告発を受け、両院協議会の軍事法廷に召喚されるでしょう』
『覚悟の上だ、少佐』
ルカは決然と言い放った。チマブエは笑った。
『失礼、大佐の身の安全は保証されるでしょう、先の大戦で大活躍なさった、ＶＩＰです。私とホールデン大尉はちがう、あのネーベのことです、スケープゴートにしかねません、私は身内殺しの汚名をかぶって破門など、まっぴらご免なのですよ、破門のあとに待っているのは、よくて聖域での永久軟禁でしょうよ、自殺防止の拘束具をつけられて。ちがうかね、大尉？』
『自分は……』
ホールデンはいいよどんでいる。意を決した様子で居住まいを正した。
『自分は、リョーコ・シホンにすべてを話すべきではないかと』
『……これは、ハハ、なにをいうかと思えば』
チマブエは大仰な仕草で両手を振った。
『あまりに憐れです、彼女が、なにも知らずに十五歳でニッポン人としての、リョーコ・シホンとしての生を終わらせるのですか？

カミュ少佐の報告書を一読すれば、彼女がリンを愛している可能性は高いと思われます。……互いの愛も知らず、少女を暗殺するのですか？』

『これは、参りましたよ、大尉、君は驚くべきロマンチストだ、いやはやっ、彼女は、カルマ人なのですっ、不滅の存在だっ、スカラワンガに殺されようと、復活するのですよ』

チマブエはティーカップに紅茶を注いだ。指先がわなないている。

『復活が五十年後だとしたら、いや、百年後だとしたらどうなります？　リン・クロヅカと二度と逢えなくなるとしたらどうします、彼女の？想い？は？』

『私の知ったことかねっ』

ティーカップを壁に投げつけた。

『話にならない、私は失礼しますよ』

チマブエが退室していった。

映像はそこで切れた。

「……自分はこのあとＵＳＢメモリ二個に情報を記録しました。日本興和銀行の新横浜支店に一個を預けました。そのあと、どうすればいいか、悩んだのです、すぐに軍律を犯してでもカミュ少佐に一報を入れるべきでした。悩んだ挙げ句、日も暮れてからタクシーを拾い、使い魔でリョーコの居場所を調べて、向かいました。二個目のメモリをリョーコに渡すためです。車中で大佐にメモリのことを携帯で話しました。タクシーのドライバーに憑依霊を憑かせておくべきだった、それすら思いもせず、ひたすら自分は軍律を犯したあとの処罰を考えていました、自分が愚かだったのです。ドライバーはリョーコに接触できる手前で、スカラワンガに呪肉されました……車内で戦闘状態に陥り、結局自分らは捨肉を……」

「……その間、大佐殿とチマブエはなにをしていたんだ」

アルはルカを見た。

「……僕は大尉の行動を不審に思い、レンタカーで尾行したんだ。紅葉ヶ丘で霊視をしたのは事実だ。チマブエに運転を命じたよ。奴

は本作戦は人道にもとるといって抗命権を行使した。僕ひとりで尾行する羽目になったんだ。奴はその後ネーベ院長の厳命で前線に復帰したわけさ」
「見事な戦力の分散ですね、大佐殿」
アルの皮肉は容赦なかった。
皆わかっていた。身内のカルマ人を暗殺としようというのだ。
作戦目的と準備に無理がありすぎた。もしもルカたち三人が用意周到に各自の眷属を集め、戦闘団（カンプグルッペ）が結束していれば……結果はまったくちがっていたはずだ。
「自分がアンツィオのフォルダをリョーコに見せようとしたばかりに、自分の責任です」
「この部屋で見たメモリにはアンツィオ作戦に関するフォルダはなかった」
アルがいった。
「そんな、はずは……」
ホールデンがいった。
「リョーコだよ」
ルカがうつむいたまま答えた。
「彼女が機転を利かせて、アンツィオに関するフォルダを別のメモリに移動させたんだ、僕は、頼んだ、リンとカミュウには知らせないで欲しいと」
「やってくれたな大佐殿、リョーコはハナっから知ってたわけだ、アンツィオのことを」
ルカはうなずいた。
「リョーコは、丸一日以上、どんな気持ちでリンとここで暮らしていたと思うんだ、大佐殿」
「……僕等は長いこと話し合った。カミュウがノリとタツの引っ越しのために、リンを連れて出払ったとき、あのとき、リョーコに作戦を提案したんだ、憑依霊で、裏の館とカフェを分断した上で、チマブエの連れてきた眷族でリョーコを……亡き者にするって」

単に憑依霊を憑かせた人間では聖域に入った途端憑依が解ける。
眷族でなければ駄目だった。
「あのカフェの巨大な憑依霊は……大佐とチマブエの、か」
「そうだよ、僕とチマブエの憑依霊さ、僕らはわずかな守護霊で攻撃するふりをした。空に飛んだ憑依霊はあとで僕等が回収したんだ。ふたりめの破門者なんて最初からいなかったんだ……いま現在の破門者どもには、もう極東に派兵する余裕はなくなりつつあるんだ」
「それじゃあ、リョーコは……」
「うん、リョーコはここの裏の館の聖域が最期の場所なら本望だと、そういってくれた。僕は約束した……君は必ずやカルマ人として復活してくるはずだと……でもまさか、チマブエの奴、リュウイチさんを眷族に選ぶなんて」
「自分の父親に殺される最期を想像してみろ、大佐殿」
「カミュウ、僕等に両親の想い出ってあるの？　記憶を持ってる同胞がひとりでもいる？」
「それは、ないが、そんなことはどうでもいいんだ」
アルは唇を噛んだ。
「またその癖だね、人身保護計画が終わったら禁酒をやめるんでしょ、飲めばいいじゃない、リンのカルマは無事、開いたのだから。リョーコもいずれいつの日か転生してくる」
「リョーコの気持ちを考えろ」
ルカが顔を上げた。凶眼が、潤んでいた。
「考えなかったとでも？　僕が」
ルカが初めて声を大にした。
アルは、ルカの凶眼を正視できない様子だった。視線をずらした。
「……そのときに、スカラワンガの野郎、ヘリで、タイミングがよすぎるぞ、まさか」
「そうだよ、そのまさかさ、ほぼ間違いなく、チマブエとスカラワンガは通じていたよ。内田少年の中のスカラワンガがイタリア語で通話していた相手は、チマブエに違いない。あいつは、リュウイチ

さんなら娘を殺せない、そう考えたんだろう、だから眷族に選んだんだ。そこから先はスカラワンガの仕事ってわけさ」
凜の右手が勝手にふらふらと動き出した。
「っ、これは、大佐、スカラワンガの意識も浮上してきています」
ホールデンが叫んだ。
「危険だ、カミュウ少佐、一時儀式を終えるべきだ」
ルカが立ち上がった。
「だいじょうぶだ大佐殿、大尉、君の意識があるから問題はない」
アルがいった。
「……スカラワンガは、紙とペンを要求しています」
「凶器になるものは渡せない、パソコンで文章を打ってもらおうか」
アルがホールデンにノートパソコンを渡した。凜の右手が文章を打ち始めた。
《俺にも話させろ。情報を提供する。その代わり俺の減刑を両院長に要求する》
右手が、中指を突き立てた。腕を振り回す。
「貴様、封印された身でよくもいえるな」ホールデンが憎しみをあらわにする。
『破門者スカラワンガよ、提供される情報次第だ、どうかねネーベ』
『我が院はそれでかまわぬ、シニョール・トードー』
「教えろ、スカラワンガ」
アルは、殺したくても殺せない、その怒りを声に乗せた。
《チマブエの野郎、何年も前から十字軍に見切りをつけてやがった。内赦院は予算こそ豊富だが、少佐の年俸はクソ安いときてる、あの野郎は満足していなかった。そこでチャンスをうかがってやがったんだ。我が父祖の戦列に寝返るチャンスをな。我らは資金なら持ってるからな》
「チマブエの奴はいつからおまえと接触を持っていたんだ」
アルが尋問する。
《一年以上前からよ、で、ネーベの奴がアンツィオ作戦をおっぱじ

めやがった。チマブエは震えてやがったぜ、俺との接触がバレたから作戦要員に選ばれたんじゃねえかってな、野郎はビデオでいってたようにスケープゴートにされるのをブルってやがった》
「内田少年が、貴様が話した相手は」
《チマブエの野郎よ、あの日一日で四回呪肉だぜ、苦労したぞ。黒人に呪肉してニッポンへ潜入してよ、最初に野郎と決めたのは、聖域なんぞ無視して長津田駅前でリョーコを待ち伏せる作戦だった。野郎からの連絡で、急いでホールデンの糞間抜けを追う羽目になっちまった》
「大佐殿の作戦も筒抜けだったわけか」
《そういうこったな。次の計画では、ヘリで降りたとき、リンのガキをぶっ殺して次元に吹き飛ばす、次に今度はリョーコを殺さずにかっさらう、都合のいい聖域を見つけるのに苦労したんだぜ、製薬工場の聖域に誘い込んで、できればアルフォンス、おめえもルカもまとめて吹っ飛ばす。チマブエと協力してな。誤算だらけだぜ。あの阿呆、ルカに見切りつけられちまった。工場で二対二でやる腹づもりが、一対三になっちまいやがって。うまくすりゃあ全員次元の彼方に吹っ飛ばしてやれたのによ、おめえらがいまの時代から消えて百年後でもいい、転生してくれりゃあ、父祖の戦列は極東の劣勢を耐えぬいて反撃のチャンスをうかがえたんだ》
「ずさんな計画だったな、おまえにしちゃあ上出来かもな。大佐、製薬工場で携帯も無線機も通じなくなったのは、やはり……」
「僕が電波を妨害した」
ルカがリセバッグに常に常備している工作用キットの一種を使ったのだった。
あのとき、ルカは凜と龍子の様子を監視カメラで逐一見ていた。凜とアルを聖域内で爆死させないためには、暗証番号を教えるための通信をどうしても妨害する必要があった。
ルカはまた坐った。用心深く凜の体に視線を寄越していた。
《リョーコの奴死ぬ気だったとはな、死ぬ気の奴が死んだんだ、俺

もチマブエも良心の呵責って奴に苦しめられずにすむぜ。アルよ、てめえは飛んだ道化師の役回りだったがな》
アルが採血管に残った自分の血を凛の体にふりかけた。
右手が苦痛にのたうち回った。
「それ以上いってみろ、スカラワンガ、ありったけの血をぶっかけてやるぞ」
《やめろ、俺にそんなモノをかけるんじゃねえ》
「つづきを話せ」
《クソッタレめが、とにかく失敗しちまった。でチマブエから教理省の情報がきたんだ、カフェで決着をつけてやることに決めた。俺が先に銃を抜かねえかぎり、アルフォンス、てめえは撃てなくなっていた。治外法権でな。そこでチマブエの野郎がおまえに銃を寄越せというわけよ、寄越したら最後、チマブエと俺で、おまえら三人を撃ち殺すって算段だった。ルカてめえ、見抜いてやがったな、渡すの邪魔しやがって》
「やはり君は愚かだ、スカラワンガ、チマブエが代わりに撃つといったとき、演技でもいい、うろたえるべきだった」
ルカはいった。
《クソ喰らえだ》
右手が暴れる。
ホールデンに支配された左手が押さえつけた。
「恥を知れ、破門者め」
ホールデンがいった。
《とっておきの情報を教えてやる、チマブエは関西に逃げやがったぞ。奴はそこで我が父祖の戦列の新たな同志と接触する、我らは十字軍の手薄なこの国に拠点を築く戦略を固めたのだ》
「べらべらしゃべっておいて、同志、か、てめえには聞いてあきれるよ」
《俺を見下すんじゃねえ、アルフォンス》
「ネーベ院長、ダリオ・チマブエの十字軍破門宣告を教理省に要請

するよう、進言します」
『よろしいユルゲンス大佐、早急に要請する』
ネーベがめずらしくかんたんに応じた。
《オレの減刑を頼むぜ。まずは俺のあの黄金銃をリンの武装にしろ。あれを感じたいんだ》
『残念だが、その程度の情報では我が院としては減刑はできぬ』
藤堂がいった。
キーボードを打とうとした凜の右手が止まった。
『大谷曹長を失った、破門者スカラワンガよ、貴様のせいでな』
藤堂は怒りを隠さなかった。
右腕が震え出した。
いきなり右手が人差し指を凜の眼に突き刺そうとした。
ホールデンに支配された左手がとっさに押さえつける。
「カミュ少佐っ」
ホールデンが叫んだ。
アルは採血管に残った血をすべてふりかけた。指は、腕は震えつつも止まらない。
アルはゲルメキア呪文の詠唱を始めた。
降霊の儀の血文字の魔方陣のなかに人間が入れば最期だ。そこは異次元の深淵が開いた状態だった。入ったが最期肉体は滅び、霊体は即座に凜に封印されてしまう。
「ものすごい、力ですっ」
ホールデンが歯を食いしばる。
「カミュウ、早くっ」
ルカが叫ぶ。その身を魔方陣の外周ぎりぎりまで乗り出した。
人差し指が、眼球に触れるところまでいく。
そのときだった。メイが地上から跳び、二階の窓ガラスを蒸発させ、部屋に飛び込んできた。
――守護霊跳躍と悪霊の力だ――魔方陣のなかに入った。
魔方陣のなかで、巨大な光、暗緑色に輝く光――詩本龍子――が

猫から抜け出た。
ほのかに灯る間接照明の灯りを圧倒する、それは光の奔流だった。
龍子の霊体は、輝く両の掌を凜の額にあてた。
?:スカラワンガよ、退きなさい?
二階の皆が、聞いた。龍子の思念、霊体の声はカルマ人たちの耳に響き渡った。
指が、止まった。だらりと右腕が垂れた。
?:龍子?:が、凜を、ホールデンを見た。
アルを見た。
ルカを見た。
?――――――――――――?
皆の心に、肉体を喪失した龍子の苦しみが伝わってきた。
ついで、それでも自分の可愛がる大切な猫のなかにいられるだけでも幸せだと、それだけでも自分は幸運だったと――龍子の思いがカフェにいる三人の心を満たした。
龍子の霊体はゆっくりと再び猫の小さな体に吸い込まれていった。
二階を圧倒していた光が、消えた。間接照明の頼りない灯りだけに戻った。
三人は微動だにせず、小さな猫を見た。
唯、見続けるしかなかった。
「こんな転生……それに、魔方陣のなかなのに、リンに封印されなかった」
ルカはつぶやいた。
サングラスをとる。ルカの表情は、数百年以上ヒトの霊とかかわってきた超常の者のそれとは思えなかった。暗闇で初めて人魂を見た子供の抱く、そんな原初への畏怖に満ちていた。
「……なんということでしょうか」
ホールデンはそれだけいうのが精一杯のようだった。
メイは魔方陣から抜け出た。アルに近寄った。
アルがメイに触れた。龍子の思念が伝わってくる。

龍子の声――ノイズ混じりの電話の奥から聞こえてくるかのようだ。か細い声が突然大きくなったり、途切れたりしながらそれでも必死に伝えようとしてくるのがわかる。やがて波長が合った。？声？は唐突に鮮明になった。

？――ルさん……んなさい……アルさん、いままでだましてごめんなさい？

アルは、ただひたすらメイを見つめた。

それからルカを見た。

「そんな、オレたちはヒトの姿以外に転生できないはずだ」

「僕にもこのような転生は信じられない」

ルカはメイを凝視している。

ネーベ院長は黙ってメイを見た。赤ワインをゆっくりと飲んだ。

『猫に、転生したというのかね、カルマ人の霊体が』

飲み干すと訊ねた。

ルカはメイに触れた。メイはおとなしくしている。霊視を始めた。

龍子は思念を開いた。

「……猫の霊体は生存中です。リョーコ・シホンの霊体は憑依でも呪肉でもなく猫の体に転生しています。危ういバランスですが、リョーコのほうが猫をある程度の支配下に置いています」

『このような、カルマ人が人間以外に転生するなど、できるはずが』

藤堂が呻き声を上げた。

アルは、全身の力の抜けたかのように膝を屈した。

目の前の猫に、触れたら龍子が消えるとでもいうかのように、そっと手を伸ばす。アルはメイを抱きしめた。メイがアルの顔にすり寄って甘える仕草をした。ニイ、と鳴く。

アルの面長な顔をぺろりとなめた。

アルもメイの額にキスをした。

ルカの瞳にも負けない美しいグリーンの双眸をのぞき込む。

ふたりはしばらくのあいだ、互いを見つめ合った。

アルはメイの背をやさしくさすった。

「……よく帰ってきた、リョーコ」

5　五，六日目　その2“還ってきた者たち”

――アルは血文字の魔方陣を解いた。
スカラワンガは凜の精神世界の奥底へとつながる異次元に沈められていた。
「いいのか、ホールデン」アルが聞いた。
「はい、スカラワンガといっしょに封印はご免です、どうせならリョーコのお役に立ちたい。今回のすべての発端は自分の独断専行にありました……スカラワンガの異次元のなかで、オオタニ曹長の霊体と出逢いました。曹長は、彼女は微笑んでいました……」
アルは凜を――ホールデンを見た。
一時ふたりは視線を交わした。そうか、アルはつぶやいた。
「リョーコ、おまえは？」
メイはこっくりとうなずいた。
「ありがとうございました、ユルゲンス大佐、カミュ少佐」ホールデンは敬礼した。
ふたりは答礼した。
ホールデンは自らの意志で使役守護霊と化した。メイが小さな前肢を差しだした。ホールデンが、凜が右手で触れた。凜の全身から青白い光が放たれた。光はメイへと移っていった。
ウイリアム・ホールデンは、詩本龍子の守護霊となった。
凜の体が震えた。何度か体を引きつらせたあと、覚醒した。倒れ込むところをアルが支えた。
「……アル少佐、ルカ大佐、スカラワンガは……」
「無事、おまえの異次元に封印されている」
アルは凜の肩を勇気づけるようにたたいた。
「記憶が飛んでるんだ、あれからなにがあったのかな」
アルはなにかをいいたげだった。ルカが目で制した。
凜が胸を触った。ふう、と息を吐き出した。両眼を閉じる。

「どうかしたのかリン」
「霊が、騒ぐんだ」
眼をつぶったまま、封印した霊たちの叫びに耳を傾けているのだろう、真剣な表情になった。
「アル少佐、大谷しづゑさんが、アル少佐の守護霊になりたいっていってるよ」
「……シヅエが、オレの」
凛は瞳を開いた。うん、うなずいた。左手を差し出す。アルは凛を見つめた。アルが凛の手を握りしめた。清浄な青白い光が凛からアルへと移っていった。
アルの全身を大きな光が包み込んだ。アルは力一杯深呼吸した。
砕かれた窓辺に寄った。
アルの両手からあふれんばかりの青い光が、還ってこられた幸せのなかで踊っていた。
?――――――?
「………おかえり、シヅエ」
アルは吐息だけで小さくささやいた。
「しづゑさん、なんていったの、アル少佐」
「任務は完了した、アルでいいよ、リン」
「じゃあ、アル、しづゑさんはなんていったんだよ」
凛は男女のことに関してはあいかわらず野暮なままだった。幾分仕方ないかもしれない。凛にとってはしづゑはあくまで老婦人だから。
アルは壊れた出窓から宙(そら)を見上げた。
アルにとってはちがった。四十年共に闘ってきた仲だ。
「月がきれい、っていったのさ」
ため息混じりにいった。
「たしかにきれいだね」
ルカが微笑みを浮かべて窓辺に背を傾ける。
真夏の雲ひとつない夜に、素晴らしい月が出ていた。夏の星座が

それを彩る。
メイが鳴きながら凜の脚に体を寄せた。
「メイ、おまえの鳴くところ、初めて聞いたような気がするぞ」
「ニイ」と、猫はまたうれしそうに鳴いた。
凜の体がふらついた。
「リン、両手で僕の両手同士を強く握ってみて」
脳神経の器質的病変の簡易なチェック方法だ。
凜はいわれたとおりにした。
しっかりと十本の指で握れた。問題はなかった。
凜はかなり体力を消耗していた。無理もない、初めての封印だったのだ。凜の眩暈はおさまらなかった。アルに付き添われて、ふたりは先に裏の館へと帰っていった。
ルカとメイが残った。
「……リョーコ、ほんとうにいいの、リンに君のことは話さなくてもいいの」
ルカは前肢を触った。
龍子が思念を伝えてきた。
?ほんとうは誰にも知られたくなかったの。いずれ誰かの口から凜兄に伝わると思ったから。凜兄、私のこと知ったら、絶対に十字軍を許さないと思う、それだけは避けたいからお願い、せめて、人間の体を手に入れるまで、凜兄にはアンツィオのことはいわないで?
「弥縫策だけど、リンには僕の霊視が間違いだったと、君もカルマ人だったことを見抜けなかった、そう説明する手もある」
?私、思念をうまく操れないの、凜兄と対話したら、アンツィオの記憶が彼に漏れちゃう?
「わかった、カミュウにも口止めはしてあるけど保つかどうか……あのひと、情にほだされるところがあるから、僕等がウクライナにいたときなんかね……まあいいや、話せば長くなる」
?……ねえルカ、以前は、女性だったんじゃない? アルさんの彼女だったんでしょ??

ルカは瞳を見開いた。
「バレたか、君にはかなわないな、リョーコ・シホン……もう、ずいぶんと昔の話になるよ」
ルカは窓のそばの床に坐り込んだ。時折つたう冷や汗をハンカチで拭った。
?聖域での肉体滅亡による時空を超えた転生、前例ってルカ自身の体験だったのかなって思って、だから私に自信を持って計画を語ってくれたのかなって、思ったんだ?
「僕がアルの女だと見抜いたわけは?」
?窓辺のふたりが、とっても似合っていたから?
ふたりは声をひそめて笑いあった。
「見て、僕の宝物だ」
ルカはペンダントヘッドを首元から出した。四センチくらいの大きさだ。純金製の蓋を開けた。蓋の裏側に男性、ヘッド本体に女性の絵画が象牙に描かれてあった。古風な夜会服を着たルカとアルだった。淑女のルカはいまと面差しが似ていた。アルの容貌はまったくいっしょだ。絵画のふたりはたしかにきれいだ。龍子の胸をより強く打ったのは、絵画を見るルカの微笑みのほうだった。果てるとも知れない闘いのなか、やっと手に入れた幸せな日々をなつかしむ、そんな微笑みだった。
龍子は、カルマ人たちの彷徨ってきた終わりなき生に想いを馳せた。これが不老不死か、と。永遠の生。カルマ人のファイルにあった。個々人でばらつきがあるけれど、一定の年齢になると成長は止まる。祖体は時間の止まったかのようにその容姿を保ちつづける。ルカはかつて聖域で一度滅び、新たな祖体を得た。アルは生涯の伴侶を喪ったとき、なにを思ったのか?
似ている、凜兄と。
アルはルカをカルマ人だと知ってはいた。転生を待ち望めた。凜兄は、なにも知らない。
……いま、凜兄の気持ちは……それを考えると、龍子は悔しくて

ならなかった。
「リョーコ」
ルカの声音には、龍子の心を察した色があった。
ペンダントを胸にしまった。
せめてヒトの形を成して転生していれば自分は……。なにを嘆くの、龍子は思う。凜兄のほうが遙かにつらい時を過ごしているというのに。龍子は想いを振り切るようにルカを見た。
?ねえ、ルカ、アルさんと仲直りできそうかな?努めて明るい波長の思念を送った。
「……何百年も喧嘩して、仲直りして……君のことを凜に話すなといったらまたおかんむりさ」
?ごめんなさい……ねえ、ルカは外赦院側なのに、ネーベ院長の指令を受けていたんでしょ、スパイ行為ってやつだよね、藤堂院長は優しい方だけれど、許してもらえるの?
「僕は内赦院から外赦院に臨時に配属された立場だからすぐにまた戻る。問題は君にアンツィオをばらしたことかな、僕は僕なりに身の保身を計るよ。ただ外赦院の副院長の派閥は今回の件を取引材料にするだろうな、内赦院に対して貸しひとつ作った、ってわけ」
?ぜったい正義の組織じゃないよね、両院も、十字軍も?
ルカはほのかに笑う。それをいわれつづけて数百年さ、そうつぶやいた。
?……ダリオ・チマブエっていうカルマ人はどうなるの?
「破門だね、いずれ、内赦院から封印するために戦闘団(カンプグルッペ)が派遣されるだろう」
ふたりは押し黙った。無理して明るく振る舞ってもつづかないものだ。
ついいましがたのルカの微笑み。龍子は思わずにはいられない。自分も、あのひとといっしょにこれから先想い出を重ねることができるだろうか。
象牙に描かれた絵画のような――。

「過去は思い出せたかい」
ルカは疲れのにじんだ表情でメイを見た。
猫は力なく首を振った。
「誰もが疑問に思ってる、なぜ、リンのカルマを開くために君が犠牲になる必要があったのか、なぜ、カルマ人が人間以外に転生することができたのか。あまりに過酷な運命じゃないか」
?私はヒトの善意を信じたい、この世は悪意に満ちてるけれど、だからこそ追い詰められた善意は強くなると思う、……夢をあきらめなければ、きっと道は開くよ、ルカ?
「誰かの言葉?」
?……思い出せないな……私、あの実験室で死んだ時から、自分が自分じゃないみたい。うまくいえないけど死は一瞬だった、その後が苦しかったの、巨大ななにかに飲み込まれて。小学生のとき海で溺れたことがあるんだ、あのときの恐怖にとってもよく似てる、足の下が深淵なの、どこまでいっても底が見えなくて息ができなくて……弱音吐くのやだけど、二度と味わいたくない。……気づいたら、メイのなかにいたんだ、メイの目線で世界を見ていた?
ルカはきゅっと、猫の前肢を握りしめた。励ますように。
――そろそろ休もう、ルカがいった。
ルカとメイも裏の館へ戻った。
メイは裏玄関をひっかいた。開けてやるとメイは中庭に飛び出していった。
しばらくのあいだ、庭の一角にたたずんでいた。
父親の、竜一の斃れた場所だった。
ルカは見守りつづけた。
それからふたりは三階に上がった。
ルカはメイのために凜の部屋のドアを開けてやった。
メイはするりと入っていった。暗がりのなか、
凜はベッドで眠っていた。
メイはベッドのなかにもぐり込んだ。

清潔なさらさらのシーツ。ほどよく効いたエアコン。
凜の胸に体を預ける。猫は凜に自分の体をこすりつけた。いくら自分の匂いをつけても、つけたりないというように。
自分は、このひとのものだから。
猫だからわかる、凜の体の匂いが。凜の鼓動も。凜の気配も。
――凜兄の体のぬくもりも。このひとのぬくもりは自分だけのものだ。
家族はもういない。
でも凜兄がいる。なにもかも振り払おうとするかのように、猫は思い切り凜に甘えた。全身で大きく伸びをする。小さくあくびをした。
睡魔はやさしく訪れてくれた。
黒塚凜と詩本龍子は、六日ぶりの安らかな眠りについた。

6 “善人たちの世紀”（前書き）

お話は十六世紀ヨーロッパ、魔女狩りの世紀へむかいます。

6 “善人たちの世紀”

ユリウスは夢を見た。炎に嬲(なぶ)られ、焼け死んでいく夢だ。煙で息ができない。苦しみのうちに焼けて落下してきた天井の木材の下敷きにされる。そのそばには、最愛の――。

目覚めた。ひどい寝汗をかいていた。となりのベッドを見た。カレアが自分を見ていた。

「兄上、予知夢ですか」美しい貌に苦悩の色を宿していた。

「そうだ、この時代にも、やはり安息はないようだ」

「……牧師様やケーテはとてもよくしてくださった、ここならしばらくは暮らせるかと……」

いっしょのベッドに入っていたカレアの愛猫が飼い主を見つめた。

「ここまで時を経ても、ヒトはやはり争いをやめてはいなかった、いつ災厄がふりかかっても不思議はない」ユリウスは着古した亜麻(あま)のシャツに着替えた。

「せめて、ケーテの体調のよくなるのを待ってから出立したいです、流行り病でないといいのですけれど」カレアはケーテを実の妹のようにかわいがっていた。

ユリウスはカレアに慰めの言葉をかけた。それから牧師館の自分たちの屋根裏部屋を出た。

夏の早朝だった。寒い。寒冷地ではあるけれど、それにしても毎年寒い夏がつづいていた。

ユリウスは地面の雑草をむしり取った。憑依霊を憑けて飛ばす。

霊視に入る。牧師館のとなりにある教会、畜舎、教会所有の畑、果樹園、ここアーデルハイム村の数十軒の民家――さらにここから西の遠方にあるトリール市の様子をうかがった。

――トリールの街。煙が上がっていた。魔女狩りの憐れな犠牲者たちが火刑に処された、その残り火の煙だった。眼を転じた。村のほうを見た。農奴たちが葡萄畑へ向かって歩いていくのが見えた。

村長の屋敷の前に自由農民たちが集まっている。村長や村会議員たちが気勢を挙げていた。きのう結成された魔女狩り委員会の面々だった。

――村長がいう――きのうこの村から痘瘡で死人が出た、ついに魔女の呪いが私たちの村にもやってきた。諸君、トリール市は一丸となり、今回の凶作と疫病を克服しようとしておる。すなわち、魔女退治であるっ、魔女がこの夏の冷害、疫病をもたらしておるのは最早自明である。我々もトリールを見習おう――。村会議員の息子のデトレフが檄文を皆に配っていた。

「字の読める奴は読んでくれ、魔女がいかにおぞましいかが書いてあるぞっ、フランクフルトで出版された説法集〈悪魔の劇場〉だっ」

人々が我さきにと争って説法集の誌面に見入る。字の読める者が大声で語って聞かせはじめた。グーテンベルクの活版印刷術で刷られた誌面に魔女の悪業という名の妄想がふんだんにつづられてあった――。

意識を戻す。ユリウスは暗澹たる気持ちになった。ヒトは科学技術を発展させた。にもかかわらず、未だに迷信に取り憑かれている。醜い殺し合いをやめようとはしない。

カレアが牧師館から出てきた。亜麻で作られたブラウスとスカート。貧しい衣装も、彼女の気品の前では、領主の娘の着るドレスに引けを取らない。面立ちは、十四、五歳前後の少女であった。けれどそのような幼さを感じさせない艶やかさがあった。

「なんの罪もない人々を……ここまで時を下ってもヒトは理想郷をつくれなかったのですね」

ユリウスはカレアの両手を握りしめた。

「おれたちの技をヒトに見せるな、いいねカレア、約束だぞ、まず間違いなく？魔女？とやらの烙印を押されることになるだろう」

「使えといわれても使いません、ヒトの霊を弄ぶのは、もう耐えられません、兄上、ただ」

「ただ、どうしたのだ」

「ケーテの熱が夜中もつづいています」
「ヒトの病を治すため、安易に守護霊を使ってはならない、使われたヒトは長寿をはじめ、肉体にさまざまな超常の力を宿してしまう、この時代にそのようなヒトは、即刻魔女扱いだ」
はい、とカレアはいったけれど不満そうだった。
ふたりは牧師館へ戻った。カレアは二階のケーテの部屋にいった。
「ケーテ、起きてるの」
ケーテが藁を詰めたベッドに腰掛けている。
「あ、カレア、どうしよう」半分泣いている。木彫りで組み立てた人形を手に持っていた。
カレアのあげた人形だった。
「ファニー・ピヒトとね、けんかしちゃったの、おでこごっつんしたらくびがとれちゃったの」
ケーテは人形に名前をつけて、いつも肌身離さず持っていてくれた。
カレアは掌をケーテの額にあてた。熱はすこし下がっている。
よかった、カレアはつぶやいた。
「ごめんなさいカレア」か細くいう。
「だいじょうぶ、治してあげるからかしてごらん」
人形を受け取ると後ろ手に隠した。
「おまじない、おまじない、人形さんのよくなるおまじない」
手先に守護霊を招喚した。木片の組織を再生させる。――古くなった材質だ、難儀した。
「……ほうら、よくなった」元通りになった人形を見せる。
「わあ、ありがとう、カレア」ケーテの顔が明るく輝く。
すこしのあいだ、ふたりはお人形さんごっこをした。ケーテが人形の顔をのぞき込んだ。
「あれえ、ファニー・ピヒトがしゃべったよ、カレア」
「え？」
「カレア、むかしのおもいで、みんなわすれちゃってるんだって、

だから、かわいそうだっていってるよ、ファニー・ピヒトがね、カレアがよる、ないてるのがかわいそうだって」
「……」
「どういういみかな、カレア？」
「困ったわ、ファニー・ピヒトはあなたをからかったのね」
「ほんと？　カレア、ないてない？」
「もちろん」
「なかないってやくそくしてね、カレア、なくとあなたのすてきなかおも、だいなしよ」
ケーテは大まじめな顔でいう。カレアは、くすり、と笑って見せた。
「もうお休みなさい、ケーテ、風邪をこじらせると大変なんだから」
「うん、おやすみカレア、おやすみファニー・ピヒト」
ケーテは布団のなかに入った。カレアはケーテの頭を優しくなでてやった。
朝食の支度のために炊事場にいった。鍋に水で薄くのばした燕麦粥を作り始めた。
もう燕麦すら貴重だった。馬や家畜の飼料に回せる燕麦はなかった。
カレアは鍋で粥を煮込むあいだ、物思いに耽っていた。長い髪を無意識に両手でかき上げる。
「守護霊様……」つぶやいた。
ユリウスが入ってきた。カレアの様子を見て取った。声をかける。
カレアは思い詰めたように、ユリウスを見てくる。
「兄上、私はなぜ、カルマ人等という獣のごとき異形者になってしまったのでしょうか？」
いままで押さえつけてきた疑問を一気にぶつけた。
「兄上、私の過去の記憶はいつになったらもどるのでしょうか？」
兄妹はしばしのあいだ見つめ合った。先にユリウスのほうが視線を落とした。

「兄上」
「思い出さぬほうがよい、カレア」

――九時過ぎ。村長の呼びかけで魔女狩り委員会の会合が開かれた。場所は教会だった。

集まったのは村長を始め村会議員、村役人、有力な自由農民たち、村の実力者だけだった。

それでも小さな教会はいっぱいとなった。村長がしゃべり始めた。

「牧師様、レッカーのところのレナがきのう死んでしまった、痘瘡だ、この村にも魔女の呪いがふりかかり始めたようで」村長がハイネ牧師を睨みつけた。

「せっかくルーテル先生（マルティン・ルター）の新しい教えに改めたってのに、このザマだ、牧師様、俺たちもトリールにつづこう、魔女に呪われる前に、奴らを見つけ出すんだっ」

デトレフが叫んだ。ハイネ牧師は一同を見渡した。

「みなさん、主が安易にその御技をお示しにならないように、悪魔もまた地獄から安易には出てこられぬものなのです、いま、帝国全土を覆っている魔女捜しと民衆法廷はあきらかに常軌を逸しています」牧師はあくまで冷静だった。

「牧師様、あんたはまだお若い、経験も少なかろう、この冷害と流行り病をどう見るね、悪魔と契った魔女の所業以外に考えられようか」村長の態度はあからさまに見下したものだった。

ハイネ牧師は怒号をあげる村民たちを前に、あくまで理知的に諭しつづけた。

話し合いは物別れに終わった。

「話し合いましょう」ハイネ牧師が懇願した。

「牧師よ、冬物（ディンケル麦）も夏物（燕麦、大麦）も酷いありさまだ、このままいったら領主に年貢をどう納めりゃあいい。あんたの教会に払う小十分の一税なんかないと思えよ」

村長が嫌味を込めていった。

「トリールからは、ローマ教皇様の教えにまた従えって説教師がこの前もきた、下手すりゃああんたはお払い箱さっ」デトレフがいった。
腑抜け牧師めっ、皆口々にいって席を立った。人々が不平をこぼしながら出ていった。
デトレフが残った。後片付けをしていたカレアに近づいた。
「カレア、トリールの街へ遊びにいかねえか、そんな恰好じゃあ、おまえの美貌が台無しだぜ、リボンと絹の前掛けを買ってやろう、コルセットもだぜ」
「けっこうよ、デトレフ」カレアはとりつく島もなく言い捨てると、教会の畜舎へ向かった。
デトレフの不良仲間たちが教会の外にいた。デトレフが出てくるとはやし立てた。
「デトレフ、はぐれ者の娘を口説くなよ」
「そうさ、ハイネの奴が教会にひきとらなかったら餓え死にしてた兄妹だぞ」
デトレフは地面につばを吐いた。
「だが、いい女だ」薄ら笑いを浮かべた。
たしかに別嬪だ、仲間たちも顔を見合わせながらいった。
「デトレフ、まさかはぐれ者に本気で熱を上げてるんじゃないだろな」
「馬鹿野郎、村会議員の息子だぞ、俺は、遊びに決まってんだろ」尊大な口調でいった。
「おまえらつきあえ、今夜夜這いをかけてやる、全員でカレアを」デトレフが声をひそめた。
本気かよ、仲間たちがいう。連中の眼に好色の色が浮かんだ。
「本気も本気よ」
でも騒がれたらどうする、仲間のひとりがいった。
「そのときはな、おとなしくしねえと魔女だと告発するぞと脅してやるんだ」

なるほど、不良仲間は一様にデトレフの知恵に感心した。
デトレフは満足げに縁のついた帽子の角度をただした。
――寒い夏だった。
十六から十七世紀にかけてヨーロッパは小氷河期ともいえる冷害に襲われていた。
数百の大小国を束ねる領邦国家、神聖ローマ帝国――現在のドイツ連邦と周辺地域――では、魔女狩りが猖獗（しょうけつ）のただ中にあった。
魔女狩りというと中世のイメージがある。事実はちがった。ルネサンスの花開いた十四世紀以降、近世ヨーロッパの民衆のあいだに集団ヒステリーのように広まっていった。民衆がこぞって隣人を密告したのだった。密告は特にドイツ地方で凶熱さを増していった。男も男の魔女、と称して殺された。やがて老若男女、貴賤を問わず処刑される惨劇が開始されることになる。

――その日の夕刻。ハイネ牧師とユリウスが教会の畑での作業を終えた。ふたりともディンケル麦の夏の刈り取りで汗だくになった。凶作で実りはすこぶる酷いありさまだった。
「牧師様、朝の集会のことですが」ユリウスの口調は重い。
ハイネ牧師は、わかっています、そういう風に首を振った。
「村のみなさんは、ルーテル先生の改革に幻滅されておられるようです、改宗しても、この疫禍です。帝国内では、程度の差こそあれどの領邦でも魔女の迫害が広まっています」
「ローマ教会も、ルーテル派もですか」
「はい、双方共に。けれどローマ教皇のお膝元では、魔女狩りは異端審問を厳格な裁判手続きに則り、おこなわれています。結果証拠不十分で無罪になる例のほうが多いのです。厳しく魔女を取り締まるために、証拠を厳しく精査する、皮肉なことにそれにより無実が証明されているのですよ」
「では、魔女は虚構でしょうか？」
「それはちがいます、悪魔を信じぬことは、すなわち神を信じぬこ

とです、魔女は存在するでしょう、ただ――」
ユリウスは待った。餓えた野鳥が地面のミミズを探すのを眺めた。コマドリだ。
「ただルーテル先生は、魔女には天災を起こす力などないという見解を示しておられます、人の死、不幸、天災、これはすべて悪魔の技ではなく、神の御意志である、そういうお考えです」
「では、ルーテル派にとって魔女とはなんでしょうか」
「悪魔と契約し迷信を崇める者、呪術者全般です、黒魔術は無論、人に善を成す白魔術もです」
「白魔術によって、人々の命が救われたとしても、ですか」
「ユリウス、人の命を救う行いは、神の御技です、奇蹟というものですよ、土着の白魔術にできるはずもありません、彼らの呪術は迷信です、神の愛に反します」
「仮に、目の前で死にかけた人が見る間に白魔術で一命を取り留めたとします、その者はよい行いをしました、それでも神の愛に反するのでしょうか」
ユリウスは上目遣いに思慮深い眼差しを投げかけた。ほう、とハイネ牧師は目を細めた。
「興味深い仮定です、その者は聖者です、神の御使いです。呪術者ではありません……ユリウス、以前から思っていましたけれど、あなたはどこかその若さに似合わない、老成したなにかを持っている、大学時代の友人との討論会を思い起こさせます。修道院で教育は？」
受けていません、ユリウスは正直に答えた。ハイネ牧師は言葉に窮したようだった。
「おれたちは私生児なのです」ユリウスはハイネを慮って、自ら出自をいった。
「申し訳ありません、あなた方の過去を詮索はすまいと決めていたのに」
「よいのです」ユリウスがいった。
「妹は、カレアによくなついています」

ハイネ牧師は、歳の離れた妹、ケーテのことを話すとき、自然と表情がほころぶ。
「できれば、あなた方兄妹に村の住人となって欲しいのですが」
「村は許さないでしょう、おれたちは流浪人ですから」
「将来、身の処し方は、あなたのことだからなにか考えがあるのでしょう？」
ユリウスは押し黙った。ハイネ牧師は教会のほうを見た。
一日の仕事を終えたのだろう、カレアが畜舎から出てきた。
夕闇のなか牧師館へ入っていくのが見えた。しばらくすると飛び出してきた。
ユリウスとハイネは立ち上がった。驚いたコマドリが空に飛び立っていった。
「なにかあったのでしょうか」ハイネがいった。
ユリウスは駆けだした。ハイネもつづいた。
「――ケーテがっ」カレアが大声を上げた。
三人は刈り取った麦畑のなかでいっしょになった。
「ケーテの顔に、痘瘡の発疹が」
三人は牧師館へと走った。真っ先にユリウスがケーテの部屋に入った。
「……ユリウスおにいちゃん」ケーテが苦しそうな息の下、ユリウスを見ていった。
丘疹ができていた。痘瘡だ。カレアが入ってきた。
「兄上、なにとぞ、守護霊様のお力でケーテの病を……」ユリウスに耳打ちする。
「将来、この子が魔女の容疑をかけられようとも守護霊を使うべきだったというのか……？」
ユリウスは額に手をやった。すぐにハイネ牧師がきた。
「おお、ケーテ、神よ……ケーテをお救いください」ハイネ牧師はベッド脇で膝を屈した。
「おにいさま……」ケーテの幼い顔に涙がつたった。

ユリウスは唇を噛み締めた。カレアの手を引いて一階に降りる。
「兄上っ」カレアはユリウスの両肩を揺すぶった。
「牧師様が痘瘡の症状を見てしまわれた、ケーテが急に恢復したら、どう思われるか」
「……兄上がそういうおつもりなら、私の守護霊様で治します」
「駄目だ、この時代はヒトも、霊たちも荒みきっている、守護霊がどこにいっても少ない、自分を護るために使わなくては、いずれ死を迎えることがわかっていようとも、希望を捨て――」
「兄上……あまりにケーテがかわいそう、まだ十歳になったばかりなのに」
ユリウスは椅子に坐り込んだ。考えをまとめようとする。
「本意ではないが、牧師様に憑依霊を憑けて、記憶を操るしかないだろう」
「兄上、では」カレアの顔に笑顔が差す。
「……おれの守護霊で治す」ユリウスは覚悟を決めた。
その矢先だった。ハイネはケーテの小さな体にシーツを巻いて、階段を下りてきた。
「牧師様？」
「ケーテを教会に隔離します、あなた方は近づいてはなりませんよ」
ハイネは駆け足で去りながらいった。
「牧師様っ」ふたりは叫んであとを追った。
遅かった。ハイネはすぐとなりにある教会のなかに入ったところだった。
教会のなかは聖域だ。
「兄上、どうすれば」
「早く決断すればよかった」ユリウスは教会の扉を叩いた。
「牧師様、開けてください、おれは特別な薬草を持っているのです、それで痘瘡も治せます」
ハイネが扉ののぞき窓からこちらを見た。
「ユリウス、あなたらしくもない嘘を、痘瘡の治せる薬草などある

はずがないでしょう、私も大学で学んだ身です、この病は空気をつたって拡がるのです、決して入ってきてはなりません」
ユリウスはなおも扉をたたき続けた。牧師様っ、カレアが何度も呼びかけた。
――向こうから出てきやがったぞ、後ろから声がした。
若者の声が陽の落ちた暗がりの中から聞こえてきた。
ユリウスとカレアは教会を囲む石垣のほうを見た。その上を顔に布を巻いた若者四人が乗り越えてくるところだった。手に松明や子鎌などを持っていた。
教会の扉が開いた。
「あれは、夜盗ですか」ハイネがいった。
「牧師様、入れてください」ユリウスはこの機を逃さずにいった。
ハイネはためらうことなく、ふたりを招き入れた。素早く鍵をかけた。四人の若者たちが扉をたたきはじめた。窓へ回れ、怒声が聞こえてくる。若者たちは窓にはめられた板戸を割りはじめた。ハイネは祭壇の裏側に回った。隠し戸をこじ開ける。火縄銃（ハントビューク）を手にとった。
「先代の牧師から受け継ぎました、この教会に隠してあった銃です」
腑抜け牧師といわれた彼とは思えない手さばきで銃を操作しはじめた。
窓の板戸を割って、若者が窓から侵入してきた。ハイネは容赦なく銃を撃った。爆音が小さな教会にとどろいた。説教壇の前、シーツの上に寝かされたケーテが小さな悲鳴を上げた。
銃弾は、至近距離から若者の横腹に命中した。若者は教会のなかで倒れ込んだ。
デトレフだった。
浅い呼吸を繰り返しながら、痛え、とか細い声でいう。
三人の若者は逃げていった。口々にデトレフが殺された、と叫んでいった。
「兄上、デトレフの不良仲間ですっ」カレアが破れた窓から外を見

た。
ユリウスとハイネはデトレフのそばに寄った。傷は深かった。
「これは、助からない」ハイネが十字を切った。
「牧師様、あの連中は札付きの悪党です、あることないこと吹聴するかも知れません」
「私が撃ったことは事実、ありのままに村民には話しましょう」
「兄上のおっしゃるとおりです、牧師様、危険です」
ユリウスとカレアは互いを見た。ローマ教会からルーテル派に代わって以来、この村では宗教者の権威がないがしろにされる傾向が強かった。加えてハイネは村長たち有力者から信望を得ていない。村会議員の息子を撃ち殺したとあっては……。
「村人たちは天災と疫病で気が立っています、牧師様になにをするかわかりません。お逃げください」ユリウスがいった。
ハイネは断固として首を振った。
「神に仕える身として、そんなことができましょうか」
「……死にたく、ねえ……」デトレフの眼の生気が失せていく。
カレアはデトレフの上半身を起こした。
「カレア、まさか」ユリウスが驚く。
「牧師様に人殺しの汚名を着せるわけには参りません、兄上、外へ出すのを手伝って」
ユリウスは数瞬ためらった後、手を貸した。
「なにをするのです」ハイネがふたりを見る。
兄妹はデトレフを教会の外へ担いでいった。地面に横たえる。
「カレア、ケーテを助けるだけの力は残せるか」
カレアはうなずいた。ふたりは守護霊を招喚した。両手を傷口にかざす。
青白い美しい光が闇夜のなかで光り輝いた。
「これは、いったい……」ハイネが教会の戸口で呆然と光景を見ていた。
兄妹の集中した守護霊の力で、瞬く間に傷が快癒していった。デ

トレフの呼吸は正常に戻った。眼は閉じたままだ。呻き声を上げた。
「意識が戻り次第、憑依霊で記憶を変える」ユリウスがいった。カレアがうなずく。
「あなた方はいったい、これは、奇蹟、ですか……」ハイネがひざまずく。
「あなた様がたは、主の使わされた方々なのでしょうか」
「いいえ、牧師様」ユリウスの声音は固かった。
「おれたちの力は不浄の力です、故に教会のように聖なる土地では使うことができません」
ハイネは脂汗を垂らしながら、次第に理解の色を見せ始めた。
「しかし、悪魔の技でもない、なぜなら、悪魔の使い自身が、自らの技を不浄などというはずがありません。土着信仰に伝わる白魔術ですね、なんという、真に実在したとは……」
ハイネ牧師は打ち震えていた。
――デトレフが、そっと薄目を開けた。
「ケーテを助けたいのです、不浄の力はケーテに超常の力を与えます、それをお許し頂けるなら」ユリウスはいった。いくら理知的とはいえど、ハイネ牧師が許すだろうか。
「そのためには彼女を教会の外に連れ出さねばなりません」
「超常、とは？」
ユリウスは、守護霊のことをかんたんに語って聞かせた。
「これはいわば白魔術です、ルーテル派の教えに対する明確な背教行為です、それでもよければケーテを助けることができます」
「教えに背けば、ケーテが助かる、と？」ハイネ牧師は両手を組んでふたりを見つめてくる。
「牧師様、私ケーテを助けたいのです、ただそれだけなのです」
カレアはいうやいなや教会へと走っていった。
「待ってください、カレア」ハイネが後を追った。
ユリウスはデトレフを見た。まだ倒れ込んだままだ。デトレフに足蹴りをくれてやった。

それでもデトレフはだらしなく体を伸ばしたままだった。
意識のあるとき、相手の体と接触しないと命令は下せない。
ユリウスは逡巡した。それから後ずさるように教会へ入っていった。

デトレフは気を失ったふりをやめた。
すかさず起き上がる。教会の様子をうかがう。ハイネの妹が泣き声を上げている。
三人が泣きじゃくるケーテの前で話し込んでいた。
逃げるなら、いまだ。走り出した。怖ろしいほど、不思議と体中から力がわき起こってくる。
「聞いたぞ、不浄の技、教会のなかじゃあ使えねえときた」半笑いを浮かべる。
「魔女だ、あいつら本物の魔女だったんだ」ひた走っていった。
「ユリウスの糞野郎、俺様を蹴飛ばしやがって、許さねえ」村会議員の息子の、この自分を、たかだかはぐれ者の小僧が蹴ったのだ。万死に値する行為だ。
日の暮れた夜の村の扉を叩いて回った。
「魔女だっ、魔女がいたぞっ」ありったけ叫んだ。
不良仲間が村長の屋敷の前にすでに村民を集めていた。デトレフが殺されたと叫んでいた。
おいおまえら、デトレフが仲間を大声で呼んだ。仲間や民衆が振り返る。
デトレフ、おっ死んだかと思ったぜ、仲間が口々にいった。
村長をはじめ魔女狩り委員会の面子が集まってきた。
「村長、教会は魔女の巣窟だっ」デトレフは目を輝かせながら嘘を並べ立てはじめた。
「ローマ教会は、白魔術に対して寛容です、魔女を決して許しはしませんが……我々ルーテル派は神の奇蹟以外は許さないのです」

ハイネは、苦しむケーテを前にしてただなすすべを持たなかった。
「兄上、運び出しましょう」カレアがケーテを抱き起こそうとする。
ユリウスが蝋燭の灯りをともした。苦しむケーテの顔にはすでに膿疱ができはじめていた。
「痘瘡が重篤になっている」ユリウスは後悔した。
いっそ、神の使いの天使とでもなんでも嘘を並べ立てたほうがよかったのか――思い直す。
それを名乗れば教会のなかで治癒できなくなることの説明がつかなくなってしまう。
「早くしないと、兄上」カレアが懇願してくる。守護霊の力は残り少ない。
「教えて下さい」ハイネ牧師がふたりに取り縋った。
「あなた方は、どの神と契約を結びこの奇蹟を起こされるのですか？　イスラームの神々ですか？　東洋の神々ですか？」
「いずれもちがいます。いまあるすべての神々の前、キリスト教の誕生するより遙か太古に地上にいた存在です。それは、いわゆる神などではありません、悪魔でもありません」
「では、そのお方は何者なのでしょうか」
ユリウスはカレアを見た。記憶のないカレアにとっては初めて聞く話だった。
「おれたちは？父祖？と呼んでいました、これ以上はどうかご容赦ください」
ハイネ牧師は、地に膝をついた。私の理解を超える、そうつぶやいた。
「……わかりました、ケーテが助かるのならば」
三人がそっとケーテを運び出した。
「デトレフがいません」カレアがいった。
「……カレア、おまえはケーテの治癒を」ユリウスは予知夢を思い起こしていた。
「はい、兄上」カレアは残りの守護霊のすべてをケーテに注ぎ込み

はじめた。
ユリウスは草を引き抜いて使い魔を放った。霊視に入った。
――デトレフ親子が村長の屋敷の前にいた。自由農民たちが数十人集まっている。
「ほんとうだ、寝てたら息苦しくなったんで、起きてみると枕元にカレアが立ってたんだ、俺は自由がきかなくなって、気がついたら教会にいた、目の前でユリウスとカレアの奴らがニタニタ笑ってやがった、なあみんな」不良仲間にいう。
仲間たちは互いの顔を見合った。
「でもおまえの仲間は、おまえが銃で撃たれたって……」村人がいった。
「幻さ、こいつらも操られていたんだ、撃たれたらこんなに元気でいるものか」
なるほど、たしかにそりゃそうだ、村民たちがうなずいた。村長が手を叩いて呼びかけた。
「諸君、これだけ証言がある、そして現に奴らが天災と疫病を村にまき散らしておる、一刻の猶予もならん。民衆法廷を開く暇はない。即刻火刑だっ」村長の呼びかけに民衆は沸き立った。
人々は松明を持ち、教会に向かって行進をはじめた。
――ユリウスは霊視を解いた。
「まずい、こっちにくる、カレア、ケーテの具合は」
「兄上、守護霊様を使い果たしてしまって」カレアが必死の形相を浮かべた。
「……カレア」ケーテが潤んだ瞳でまわりを見る。
「おれが代わる」ユリウスは残る守護霊をかき集めた。全力で治癒をはじめた。
「頼む、病よ、退け」ユリウスの顔を汗がつたう。
すこしずつ、ケーテの体の膿疱が消えていく。
民衆の怒号が聞こえてきた。教会の石垣の周囲を包囲された。門扉が叩かれる。

「ハイネ、その流れ者の兄妹を引き渡せ」村長が怒鳴る。
「なにをおっしゃるのです、デトレフ一味が教会を襲撃したのが発端なのですよ」
ハイネは声の限り叫んだ。駄目だ、ハイネの奴もグルにちげえねえ、民衆が口々にいう。
「そんな、兄上、なんとかしてふたりを助けてあげなくては」
門扉をたたき壊す音が聞こえてきた。
「なんという浅ましい……」ハイネは首を振った。
ケーテの肌から痛ましい膿疱が消えた。愛くるしい、きょとんとした表情を浮かべた。
「……治った」ユリウスが吐息をついた。
ケーテがゆっくりと起き上がった。自分の顔を手で触る。あどけない笑顔を見せた。
「いたいのが、あついのがとんでっちゃったよ」
「よかった、ケーテ」カレアがケーテを抱きしめた。
「カレア、ユリウスおにいちゃん、あたしをたすけてくれたの？」
「もう安心よ、ケーテ」
「ファニー・ピヒトのときみたいに？」両手には大事そうに人形を持っていた。
「そうよ、ファニー・ピヒトと、仲よくしてね」
「うん、カレア、わたし、にどとファニー・ピヒトとけんかしないよ」
ユリウスはケーテの髪をくしゃっとなでた。
「もうだいじょうぶだよ、ケーテ」
「ありがとう、ユリウスおにいちゃんっ」ケーテは無邪気に抱きついてきた。
「牧師様、ケーテを連れて村民たちのところへ」
「なにをおっしゃいます、ケーテまでは連中も命は奪わぬでしょう、あなた方は超常の力を使い、お逃げください、ミラノ、あるいはヴェネツィア、南の方へ下れば、ローマのほうでは、魔女狩りは有罪

でも鞭打ち程度ですむと聞いております、帝国はもう、もはや駄目です」
ユリウスは首を振った。
「空を翔(かけ)る力を使い果たしました、残るはヒトを殺める力のみ」
カレアがユリウスの腕をつかんだ。悲しげな瞳を向けてくる。ユリウスがうなずく。
「おれたちはもうヒトを殺めてまでこの時代を生きるつもりはありません。おれたちは永遠の生を授かりました。生き続けるのが義務なのです、聖なる土地でのみ一瞬の死を得ます。それ以外ではおれたちの肉体は滅ぼされません。死を得ると、新たな時代に生を受けます」
ハイネは十字を切った。心底安堵した笑顔を見せる。
「おお、なんというお力でしょう、ならば私ごときの心配は無用というもの……」
出てこい、怒鳴り声。魔術を使われたらどうする――じゃあおまえが石垣を登っていってこい、民衆の言い争う声がする。
「おにいさま、こわいよ」ケーテがハイネを見る。
ハイネの顔が苦渋に歪んだ。
このままでは牧師は殺されるかも知れない。ひとり残されたケーテは……。
「ああ、ケーテ、私は、どうすれば」ハイネがケーテの頭を愛おしそうにさすった。
ユリウスは決断した。今度は、ためらわなかった。
「ハイネ牧師、ケーテ、おさらばです」
「なにを、おっしゃって――」
ユリウスは憑依霊を両手に集めた。掌が暗緑色に光り輝く。ハイネとケーテの額にあてた。
物を介さず、直接ふたりの精神へと送り込む。注意深く、決して精神を狂わさない程度に加減しながら。けれど容易に術の解けないように、強力な憑依霊を送り込む。

「汝等に命ずる、我等兄妹への親愛の情を忘れなさい、我等は魔女、汝等は我等に操られいままで従ってきたまでのこと、村人にこれを伝え、助命を願い出なさい」
ハイネとケーテが二度、三度、体をうねらせる。ふたりの脳の記憶が組み替わってゆく。
「我等を教会へ閉じ込め、そのまま火で焼き尽くしなさい」
――両手を離した。
ふたりが虚ろな顔をした。ユリウスとカレアを見る。ハイネ牧師は後ずさった。
「……魔女、よくも私の大事なケーテまで毒牙にっ」ハイネ牧師の顔に憎悪が満ちていく。
「おにいさま」ケーテが恐怖に顔をゆがめ、ハイネに抱きついた。
ケーテが怯えきった眼でこちらを見つめてくる。
「まじょ、あっちへいけっ」泣きじゃくりはじめる。
ケーテは、カレアのあげたファニー・ピヒトを握りしめていた。
カレアは無言で眼を背けた。
ユリウスがカレアの手をやさしく、つよく握った。カレアも握り返す。
ハイネはケーテをしっかりと抱きかかえ、門扉に走った。
「助けてくれっ」ハイネが門扉を開ける。民衆に話し始めた。ハイネは切々と語り出した。
村長や民衆たちがうなずく。皆がふたりの肩を叩いた。もうだいじょうぶだ牧師さんよ、そういうとユリウスたちを睨みつけてきた。いったいどうなってやがるんだ？　デトレフは、得心のいかない表情で地面につばを吐いた。不良仲間らも牧師を不思議そうに見た。
「魔女の兄妹を殺せっ」民衆がなだれ込んでくる。
ユリウスはカレアを連れて教会のなかに入った。
「ハイネ牧師、ケーテ、ありがとうございました。どうかご無事で」
ユリウスがいった。
カレアが恐怖に震えて、兄に抱きついた。

「兄上」
「すまない、カレア、おまえにつらい思いばかりかけさせる」
カレアは首を振った。
「もうよいのです、あまたの時代を駆け抜けてもヒトの世は争いばかり……疲れました」
カレアの愛猫が、説教壇の裏から飛び出してきた。
「まあ、おまえまで……おいで」
愛猫はカレアの腕の中で丸くなった。外からは、引きずり出せ、怒鳴る声が聞こえてくる。
「駄目だ、奴ら教会のなかなら魔術を使えねえんだ、引きずり出したら、使われちまうぞ」
デトレフの声。じゃあどうする、と民衆たちが騒ぐ。
「教会ごと」ハイネ牧師が声を高めた。
「教会ごと焼いてしまうのです、魔女には火刑がふさわしい、善は必ず悪に勝つのです」
「しかし、牧師様、教会を焼くなんて罰当たりなことはさすがに」村長がいった。
「なにを臆することがありますか、この教会は魔女に憑かれたのです、炎で焼き尽くし、清めねばなりません。なにを臆するのです、さあ、善なる人々よっ」ハイネ牧師は絶叫した。
教会ごと燃やせ、そうだ、それがいい。人々が叫ぶ。
「よし、牧師様の許可が出たぞっ」村長が目を血走らせていった。
民衆が畜舎から干し草を持ってくる。さらに薪が持ち出された。
ここだ、ここに薪をもっと積むんだ、村長がいう。
「こちらにも薪をそうですその調子です」ハイネ牧師が指示を出す。なにかに憑かれたように。
いっせいに松明の火が教会の木の柱や土壁に浴びせられた。薪と干し草に火が燃え広がった。
小さな教会を炎が包んでいく。煙が立ちこめる。炎は天井まで上がった。

「死の痛みに慣れることはできません」カレアがいった。
「……次の時代、ローマ教会を頼ってみよう」
瓦屋根が、燃える支柱ごと落ち始めた。
「カレア、ヒトの世はたしかに悪意に満ちている、けれどハイネ牧師やケーテのように善意ある者たちもいる、追い詰められた一握りの善意は、それ故に強くなる。信じよう、いずれ、ヒトの生んだ理想郷にたどり着くことを、おれたちの夢だ」
「……兄上」カレアは、あらん限りの力でユリウスに抱きついてくる。
ユリウスはカレアの額にそっとキスをした。
猫が鳴いた。
燃えさかる天井が落ちてきた。

――ユリウスは潮の臭いを嗅いだ。
ああ、なつかしい。我がふるさと。ゲルメキアの土地だ。
ユリウスは広大な草原にたたずんでいた。海風が吹き付けてくる。視界はぼやけて、ときどき歪んだ。なにもかもが白く、音もしない世界。
原風景。転生のたびに見てきた光景だ。
巨大な岩陰にうごめくなにかがいた。しらっちゃけた太陽の陽で、そのなにものかの影がうごめくのが見える。白い世界で、そのものだけが濃い陰影をつくっていた。
「ああ、父祖、また憎むべき貴様の力を借りねばならないとは」ユリウスはいった。
?ユリウス、カレア、愛しき子等よ、我等は、いついかなる時でも汝等と共にある?
「貴様の血がおれに、カレアにも流れていることが許せない」
?汝の我等への憎しみ限りなし。カレアの我等への情愛限りなし。兄妹をして争ひし彼(か)の地ゲルメキアの大戦、我等との縁(えにし)を、カレアをはじめ我等の子等は皆尽(ことごと)く失念しておる。記憶を留める子は汝、

ユリウス唯一人也。悲しむへし？
「同胞(はらから)のカルマ人たちも貴様を忘れることが出来たのか、忘却とは、実に幸福なものだ……」
？愛しき子等は相争うておる、子等はヒトの創りし神を恃(たの)み、別の子等は我等が名を謳ひて徒党を組み、自死を選び、ヒトを滅しておる。我等を失念しても、名を謳うとはこれ憐れなり？
「同胞のように自死のできることなら、おれも、カレアもどれほど楽だったろうか」
　声には、倦みと諦念がにじんでいた。

？おお、ユリウス、哀しき哉、愛しき子等も己を殺めようとも業(カルマ)からは逃れられぬ？
「自死をして同胞に封印されたいのだ、ヒトの醜い争いを見続けるよりも遙かにましだ」
？永遠の生は、汝をしてそこまで追い詰めたか、カレアに語りし夢、汝、諦めるか？
「カレアさえ理想郷にたどり着いてくれればそれでいい、父祖よ、カルマを断ち切りたい、すべてを終わりにしてしまいたい」
？その願いだけは叶わぬ、ユリウス、カレア、汝等、愛しき子等よ、業は決して消すことはできぬ、血によりて交わされしこの契約、神聖にして犯すへからざるもの？
「では、父祖よ、せめてひとときの安息を得たい」
？ユリウスよ、憐れなるかな、我等とて万能に非ず、広大無辺の時の流れの中、僅か一時の瞬間に過ぎぬ、それでも欲するか？
「かまわない、一時でもいい、この忌まわしい記憶を消してくれ、同胞との安らぎの記憶も、いっしょに、なにもかも。超常の力もいらない」
？よろしい、汝の記憶、超常の力、僅かな間なれど消すとしよう、その間も我等が力によりて汝の命を守りしこと変わらぬものと心得よ。では、汝が想ふ中、最も忌まわしき悲劇が訪れし時、業は再び

回(めぐ)り出そう、その時、超常の力は甦る、記憶も遅れて戻るであろう？

「――――――……」

？やはりカレアの死を想ふか、愛しき子ユリウス、憐れむへし？

「……カレアは、いま？」

？汝の後を追い、彷徨うておる――おお、カレアよ、ヒトの形をとることすら忌み嫌うか？

「せめて、カレアだけでも、記憶を、さらに重ねて転生と流浪、おれとの記憶も消してくれ」

？カレアの哀しみ、苦界の極み也。ならば、カレアにも一時の安息を与えようぞ、されどカレアは汝を愛し、憎みながらも汝に恋い焦がれし業深き子、カレアは死を与えられし時、今一度汝との縁が試されようぞ、然る後ヒト以外の獣の形に依りて、その魂を引き継がせよう。なれど愛しき子ユリウス、業の因果を歪めしこの営み、必ずや万倍となりて汝等に災ひをもたらすであろう、悲しむへし、悲しむへし、それでも願ふか、愛しき子よ？

「……願う」

？新しき契約は成された、汝等業に絡め取られし我等の子等よ、汝等の永遠(とわ)の悪夢を紡ぎし糸は、それ則(すなわ)ち我等との血の契約を違(たが)えし古(いにしえ)よりの因果也？

海風が凪いだ。

白い世界を、父祖の黒い影が広がり、覆い尽くした。

7 “せめて、敬意を”

メイはベッドのぬくもりの中で目を醒ました。
まどろみからなかなか抜け出すことができなかった。大きく伸びをする。
久しぶりの真夏の雨が降っていた。時折風が窓ガラスを揺らした。
メイは振り子時計を見た。午前十時を過ぎたあたりだった。
黒塚凜がいない。
メイはタオルケットの中から急いで飛び出した。
凜がいた。デスクに坐って、ノートパソコンを観ていた。観ているのは、動画だ。映っているのは、詩本龍子――杉浦達也がムービーカメラで撮影した動画だった。
「ニィー」メイが凜のそばに寄った。
様子がおかしい。泣いている。
「……メイ、おはよう」メイを抱き寄せた。
「ごらん、メイ、龍子だよ、笑ってるだろ」
メイは映像を見つめた。龍子がメイを抱いて中庭の椅子に坐っていた。素晴らしい笑顔だ。
長い髪が風に揺れた。真夏の陽ざしで画面が一瞬真っ白になる。
龍子が眩しげに眼を細める。
「おれこのとき誓ったんだ、こいつを必ず護るって……でも駄目だった。おれ、護れなかったよ。好きになった女、おれ、護れなかった」凜は額に浮かんだ汗を拭った。
「おれさ、男失格だよ。截拳道でも惚れた女に勝てなかった、男の誇りなんておれにはねえよ、遅えんだよ、あいつが死んでからカルマ人になったって」凜は頭を押さえた。
「なんだかとても嫌な夢を見たような気がするんだ、朝から熱がひかないんだ」
メイはしきりに凜の顔をなめた。

「なぐさめてくれてんのか、おまえ」凜はメイの背中をなでてやった。
「体の中からさ、泣き声が聞こえてくるんだ、スカラワンガに封印されたヒトたちだ、内田くんって子がさ、出してくれっていってくるような気がするんだよ、内田くん、もう少しで学校のサッカー部でレギュラーになれるところだったんだって、八王子のデパートのスポーツショップで欲しくてしょうがなかった物があるらしいんだ、でもお小遣いが足らなくって、買えなかったんだよ、そのうちに夜が暮れて、龍子とおなじ電車に乗ったんだ」
メイはじっと大きな耳を傾けて聞いていた。
「電車が一本ちがったら、いまもサッカーをやっていられたんだよ、レギュラーの夢かなってたはずだったんだ」
ニィー、と、ひときわ大きく鳴いた。凜はメイを抱きしめた。
「内田くん、悪霊になっちゃったんだ、外に出せっていって、泣きながら暴れてるんだ」
――凜兄、龍子は懸命に思念の流れるのを食い止めた。
「アルさんやルカさんたちの前で、強がって見せていたけど、やっぱり、つれえんだ、おれ、龍子がいてくんないと、ダメみたいなんだ、おれって弱えよな、龍子、おれのどこを好きになってくれたんだろうな」
思念を伝えるのはかんたんだ。前肢を差しだして、そう、心を開くだけでいい、それでいい。
カルマ人の凜とはそれだけで心を通わせることができる。
メイはうつむいた。前肢がわずかに動く。
「でもさ、おれ、龍子と約束したんだ、強くなるって、それに……」
凜は瞳を閉じた。
「おれの中には、かぬかもいるんだ、かぬか、頑張れっていってくれてる、龍子がおれのことを見てるよっていってくれてるんだ、神父様や、おじさんの声もすこしだけ聞き取れるんだ」
メイは透き通った双眸にありったけの気持ちを込めて、凜を見た。

「龍子がさ、だからいつかおれのところにきてくれないかなって思ってる、おれの使役霊になって……龍子を闘わせる羽目になっちまうけど、でも、おれ、もう一度龍子と逢いたい、守護霊でなくたっていいんだ、龍子が苦しんで悪霊や憑依霊になっていたら、おれもいっしょに苦しむから、龍子に逢いたいよ……逢えるかな、かぬか？」

凜は瞳を閉じたまま、じっと坐っている。

かぬかの声なき声に耳を傾ける凜を、メイはただ見守った。

雨が吹き付ける。空の雲の動くたび、窓の外がすこしだけ明るくなった。一瞬日光が差したかと思えば、またすぐに暗くなる。凜とメイだけの部屋のなかを陰影が踊った。

「……うん、そうか、ありがとうかぬか」

凜は瞳を開けた。メイを持ち上げた。

「いずれまた、逢えるって、かぬかがいってくれてるよメイッ」

メイはいてもたってもいられず、尻尾を振った。

「おれ、なんとかやっていくよ、霊たちといっしょに、彼らの心に耳を傾けてさ、闘っていくよ、これから、ずっと……龍子、見ててくれ」

――龍子は、抱きしめたかった。目の前のひとを。抱きしめる腕はなかった。

「龍子が好きだったんだ。かぬかの死んだ日、あいつ、おれの前で初めて泣いた。あの日から護ってやろうと思った。あの日、気づいたんだ。おれ、こいつがどうしようもなく好きだって」

凜は自虐的な笑みを浮かべた。猫にコクっても、しょうがねえよな、そうつぶやいた。

――凜兄……。たしかに体は猫になってしまった。けれど、この想いだけはいまも変わらないから、あなたへの想いは、あなた以外のどんなひとにも与えないから……。

凜にそっと口を寄せようとした。

凜が、見た。

「……あれ、なんだおまえ、メスだったんだな」
「――ニイッー」メイは思いっきり前肢で凜の頬をひっかいてやった。
「痛えっ、なにすんだよ、おまえ」
メイは暴れ出した。凜の両手からすり抜けた。ベッドのなかにまたもぐり込んだ。
鼻息荒く、鳴き声を荒げた。
「これだからな、猫ってなに考えてんだかわっかんねえんだよなあ、甘えてくるかと思えば、素っ気なくなったりしやがってさ、暴れたりとか……」
凜はベッドに近寄った。ゆったりとベッドサイドに寄りかかった。窓の外を見る。雨が時折窓をたたきつけてくる。押し寄せる悪寒にあらがうように、眉間にしわを寄せた。メイを見つめる。メイはタオルケットの奥にもぐり込んでしまった。出てこようとしない。
凜のほうに尻尾を向けている。
「出てこいよ」凜が尻尾をなでた。
メイは、尻尾を左右に振った。あっちへいけ、とでもいうかのように。
「なんだかおまえ見てっと、龍子想い出すな、おまえ、龍子にいちばんなついてたよな」
ノートパソコンの中の龍子が、声を上げて愛らしい笑い声を上げた。
ロングヘアをかき上げる。凜に向かって口をとがらせていった。
『もう、ほんとに凜兄ってば、サイテーッ』
東京も雨模様だった。川上徳人と杉浦達也はビルの一室にいた。ビルは都内の飯田橋駅からけっこう歩いたところにあった。
ふたりは応接室のソファに坐っていた。窓に雨の打つリズミカルな音が響いた。
「タツ、ここが駄目だったらどうすんだ」

「もうノリさん後がないよ」ふたりはカフェの休みを利用して、二日前東京へいった。まずテレビ局に持ちかけた。次にきのうから新聞社。それから週刊誌。いずれも何社か訪問して、断られた。最後にスポーツ新聞社を数社回った。ここが最後だった。

応接室のドアが開かれた。ふたりはソファから立ち上がった。

「いやあ、そのままで」いいよ、といいながら大柄の中年男が入ってきた。

名刺を出してきた。〈日刊キンダイ　編集局社会芸能部部長　熊川光太郎〉とあった。

「いやあ、見せてもらったよ、動画、すごい、あれはすごい、モノホンて奴だなあ」

熊川はしきりに感心してタバコに火をつけた。ふたりにも勧める。三人でタバコを吹かした。

熊川は応接室のＡＶ機器にふたりの持ち込んだＤＶＤをセットした。

達也があの詩本竜一とスカラワンガの襲撃の夜、ユリスモールカフェを覆った暗緑色の巨大な光をムービーカメラで撮影していた。あの映像のコピーだった。動画が再生された。

光がふたつに収束した。カフェを離れ、空へと飛んでいくところがはっきりと映っていた。

「俺の推理だとこいつは米軍すよ、米軍の秘密兵器ッス、神奈川には米軍施設があるッスから、最近米軍将校が事故死してるし、？スカラワンガってのも暗号ッスよ」徳人が意気込んだ。

「例のホームの血文字ね、これはねえ、驚くよ正直ね」熊川は何度もうなずく。

「現場でＩＣレコーダ録音したの、あれ俺なんすよっ」達也が喰いつき気味にいってくる。

「モチ、スゲえよな、俺ももう君の勇気に感動したよ」熊川はにこやかにいった。

「決めた、載せるよ、連続写真をこう、ばあっとね、一面載っけて、

でさ、見出しが？衝撃、紅葉ヶ丘連続殺人事件の真相？とこうきたもんだ、どうだい？」
「あざあッス」ふたりは同時に叫んだ。――で、約束なんすけど、徳人がいってメモを出した。
これを載っけて欲しいッス、徳人の言葉に熊川は愛想笑いを浮かべた。
〈詩本ちゃん　安心しろ　みんなもメイも無事だ〉
「ん、これはうちに載っけたいってことは音信不通の子へのメッセージかなんかかい」
「そうッス、もしも読者から反響がきて、キンダイさんのとこにテレビとかほかのマスコミがきたら、動画といっしょにその一文も放送して欲しいッス」達也がいった。
「よおし、わかったわかった、約束するよ」
徳人と達也は気合いを入れてハイタッチしあった。
ふたりはお願いします、そういって意気揚々と出ていった。熊川はタバコをひねり消した。
「しかし」もう一本つける。
「あの学生ども、よくこれだけスゲえCGでっち上げたもんだな」
熊川は部下を呼んだ。
かんたんにばれる合成かなにかだとまずい。一応CGクリエイターの鑑定を頼もうとした。
一面云々の話は鑑定の終わったあとだ、そう思った矢先――。
「部長、きてくださいっ」別のスタッフが飛び込んできた。
「うるせえなどうした」
「〈思いっきりドキュンな昼下がり〉で速報ですっ」
熊川たちは、編集部のテレビ前に集まったスタッフたちを見た。
「なにがおっぱじまった」
『驚いたねえ、あの人気絶頂アイドルの久利生翔と人気女優雨宮？美が電撃婚約発表だって、これはファンが暴動起こすよねえ』
有名司会者がトレードマークのスマイルを浮かべてしゃべりまく

っていた。
「まじかっ」熊川は大声で指示を出し始めた。
「あしたの一面全部差し替えだっ、急げよっ」
「あの、部長」ＤＶＤの担当を任された女性記者が聞いた。
ああ、なんだよ、熊川は投げやりにいった。例のＤＶＤの件ですが、と女性記者が切り出す。
「馬鹿野郎、そんなネタ没だ、没っ没っ」
「……いいと思うんだけどなあ」若い女性記者は未練たっぷりだった。

雨はこの日一日降り続けると天気予報ではいっていた。
ユリスモールカフェは休業した。客のくるはずもない。日中雨のなか、建設業者がきた。
カフェの建物の修理に取りかかった。業者が帰ると、カフェの前にはマスコミ関係者が残った。坂道に若い女性レポーターがピンクのレインコートを着て、マイクでしゃべっていた。
「私ども〈思いっきりドキュンな昼下がり〉特捜班ではこの一連の紅葉ヶ丘殺人事件を徹底追及していくつもりです」事件の概要をしつこくテレビカメラに向かって語り出した。
夕食時、徳人と達也が東京から帰ってきた。カフェの前の取材陣の質問攻めを無言で通した。カフェのドアをぴしゃりと閉めて、カウンター席に陣取った。買い込んできた酒を飲み始めた。
「黒塚、おまえもちょっとつきあえよ」徳人がいった。
「はい、ちょっとだけ」凜は、タンブラーにつがれた梅サワーに口をつけた。
「マスコミの奴ら、まだ陣取ってるよ」達也が外を見ていった。
凜は苦い液体をなめる。アルとルカがカウンターに入った。達也のリクエストで焼酎のお湯割り梅干し入りをつくってやった。徳人はひたすら買ってきた発泡酒をジョッキで飲んでいる。
ルカが酒の肴に、白ソーセージと溶かしたチーズのかかったフラ

イドポテトを用意した。
外の喧噪がひときわ大きくなった。ピンクのレインコートの女性レポーターが叫んだ。
お着きになりました、善道アイ子先生ですっ、マイクに叫んだ。外の喧噪がふくらむ。ディレクターがＡＤに怒鳴りながら指示を出している。
カフェのドアの前に善道アイ子が痩せ細った姿を見せた。歳は五，六十代くらいだろうか。
「善道、アイ子、です」ドア越しに甲高いしわがれた声が聞こえてくる。
「……霊視（みえ）ます。私の霊視がたしかならば、伊丹爾三郎なる男は薬物の売人にして、強度のアルコール中毒患者です」事前にマスメディアから横流しされた情報を元に好き放題だ。
「なるほど、では伊丹容疑者が、薬の売人詩本容疑者を射殺したあとこのカフェから投身自殺したというのはほんとうのことなんでしょうか」
「警察の発表を素直に信じればそうです、が、私の霊視がたしかならば、このカフェそのものに霊障があります。警察はそれを認めようとはしません」
「詩本容疑者の逃亡中の娘さんの行方はいかがでしょうか」
「私の霊視がたしかならば、その娘もまた薬物の依存者です」
最初に達也が、つづいて徳人がぶち切れた。ふたりは外に飛び出した。
「ふざけんな、インチキ霊能者アアッ」達也が酔った勢いでくってかかった。
「無礼な子供ですね、大変、無礼です」善道アイ子の口調はあくまで尊大だ。
「このリング見てみろ、伊丹神父が俺らの名前憶えててくれたおメダイなんだぞっ」
徳人が激高していった。リングを善道アイ子の鼻先に突き出す。

「証拠は？」善道アイ子は冷静そのものだ。
「そりゃあ、ねえけど、でも詩本ちゃんはクスリなんかやってねえってっ」
証拠は？　善道アイ子は繰り返した。
じゃああんたの霊視に証拠はあるのかよ、達也が痛いところを突いた。善道アイ子は笑った。
「私には霊視（みみ）えます、伊丹爾三郎の自宅の地下室にはウオッカの酒瓶が置いてあるのを」
「僕にも霊視（みみ）えます、ゼンドーさん、あなたの携帯に、四二分前にテレビ局から入ったメールが残されています、そのメールでイタミ神父の地下室のことをお知りになったんですね」
ルカがうっすらと笑顔を見せながら仁王立ちになる。徳人と達也はあっけにとられた。
善道アイ子の嘲笑が凍り付いた。なんですかっ、口角泡を飛ばしてわめき散らし始めた。
「なら、あなたの携帯を見せて下さい」ルカは口だけで笑みをつくった。瞳はサングラスに隠れていたけれど、おそらく誰も見ないほうがいいほどの憤怒がそこにはあった。
話にならない、ここは住人も霊障に取り憑かれていますっ、善道アイ子は金切り声を上げながら、送迎用のＢＭＷに乗り込んだ。女性レポーターが慌てふためく。善道御大は高級車に乗って走り去った。テレビ局のディレクターが走り寄ってきた。
「どうも失礼、べっぴんさん、アンタ、どうしてウチの仕込み見破れたの？　本職さん？」
「ええ、本職です、彼女と同様、僕もインチキ霊能者なんですよ」
ディレクターは、是非ウチの番組に出演を、といってきた。
ルカはにっこりと笑った。壮絶な平手打ちをディレクターに見舞った。カルマ人の力だ。男は坂道に卒倒した。呆然としている徳人と達也をカフェのなかに入れた。ルカはドアの鍵を閉めた。スクリーンカーテンを下ろしてガラスのドアの視界を遮断した。

スゲえ、ルカさんスゲえっ、徳人と達也が口々に絶賛した。
「君たちこそ、よく先陣切ってマスコミに喧嘩売ってくれたね、いい酒を出そう」
そういって赤ワインのボトルを大事そうに持ち出してきた。
「カミュウ、ユーロで払いたいんだけれどいいかな」ルカはじっとアルを見た。
「おまえのポケットマネーか」アルは聞いた。ルカがうなずく。
ふたりの視線が交錯した。先にアルが目を逸らした。
好きにしろ、オレは口をつけない、そういった。凜もアルを見た。
「飲んでよ、アルさん、龍子のために」凜がいった。
徳人と達也も呑もうよアルさん、そういってきた。
「なら、形だけな」アルはルカからワイングラスを受け取った。ルカを見ようとはしなかった。
皆がワイングラスを持った。達也が音頭を取りたいといってきた。
「じゃあ、えっと……詩本ちゃんが一日も早く帰ってくることを祈って、乾杯っ」
五人は乾杯した。それからまた自分なりのペースで皆は飲み出した。アルを除いて。
「……詩本ちゃんはきっと近いうち連絡してくるッスよ」達也がいった。
ムービーカメラを手にとった。モニタに詩本龍子が映し出された。
「また泣いてんじゃねえっつうの」徳人がいう。つまみを頬張って発泡酒を一息にあおる。
「……泣いてねえッスよ」達也は凜といっしょに龍子を見た。
「黒塚、俺、詩本ちゃんのこと、好きなんだ」
「おれもです、タツさん」もう一口飲んだ。
「昔から好きだった、龍子のこと、おれ、ずっと好きだったんです」
「おまえ、詩本ちゃんのこと、下の名前で呼ぶようになったんだな、どうしたんだ」
「そうですね、そういえば、そうだな」凜は達也を見ていった。

「なんか、おまえ雰囲気変わったな、黒塚、なあタツ」
「そッスね、大人になったっつうか、よくわかんねえけど」
カウンターの脇にメイがやってきた。ルカがモンプチを皿に取り分けてあげた。
「口に合うかな、メイ」ルカがいう。
メイは、ルカを見て、それからすこし口をつけた。
ニィ……なんともいえない鳴き声を上げた。
アルはメイに視線を注いでいた。
「メイ、モンプチって高えんだぞ」徳人がいった。顔を赤らめている。
ねえノリさん、達也がいう。きょうの東京作戦のことをやっぱり話そうよといってきた。徳人は恥ずかしいと嫌がった。ふたりが例によって言い争いになる。アルがなんのことか訊ねた。
「なんでもないッス」徳人がいった。発泡酒を飲み干した。
彼女の生を信じる者、彼女の死を乗り越えようとする者、彼女の真実を知る者。
皆、ほどほどに飲んだ。食べながら彼女の想い出を語った。アルだけはあくまで酒を口にしようとしなかった。ルカはジントニックを飲みながら、黙って膝の上にメイを抱いていた。
メイは起き上がった。二階へと逃げるように階段を上がっていってしまった。
零時を回った頃、酒の強い達也が、徳人を介抱しながら裏の館へと帰っていった。
凜はそれなりに飲んだけれど、少しも酔えなかった。
カルマ人の体が、アルコールという毒素を浄化してくれた。
カフェにイタリア語でなにかが放送された。
若い女性の声だ。高圧的な命令口調で一方的にしゃべり、切れた。
アルは監視カメラを見た。腕時計を確かめる。
「大佐、リン・クロヅカの叙任式の時間だ、ちょっと過ぎてしまったが」

ルカが凜の前に立った。凜はウインザーチェアから立ち上がった。
「リン・クロヅカ、貴殿を外赦院隷下教皇十字軍第二軍団員少尉に任官します」
ふたりは握手した。
「貴殿の今後の一層の活躍を期待する、以上」
「……階級章とかは？」上目遣いにルカを見る。
「ヴァチカン本国には用意されているはずさ、制服も、でもニッポンじゃ着る機会はないかな」
ルカは美貌に茶目っ気のある笑顔を添えた。
「なんだか、いい加減な軍隊だな」
イタリア語の放送がつづいて流れた。今度は若干、ねぎらいの色が聞いてとれた。
「……休暇はパーかよ」アルが嘆息した。
「いまの放送、なに」
「緊急召集だよ、次の作戦命令」ルカが顔を引き締める。
「おれ、さっそく破門者と闘うの」
「だけとはかぎらない、心霊現象に悩む人々のところへいって、自由霊を封印してくるのも大切な仕事だね」ルカは直立不動の姿勢をとった。
「アルフォンス・カミュウ少佐、リン・クロヅカ少尉、出撃準備を命じる」
アルが上官に敬礼する。凜も見よう見まねで敬礼した。ルカが答礼する。アルはマセラッティオーネをとりにオフィスへいった。凜はスクールバッグをひっつかんで階段を上がっていった。
「メイ、あれどこだ、おれ出かけっから」凜はメイを捜した。
メイはテーブルの下に隠れていた。まだ許してあげない、そんな風に。――すぐ見つかった。
「メイ、機嫌直せよ、おれからのプレゼントだぞ」
凜は、バッグからマタタビがなかに入ったネズミのおもちゃを取りだした。

「マタタビネズミの〈マタチューくん〉だぞ」そういってメイのほうに投げてきた。
猫は、転がるマタチューくんを条件反射で追いかけた。
?こらメイ、やめなさいっ?龍子がいっても猫はいうことを聞かない。マタタビに夢中になっている。そのうち龍子まで気分がよくなってきた。ヤバイ、龍子は身の危険を感じた。憑依の度合いをすこし高めた。猫の体がいうことを聞くようになった。メイは凜を睨んだ。
「気に入ったかメイ」
「ニィーーッ」――凜兄のバカ――龍子は体についた臭いを嗅いだ。マタタビの匂いだ。
?……悪くはないわね?そう感じてから、我に返る。それでも床に転がるマタチューくんについ目がいってしまう、血が騒ぎ出す。猫の思念が流れ込んでくるのだ。猫は、メイはマタチューくんに夢中になっている。龍子は意識しておもちゃを見ないようにする。でも、気になる。
龍子はすこしだけ猫に自由を与えてやった。前肢でマタチューくんを小突き回す。
……気持ちいい、とっても。龍子にとっても、猫にとっても。
やっぱり私ヤバイ、龍子は思った。
「OKッいい仔だメイ、じゃあちょっとおれ、出かけてくっからさ」
凜がメイの額をくすぐった。猫は目をつむった。
?凜兄、ひょっとしてもう闘いにいってしまうの?龍子は思念を隠すのに苦労した。
「ニィーッ」ひときわ高く、切なく鳴いた。
「おいいくぞ」アルが下から呼んだ。
「わかったっ」凜は一階に降りていった。
龍子は凜の後を追いたい衝動に駆られた。凜は闘いに赴ける。いや、いかざるを得ない。自分はただ愛するひとの無事を祈るしかないのだろうか。当然だ、足手まといになるだけだ。

――つらい。やっと凜兄と気持ちを通じ合えたというのに。龍子は思念を弱めた。慣れない猫の体の中で、だいぶん精神力を消耗していた。自由になった猫は一心不乱に毛繕いを始めた。

凜は一階に下りると、アルから荷物を受け取った。

「カミュウ少佐」ルカが、カフェから出ようとするアルを呼び止めた。

アルは背中を向けて立ち止まった。外に飛び出していた凜は先にガレージへ走っていった。

「気をつけて」

ルカの言葉に、アルはただ無言でうなずいた。振り返ることなく、雨のなか凜につづいた。ガレージのシャッター脇にある通用口から入って後ろ手に閉めた。

ルカは、ふたりの姿の消えるのをカフェのドア口に立って見送った。

ひとりになると鍵を閉めてオフィスへいった。金庫の鍵を開けて、愛用する拳銃のワルサーＰＰＳを持ち出した。実弾を装填する。拳銃をしばらくのあいだ見つめてから、デニムの腰に差した。なにか、祈りの文句のようなものを口にした。それから二階へ上がった。

猫は毛繕いをつづけていた。体についたマタタビが気になっていた。龍子はルカの気配を察知した。寝そべっている猫に、メイ起き上がってちょうだい、と働きかけてやった。

「リョーコ、リンと遊んだみたいだね」

?……凜兄ったら、ほんっと猫扱いなんだから……そりゃあ、ネコだけど?強がって見せた。

「君のリンを気遣う気持ちが伝わってくるよ、たしかに君は思念のコントロールができかねるようだね、だいじょうぶ、ふたりは無事任務をこなしてくるさ。僕等が信じてあげなきゃ」

?うん、そうだね、そうだ……?

猫がまたマタチューくんに未練を見せた。龍子は憑依の支配を再び強めて自制する。

「猫にマタタビか、罪なプレゼントだね。さてモンプチのほうには慣れそうかな」
？なんとか……猫の体はチョコレートとコーヒーがダメなのはつらいかな、シフォンケーキとかお菓子は肥満の元みたいだし、アルさんのエスプレッソ、また飲みたいかも？
ふたりは窓辺のテーブルに坐った。
ルカはウインザーチェアに、メイはテーブルの上に。
青いビニールシートのかぶせられた廃墟のような窓辺。
雨がシートを軽快にたたきつづける。それ以外は静かな真夏の夜だった。
「リョーコ、君が猫に憑依してからの霊波動をなんとか捉えようと思念を集中していた、皆で酒を飲んでいたときようやく成功した、君らのカルマの一端が、一端だけれどわかった」
？教えて、ルカ？
「僕が転生したときは、出生と同時に記憶があった。赤子のときからね。使役霊も使えた。生まれながらにしてカルマ人だった。君らはちがった。カルマの開かないという異常な事態が十数年も続いた。だからずっと考えていた、君たちふたりが、もしもカルマの開く前に聖域の外で殺されていたらどうなっていたろうかと。捨肉も呪肉もできないはずだ、ならば肉体を滅ぼされたら、霊体はどうなるのだろう、そう考えていた。そしてあの魔方陣さ、動物だから肉体は滅びなかったが、君の霊体はリンに封印されなかった、これが決定打だったよ」
？……霊視の結果はわかった？　ルカ？
「わかったよ、君は、君とリンの肉体は聖域内でしか滅ぼすことができないんだ、自死はどちらの領域だろうとできない、従って、捨肉も呪肉もできない、する必要がないんだ」
？……それって？
「オオタニ曹長も、ホールデン大尉も死なずにすんだのさ、そもそも、君らは護られる必要がなかったんだ、君たちはすでに何らかの

力に護られている」
ルカはワルサーＰＰＳを出した。テーブルの上におく。
「僕の霊視が正しければ、これで撃とうとも、守護霊を繰り出す必要すらない、君の肉体は死なない、死ねないんだ……聖域の外でならばの話だ」
メイは拳銃を見た。
「信じられないなら、実験してみて欲しい、強制はしないよ」
?あなたを信じる、ルカ……思い当たる節があるから?
「それは？　リョーコ」
?電車で襲われたとき、スカラワンガの使役霊が突然消えたの、ルカの言葉で思いだした?
ふたりはしばらくのあいだ見つめ合った。ルカは拳銃にサイレンサーをつけた。銃口をメイの額に押し当てた。もちろん、龍子は守護霊を招喚してはいない。穏やかな視線をルカに送る。
ルカはトリガーを引いた。――不発だった。
もう一回。不発。ルカは自身、守護霊を招喚した。自分に銃口を向けて撃った。小さな破裂音と共に弾丸が発射された。ルカの守護霊に当たり、真っ平らにつぶれて床に落ちた。
ルカは守護霊を封印し直した。
「こういうことさ、これが、君のカルマの重みなんだ、リンにも間違いなくこの?力?がある」
?……ホールデン大尉になんていったらいいのか、凛兄とアルさんには?……つらいよ、アルさん、あんなにしづゑさんの死を……?
「君のための復讐に燃えるリンには、彼を座視できないカミュウにも秘密にする。知れば必ずこの力を使って傍目からは無茶と思える作戦を平気でするだろう。内外両院がそれを見れば両院にもばれる、両院は躍起になって秘密を探ろうとするだろう、もしもわからなかった場合、君らがチマブエのように反逆する前に、聖域に誘い出して幽閉するよ、未来永劫にね、君らが破門者どもに寝返るくらいだったら、両院ならそう考えるさ、だから君と僕だけの秘密だ」

?……私のカルマとはなんなんだろう、未だに過去の記憶がまったく思い出せないんだ、でもなんだか思うんだ、思い出しちゃいけないんじゃないかって、そのほうがいいのかもって？

「安い同情はしない、君らのカルマはそれだけ重いということだ、それだけのなにがしかの行いを過去にしてしまった報いということだ」

?でもルカ、私は自分の夢をあきらめない、ヒトはいつか理想郷を生み出すとそう信じているから。凜兄がいてくれるかぎり、だいじょうぶ、私は自分のカルマとも闘うよ？

「リョーコは強いな」

?ルカのいうとおり秘密は……なんとか悟られないよう思念を抑えるよ。ねえ、私たち破門者との戦いに勝とうね、ヒトの霊を使って醜い争いをするのを一刻も早く終わらせよう？

「……内外両院には、破門者たちのバラッドの記録が残されてる」

ルカは頬杖をついた。

?バラッド？　バラードじゃなくって？

「うんバラッド、物語や寓意、風刺を込めた口承民謡の一種さ、両院は世界各地で勝利するたび破門者の末路を嘲笑して謡ってきたんだ、だから僕等のほうがこの戦争に敗北したら」

ルカは瞳を窓外に向けた。

「いつか、百年後、数百年後、ヒトの世がつづいていたなら、謡われてるのは僕等のほうかも知れない。僕等のバラッドが」ルカはサングラスを外し、凶眼の瞳を閉じた。眉根が歪む。

メイが心配げに鳴いた。ルカはメイを抱きしめた。息を殺す。苦行に喘ぐ隠者のように。

ふたりは黙った。雨の音だけが廃墟のようなカフェに響いた。

メイは――龍子は窓の下を見た。伊丹爾三郎神父の飛び降りた窓だった。伊丹神父の斃れた地面を見た。伊丹神父の最期のとき、神父のあたたかい思念が龍子に流れ込んだ。伊丹神父は龍子のゆく末を案じて祈ってくれていた。最期の瞬間まで。神父は命を落とした

すべてのひとのために祈りを捧げていた。そして逝った。
詩本龍子も祈った。懸命に祈りを捧げた。伊丹かぬかに祈りを捧げた。
内田広大少年に。赤星剛に。ウイリアム・ホールデンに。
大谷しづゑに。父に。遠藤に。伊丹爾三郎に。
スカラワンガの犠牲となったすべてのひとたちの魂のために祈った。
黒塚凜少尉とアルフォンス・カミュ少佐が無事戻ってこられるように祈った。
?しづゑさん、アルさんをお願いします。神父様、伊丹、お父さん……凜兄を助けてあげてください、凜兄、聖域には決して近づかないで……内田くん、どうかお願い、凜兄も苦しんでいることだけはわかってあげて下さい?
キリストに祈りを捧げたのではない。カルマ人の存在を目の当たりにして、もう、ヒトの創ったどんな神々だろうと信じることはできなかった。もし仮に神がいたならば、自分たちカルマ人のような存在を赦すだろうか? 伊丹神父の信仰を否定するのは苦痛だった。
それでも祈らずにはいられなかった。神々へではなく、人々へ捧げる祈りだ。
死者のための祈り、この世界に、人々の心に残されたわずかな善意を信じるための祈りだ。
そして龍子は想う。いずれ自分もいま以上に悪霊や憑依霊を――いまはまだ彼らの悲鳴に耐えられる――封印するときがくるのだろう。凜兄の苦しみのわかるときがくるのだろう。
やがて、ヒトとの死別にすら平気になって慣れてしまうときがくるのだろう、と。
?……ルカ、私たちのバラッドなんて決して謡わせやしない?
「リョーコ……」
?謡われるのは破門者たちのバラッドのほうだよ?

ガレージの奥に車の整備用具の収納されたキャビネットがあった。アルが隠された仕掛けを起動して、キャビネット全体をスライドさせた。後ろから武器庫が現れた。
「スゲえ」凜はなかに入った。武器の数々を見ていく。英語で押収品と書かれたタグのつけられたマシンガンがあった。全部で十一丁ある。凜はアルに聞いた。
「製薬工場から、ルカの持ち帰ったイングラムM一〇だ、戦利品だ」
「そっか、証拠隠滅だね」
「それもあるが、アイニクと外赦院は慢性的な予算不足なんでね、破門者からの戦利品は貴重な武器の入手経路だ」
「ほんとに、おれたち奴らに勝てるの、心配になってきた」
「内赦院は勝ってるぞ、オレたちもあとに続くんだ」
アルがプジョー四〇三のドライバーズシートに、凜がナビシートに坐った。
「ケータイの電池切れに注意しろ、予備充電器があるからこまめに充電してくれ、糧食はコンビニで現地調達だ、リン、絶対に領収書もらうのわすれるな」
「……わかった、わかりました」
アルはリモコンでガレージのシャッターを開けた。携帯のイヤホンマイクを片耳にセットする。凜も支給されたマイクをつけた。暑いといってTシャツの下の汗をハンドタオルで拭いた。
エアコン、つけないんだ、凜がこぼす。正式な出撃命令が下るまでな、アルは素っ気ない。
「アル少佐、理由はいわなくてもわかるからいわなくてもいいです」
「出撃まではアルでいい」アルがいつものニヤリとした笑いを浮かべた。
あと何分？　と凜。数分で日本戦区の第二軍団司令部から指令がくる、アルが答えた。
「藤堂院長から命令がくるんじゃないの」
「本来院長とは滅多に会話はできないんだ、雲の上の人だからな」

なるほど、凜はうなずいた。今回はそれだけ特別な事態だったってわけだ。
外はあいかわらず雨が降り続いていた。開いたシャッターから雨に濡れるカエデ林が見える。
凜はヘッドレストにもたれた。プジョーのシートは外見とは裏腹に上質で心地よかった。
「ねえアル、おれ、やってやるよ、龍子の仇、とってやるんだ。破門者どもを片っ端から封印してやるんだ、おれ、容赦しないから」
「そうか」
「そうだよ、さしあたっては悪霊がちょっと足りないかな、あと憑依霊、こいつが全然足りないんだ、心霊スポットでもどこでもいいよ、死霊狩りにいこうよ、アル」
「いずれな」
「ヒトって儚いよな、死んだらカルマ人の、おれらの道具にされちゃうんだもんな」
凜は、精一杯虚勢を張ってみせた。体の奥底で、内田少年の悲鳴が強くなってきていた。ルカの講義にあった。闘いを前にすると、ひときわ悪霊と憑依霊たちは、異次元から解放しろと雄叫びを上げるのだと。封印された少年の悪霊は、ここから出してと懇願してくる。惨めだと。自分はこんなに醜くなってしまったと嘆き悲しみ、訴えてくる。
――そして。おまえを恨んでやる、内田少年はいってくる。決しておまえを許さないと。
悲鳴には耐えられる。この怨嗟の声の前には、凜の精神は保ちそうになかった。
「ねえアル、ヒトってさ死んだら必ず自由霊になるの？」
「正確な統計はないが自由霊になるのはこの世に何らかの執着を残して逝ったヒトに限る」
「それ以外は？」
「霊的エネルギーは、解放されて地球のすべての動植物といっしょ

になるそうだ、そこからまた新たな生命が誕生する」
「……じゃあ、さしあたって人間のまま人生楽しめるおれたちは勝ち組って奴かな」
耳を聾するほどの怨嗟の声が、やまない。だまれ、頼むから黙ってくれ、心のなかで叫んだ。
「勝ち組先輩、後進のおれになにかアドバイスをひとつよろしく」
「……」アルは前を向いたままだった。両手と顎をステアリングに預けて押し黙っていた。
雨の音に耳を傾けてでもいるのだろうか。
「ねえ、なにかないの、アル」
「オレたちは自由霊を数値で扱ってる、ヒトの魂を数値にして闘ってる」
「それが戦争だよ、一将功成してナントカって奴だ。ヒトもみんなやってるよ、政治家は戦争って名のゲームでヒトを殺してる、金持ちは、マネーゲームで破産したヒトを自殺に追い込んでる、子供たちは携帯ゲームで化け物殺して、将来のヒト殺しに備えて予行演習の真っ最中だ」
凜はめいっぱい嘲笑ってやろうとして、失敗した。顔が引きつる、うまく呼吸ができない。
「――敬意を」アルは凜を見た。正面から見た。
凜の抱えた復讐心を、虚無を見透かすように。鳶色の眼(まなこ)に、唯ひたすら魂を込めて。
「……え？」
「オレたちは、不老不死だ、けれどヒトの死霊がいなけりゃなにもできない。自分ひとりじゃ、無力だ、ただ永遠に生き続ける、それだけだ」
「……」
「秦の始皇帝はそれを願った。死ねるから願えるんだ。オレは死ねない」アルは唇を噛んだ。
「だから、思うんだ、ときどき死とは何か、ってな。ヒトは、死ね

る。オレもふと考えるんだ、ヒトに生まれていたら、ヒトの死んでいくのを見続けずにすんだはずだってな。傲慢な考えだ。死ねないオレたちが、死にたくなかった死者の霊を使って戦争してるんだからな」
「……アル」凜はアルを直視できなくなった。
「だからリン、頼む、死者に敬意を払ってやってくれ、使役霊たちに、自由霊たちにも、そうならずに地球に還った魂たちにも」
「……うん」
「守護霊だけじゃない、悪霊にも」
「うん」
「憑依霊たちにも」
「わかった」
「破門者たちの使役霊にもだ、せめて、敬意を払って葬ってやってくれ」
「そうするよ」
「約束してくれ、リン」
「約束するよ、アル」
敬意を――。凜は少年に語りかけた。両眼を閉じて念じる。内田くん、君は醜くなんかないよ、と。いっしょに闘って欲しいと願う。無念に散った死者へせめてもの敬意の念を……。
……スカラワンガに憑依され、魂を侵されていく内田広大少年の恐怖の記憶が凜の心に流れ込んできた。少年は激痛に悲鳴を上げていた。凜は手をさしのべる。力の限り手を伸ばす。凜は少年の手をつかんだ。悲痛に暴れる少年の体を抱きしめた。精一杯、渾身の力を込めて。
スカラワンガの嘲りの声が凜に、少年に襲いかかる。
――失せろ。凜は、死んでなおも少年を苦しめるスカラワンガの記憶をなぎ払った。
悲鳴は消えなかった。出せといってくる。けれど、おまえを恨むという声が一瞬やんだ。

あれほど頭の割れんばかりに響いてきていた少年の憎悪の声に戸惑いの色が混ざった。
生を断ち切られた少年のやり場のない憎悪が、凜の心を引き裂こうとしていた心の声がすこしずつ凜から離れていった。
――怨嗟の声は止みはしなかった。
そのかわり少年は憎しみの声を凜からすこしだけずらしてくれた。
凜はようやく呼吸ができるようになった。
わななくように吐息をついた。全身に汗をかいていた。強張った体をほぐす。プジョーのシートにぐったりと体を預けた。きつく閉じていた眼(まなこ)を薄く開いた。
雨が相変わらず降り続いていた。濡れた坂道がナトリウム灯に照らされ光っていた。
額の脂汗を手で拭った。気づくと、アルが気遣うように自分を見ていた。
「助かったよ、アル」凜は大きく深呼吸をした。身の置き場所のない恐怖感が徐々に消えた。
アルは微笑みを浮かべた。
永い歳月、この痛みに耐えてきた者の、それは哀しい微笑みだった。
「ありがとう」
アルは応えるかわりに、凜のきつく握りしめられた拳に、ぽん、と手を添えてやった。
――イヤホンマイクから女性の声が聞こえてきた。最初に英語で、次に同時通訳で別の女性の日本語でしゃべる声が聞こえてきた。出撃準備は整ったかどうかを訊ねてくる。
ふたりは応答した。アルがプジョーのエンジンをかけた。重低音の唸りが響いてくる。
ラジオから洋楽が流れてきた。ジョン・レノンだった。
「龍子の好きな歌だ、これ、名前が思い出せないな、なんだったろう、わかる？　アル」

アルは教えてやった。凜は礼をいった。
「お礼ついでに、ジョン・レノンのいい言葉教えてあげるよ」
凜は額から頸筋にかけての汗を拭き、シートベルトを締めながらいった。
「人間の根本的な才能って、自分になにかができると信じること、なんだってさ」
「いい言葉だ」
「いいでしょ、だからおれ、あきらめないんだ、いつか龍子の霊と逢うんだ、それが夢だ」
凜はウオレットチェーンにつながった財布を開いた。〈ベイスカイ横浜〉のチケットを見た。捨てるつもりはなかった。たとえ有効期限の切れたあとだろうと。
護ってやれなかった。だから、闘う。龍子のために。奪われたものを取り戻すために。
「……オレについてきてくれ、リン」アルの顔には陰りがあった。訴えかけるなにかが。
「ついてくよ、アル」チケットを財布にしまう。
「頼むぜ、ベリアル」
「そっちこそ、エクソシスト」
イヤホンマイクから騒然とした司令部の喧噪が聞こえてきた。
『――カンプグルッペ・カミュ、出撃準備は?』ノイズ混じりの女性の声。
「完了した」アルが応答する。
『本作戦詳細は現地にて秘蹟認定局調査員より通達します。出撃してください、目的地は――』
凜がカーナビに情報を入力していく。
「オレからも礼にリー師祖の小話をひとつ、師祖とアメリカ時代に飯喰ったときに聞いた話だ」
「一週間前だったら、絶対信じなかったよそれ、ネタにすら思われないって」

「ある日黒人の若造が師祖に喧嘩を挑んだ。師祖は笑って相手にしない、若造は怒って師祖の家のドアに赤いペンキでいたずら書きしたんだ」
「それ途中まで聞いたことがある、ラジオでやってたっけ、つづきは？」
「師祖はそれを見たら怒るどころか笑い転げだしたんだ、ドアになにが書かれてあ――」
『カンプグルッペ・カミュ、秘蹟認定局より事前通達あり、回線つなげます、どうぞ――』
女性オペレーターに替わって中年男性の声が聞こえてきた。認定局調査員だ。
アルが調査員と英語で会話する。緊迫したやりとりだった。
アルは会話しながらプジョーを急発進させた。アルが言葉を切った。
「先は長い、オチはあとで聞かせてやる、いくぞ、クロヅカ少尉」
「ＯＫッ、カミュ少佐」
アルは再び調査員の報告を聞きながら、ヘッドランプをハイビームにした。闇のなかで降り続く雨が煌めいた。プジョー四〇三はふたりを乗せて坂道を駆け下りていった。
Ｖ型一〇気筒ＤＯＨＣエンジンが、ツインチャージャーから息吹を吹き込まれて加速する。
狩人と化した獣が、雨に濡れた路面の上で咆吼をあげた。
深夜の車道を疾走していく。ハイビームの照らし出す先に車の影はない。
ただ雨だけがふりつけてくるのみだ。
ふたりのゆく手をさえぎるものは、なにもなかった。

～おわり～

7 “せめて、敬意を”（後書き）

最後までおつきあいいただき本当にありがとうございました。

友絵少尉　２０１０年１１月３日

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1599o/

僕等のバラッド

2010年11月3日06時10分発行